

奈良県 <sup>ごせ</sup>御所市

<sup>こ</sup>巨 <sup>せ</sup>勢 <sup>やま</sup>山 古墳群 II.

—御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査1—

昭和62年7月

御所市教育委員会

## 序 文

全国でも数すくない大古墳群である巨勢山古墳群の第1次調査は60年1月22日～8月16日までの間（実働115日間）、第2次調査は61年2月3日～3月31日までの間（実働31日間）を要して本市教育委員会の手で実施しました。

古墳群の中で第1次調査の対象となったものは、321号墳、322号墳、323号墳、324号墳の各古墳です。第2次調査の古墳は243号墳でした。以上の5古墳は築造状況や発掘出土品等から古墳時代から飛鳥時代にかけて、5世紀後葉から7世紀中葉までにつくられたものと考えられます。今回の発掘調査を通して見たとき、古墳は現代に語りかけているように思えてなりません。

わたくしは、こんどの5古墳の時代背景を見たとき、わが国を取り巻く内外情勢が激動の世紀であったと考えています。5世紀後葉に渡来人が漢字、儒教、須恵器などの文化を伝え、日本の倭王が南朝に使いを送り、6世紀には百済から仏教が伝わり、後葉には蘇我氏が物部氏をほろぼし、飛鳥文化が栄え、聖徳太子が摂政となられた時代です。さらに7世紀に入り、中葉までに17条憲法の制定、冠位12階が定められ、法隆寺が建立され、小野妹子が隋に遣わされ、大化改新を見た時代です。

大陸では、6世紀後葉には隋が中国を統一したと思うと7世紀初期にはほろび、唐がおこってきます。そして後葉には百済、高句麗がほろび、新羅が朝鮮半島の統一をはじめていきます。

今回の発掘調査では323号墳に教えられるところが多いとおもいます。わが国が大和王権の統一をめざして進んでいる時代で、8世紀になって初めて古代統一国家の完成を見るわけです。

横口式石槨といわれる本墳の整美な石室築造の計測も、すでに唐尺1尺=0.30mを1単位とみられる計測法も珍らしく、こんど古墳築造の計測学に委ねたいとおもいます。

この調査報告に際して、奥田 尚 刑部小学校教諭、松井 章 奈良国立文化財研究所技官、安田 博幸 武庫川女子大学薬学部教授、井村 由美 同薬学部助手の先生方に高い視点からご検証を賜りましたことにたいし、深甚なる敬意をのべるものであります。また市教育委員会・藤田和尊学芸員を中心に調査員のみなさま方が、きびしい冬季の気象条件下、あるいは酷暑炎熱の下で営々と発掘調査、研究に取り組み、古代社会にたくましく生きた人達が古墳をつくるとき残した土の痕跡も見逃すまいと努力され、このような立派な成果をまとめていただいたことに深謝いたします。

御所市教育委員会  
教育長 谷 村 忠 敬

## 例 言

1. 本書は、御所市と奈良日日新聞社との共同事業「御所市みどり台総合開発事業」に伴い、巨勢山古墳群を調査したもののうち、第1次・第2次発掘調査の報告書である。
2. 調査の組織及び参加者は次の通りである（当時）。

### 〔調査主体者及び事務局〕

御所市長	芳本基二
御所市教育委員会教育長	谷村忠敬
教育次長	田仲 護
社会教育課	木村義明・植木理史・上西義次・大林志津代・ 原田一馬・橋本直樹
御所市企画課	植田武司・杉村 進・森村元一
調査指導	奈良県立橿原考古学研究所 奈良国立文化財研究所 奈良県教育委員会文化財保存課

### 〔調査参加者〕

調査担当 御所市教育委員会技術職員 藤田和尊

作業員 田中繁二、森本 勇、辰己繁春、西村忠幸、新宮正義、川田徳七郎、兩作治郎、井上 学、森谷勇治、西川市太郎、川本久雄、出口義雄、井上安春、富永幸義、深谷喜章、井上静雄、栗本秀雄

調査補助員 三野保之・尼子奈美枝・向井一雄・辻合靖司（関西大学）、木許 守・横出昌之（龍谷大学）、吉村公男（同志社大学）、奥田国光・渡海 恒（京都産業大学）、西村之宏（近畿大学）、糸魚川信夫・芳田純治（大阪工業大学）、小原 忠（高野山大学）、西城壽朗（福井工業大学）、木村和代（京都外国語大学）、田中ひとみ（園田女子大学）

3. 調査期間は次の通りである。

第1次調査 昭和60年1月22日～昭和60年8月16日（実働115日）

第2次調査 昭和61年2月3日～昭和61年3月31日（実働31日）

4. 遺物整理・報告書作成には藤田のほか調査補助員全員および田仲伸王（関西大学）、植田隆司（龍谷大学）、藤村藤子、尾上昌子があつた。
5. 本書の執筆分担は目次に記す通りであり、編集は藤田が行なつた。
6. 整図は原則として各執筆者が主担したが、第30図は尼子の手になる。また、遺構・遺物の撮影は藤田が行なつた。
7. 自然科学的分野からの考察として、奥田尚氏、松井章氏、安田博幸博士・井村由美氏（原稿到着順）から玉稿を頂き、第5章として掲載した。
8. 文献註、補註は、第5章を除き、各章ごと末尾に付した。
9. 出土土器観察表は第3章の末尾に一括して掲載した。
10. 出土遺物実測図の縮尺は、土器については $\frac{1}{2}$ 、鉄製品については $\frac{1}{2}$ または $\frac{1}{3}$ に統一した。文中の遺物番号は押図、図版中の番号とも全て統一した。
11. 本書中で用いた“北”は、全て磁北であり、真北はそれより約3度東へずれている。

# 本文目次

序文……御所市教育委員会

教育長 谷村 忠 敬

例言

## 第1章 位置と環境

第1節 地理的環境……………(藤田) …… 1

第2節 歴史的環境……………(植田) …… 1

第3節 既応の調査……………(藤田) …… 3

第2章 調査の契機と経過……………(藤田) …… 10

## 第3章 各古墳の調査

### 第1次調査

第1節 位置と調査方法……………(藤田) …… 15

### 第2節 巨勢山321号墳

1. 位置と墳丘・周溝……………(尼子) …… 15

2. 周溝内遺物出土状態……………(藤田) …… 16

3. 周溝内出土遺物……………(尼子) …… 18

4. 土 壌……………(藤田・尼子) …… 20

5. 主体部……………(尼子) …… 21

6. 主体部内遺物出土状態……………(尼子) …… 21

7. 主体部内出土遺物……………(尼子) …… 21

### 第3節 巨勢山322号墳

1. 位置と墳丘・周溝……………(横出) …… 24

2. 主体部1……………(横出) …… 24

3. 主体部2……………(横出) …… 28

4. 主体部2遺物出土状態……………(横出) …… 29

5. 主体部2出土遺物……………(尼子) …… 29

第4節 巨勢山323号墳……………(藤田) …… 31

1. 位置と墳丘…………… 31

2. 墓 道…………… 35

3. 横口式石槨…………… 36

堆 積



	構造と調整	
	4. 石室内遺物出土状態	40
	5. 出土遺物	42
第5節	巨勢山324号墳	
	1. 位置と墳丘・周溝	(横出) 47
	2. 周溝内遺物出土状態	(横出) 49
	3. 周溝内出土遺物	(尼子・藤田) 50
第6節	その他の遺構・遺物	(藤田) 52
	第2次調査	
第7節	巨勢山243号墳	
	1. 位置と墳丘	(木許) 53
	2. 主体部1および下部土壌	(木許) 53
	3. 下部土壌遺物出土状態	(藤田) 57
	4. 主体部2	(木許) 57
	5. 出土遺物	(尼子) 57
第4章	ま と め	(藤田) 79
第1節	調査古墳の概要	79
第2節	巨勢山古墳群と第1次調査地の古墳	81
第3節	巨勢山323号墳石室の築造企画	83
第5章	考 察	
	奥田 尚「巨勢山323号墳の使用石材について」	87
	松井 章「巨勢山323号墳 石室内出土の動物遺存体」	88
	安田博幸・井村由美「奈良県御所市巨勢山323号墳より 出土した漆喰の化学分析」	91
	安田博幸・井村由美「奈良県御所市巨勢山321号墳の土壌より 検出された赤色ならびに黒色を示す土壌部分の材質定量分析」	96

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 <sup>*</sup> ( $S. = 1/50,000$ )	折り込み
第2図	巨勢山古墳群分布図(一部)と調査位置	4
第3図	第1次調査 現地説明会風景	10
第4図	巨勢山323号墳調査風景	13
第5図	巨勢山321号墳 墳丘測量図(調査前、 $S. = 1/200$ )	16
第6図	巨勢山321号墳 墳丘測量図(調査後、 $S. = 1/200$ )	16
第7図	巨勢山321号墳 墳丘断面実測図	17
第8図	巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内遺物出土状態	折り込み
第9図	巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内出土遺物( $S. = 1/3$ )	19
第10図	巨勢山321号墳 土壌実測図	20
第11図	巨勢山321号墳 主体部実測図	22
第12図	巨勢山321号墳 主体部土層断面図	22
第13図	巨勢山321号墳 主体部内出土遺物( $S. = 1/3$ )	23
第14図	巨勢山322号墳 墳丘測量図(調査前、 $S. = 1/200$ )	25
第15図	巨勢山322号墳 墳丘測量図(調査後、 $S. = 1/200$ )	25
第16図	巨勢山322号墳 墳丘断面土層図	25
第17図	巨勢山322号墳 主体部1 検出状況	26
第18図	巨勢山322号墳 主体部1	26
第19図	巨勢山322号墳 主体部1 断面土層図	27
第20図	巨勢山322号墳 主体部1 排水溝内出土 土製丸玉( $S. = 1/2$ )	27
第21図	巨勢山322号墳 主体部2 実測図	28
第22図	巨勢山322号墳 主体部2 土層断面図	28
第23図	巨勢山322号墳 主体部2 出土遺物( $S. = 1/3$ )	30
第24図	巨勢山322号墳 主体部2 出土須恵器法量	31
第25図	巨勢山323号墳 墳丘測量図(調査前、 $S. = 1/200$ )	32
第26図	巨勢山323号墳 墳丘測量図(調査後、 $S. = 1/200$ )	33
第27図	巨勢山323号墳 墳丘断面図( $S. = 1/200$ )	34
第28図	巨勢山323号墳 墳丘土層断面図	折り込み
第29図	巨勢山323号墳 石室内土層断面図	36
第30図	巨勢山323号墳 横口式石槨実測図( $S. = 1/20$ )	折り込み
第31図	巨勢山323号墳 石槨部左側石・天井石間 漆喰残存状況	38

第32図	巨勢山323号墳	横口式石柩細部写真	39
第33図	巨勢山323号墳	石室内再利用面遺物出土状態	41
第34図	巨勢山323号墳	石室内再利用面出土遺物 (S. = 1 / 3)	42
第35図	巨勢山323号墳	墳丘周辺および墳丘盛土内出土遺物	43・44・45
第36図	巨勢山323号墳	石室内出土その他の遺物 (S. = 1 / 3)	46
第37図	巨勢山324号墳	墳丘測量図 (調査前、S. = 1 / 200)	47
第38図	巨勢山324号墳	墳丘測量図 (調査後、S. = 1 / 200)	47
第39図	巨勢山324号墳	墳丘断面実測図	48
第40図	巨勢山324号墳	墳丘背後周溝内遺物出土状態	49
第41図	巨勢山324号墳	墳丘背後周溝内出土遺物 (S. = 1 / 3)	51
第42図	土墳1	測量図	52
第43図	西地区斜面出土銅銭拓影		52
第44図	巨勢山243号墳	墳丘測量図 (調査前、S. = 1 / 200)	54
第45図	巨勢山243号墳	墳丘測量図 (調査後、S. = 1 / 200)	55
第46図	巨勢山243号墳	墳丘土層断面図	折り込み
第47図	巨勢山243号墳	主体部1実測図	56
第48図	巨勢山243号墳	下部土壌及び遺物出土状態	折り込み
第49図	巨勢山243号墳	主体部2実測図	58
第50図	巨勢山243号墳	下部土壌内出土遺物 (S. = 1 / 3)	59
第51図	巨勢山323号墳石室の築造企画		84

別添図1	巨勢山古墳群分布図 (S. = 1 / 5,000)
別添図2	第1次調査地平板測量図 (調査前、S. = 1 / 200)
別添図3	第1次調査地平板測量図 (調査後、S. = 1 / 200)

## 表 目 次

第1表	既応調査古墳一覧	6
第2表	巨勢山322号墳 主体部1排水溝内出土 土製丸玉計測表	27
第3表	巨勢山323号墳 扉石(緑泥片岩)片 包含状況	37
	出土土器観察表	61

## 図 版 目 次

- 図版 1 第 1 次調査地（西寺田字墓谷）全景航空写真
- 図版 2 1. 第 1 次調査地航空写真（北東から）  
2. 第 1 次調査地航空写真（西から）
- 図版 3 1. 第 1 次調査地航空写真（東から）  
2. 第 1 次調査地航空写真（南から）
- 図版 4 1. 調査地最高所より東北方を望む  
2. 調査地最高所より南方を望む
- 図版 5 1. 調査地最高所より西方を望む  
2. 調査地最高所より北方を望む
- 図版 6 1. 東方尾根及び巨勢山321号墳（先端部）（調査前・西から）  
2. 巨勢山321号墳 墳丘検出状況（西から）
- 図版 7 1. 巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内 遺物出土状態（東から）  
2. 巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内 遺物出土状態（東から）
- 図版 8 1. 巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内 遺物出土状態（西から）  
2. 巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内 遺物出土状態（南から）
- 図版 9 1. 巨勢山321号墳 主体部検出状況（東から）  
2. 巨勢山321号墳 主体部（東から）
- 図版 10 1. 巨勢山321号墳 主体部（西から）  
2. 巨勢山321号墳 主体部完掘状況（東から）
- 図版 11 1. 巨勢山321号墳 主体部 1（北から）  
2. 巨勢山321号墳 主体部 1 墓壇完掘状況（東から）
- 図版 12 1. 巨勢山321号墳 主体部 1 完掘および土壌検出状態（西から）  
2. 巨勢山321号墳 主体部 1 と土壌（東から）
- 図版 13 1. 巨勢山321号墳 土壌（東から）  
2. 巨勢山321号墳 土壌（南から）
- 図版 14 1. 巨勢山321号墳 土壌埋土中の焼土塊  
2. 巨勢山321号墳 土壌完掘状況（東から）
- 図版 15 1. 巨勢山321号墳 主体部と土壌完掘状態（西から）  
2. 巨勢山321号墳 主体部と土壌完掘状態（西から）
- 図版 16 1. 西地区および巨勢山322号墳（先端部）  
2. 巨勢山322号墳 墳丘検出状況（東から）

- 図版17 1. 巨勢山322号墳 墳丘検出状況(東から)  
2. 巨勢山322号墳 主体部2(西から)
- 図版18 1. 巨勢山322号墳 主体部2検出状況(東から)  
2. 巨勢山322号墳 主体部2 遺物出土状態(北から)
- 図版19 1. 巨勢山322号墳 主体部1 調査状況(南から)  
2. 巨勢山322号墳 主体部1および排水溝(西から)
- 図版20 1. 巨勢山323号墳 調査前(東から)  
2. 巨勢山323号墳 調査前(南から)
- 図版21 1. 巨勢山323号墳 調査前(西から)  
2. 巨勢山323号墳 調査前(北から)
- 図版22 1. 巨勢山323号墳 調査前(南から)  
2. 巨勢山323号墳 羨道部天井石(調査前)
- 図版23 巨勢山323号墳 墳丘東トレンチ 墓壇および石柵背面
- 図版24 巨勢山323号墳 墳丘北トレンチ 石柵背面
- 図版25 巨勢山323号墳 墳丘西トレンチ 石柵背面
- 図版26 1. 巨勢山323号墳 羨道部天井石陥落状況(南から)  
2. 巨勢山323号墳 羨道部天井石陥落状況(南から)
- 図版27 1. 巨勢山323号墳 羨道部天井石陥落状況(東から)  
2. 巨勢山323号墳 羨道部天井石陥落状況(西から)
- 図版28 1. 巨勢山323号墳 羨道部天井石陥落状況(南から)  
2. 巨勢山323号墳 羨道部天井石陥落状況(南から)
- 図版29 1. 巨勢山323号墳 羨道部中世再利用面 遺物出土状況(西から)  
2. 巨勢山323号墳 羨道部中世再利用面 遺物出土状況(南から)
- 図版30 1. 巨勢山323号墳 中世再利用面 石柵部埋没状況(南から)  
2. 巨勢山323号墳 中世再利用面 検出状況(南から)
- 図版31 1. 巨勢山323号墳 中世再利用面(南から)  
2. 巨勢山323号墳(南から)
- 図版32 巨勢山323号墳 横口式石柵(南から)
- 図版33 巨勢山323号墳 横口式石柵(南から)
- 図版34 巨勢山323号墳 横口式石柵石柵部(南から)
- 図版35 1. 巨勢山323号墳 石柵部東側石下方渗喰陥入状況(南から)  
2. 巨勢山323号墳 墓道検出状況(南から)
- 図版36 巨勢山323号墳 墓道検出状況(南から)

- 図版37 1. 巨勢山323号墳 南方斜面 調査前(北から)  
2. 巨勢山323号墳 南方斜面 墓道(北から)
- 図版38 1. 巨勢山323号墳 南方斜面 墓道(北から)  
2. 巨勢山323号墳 南方斜面墓道 階段状遺構(西から)
- 図版39 1. 巨勢山323号墳 南方斜面 調査前(東から)  
2. 巨勢山323号墳 南方斜面墓道 階段状遺構(東から)
- 図版40 1. 巨勢山323号墳 全景(南から)  
2. 巨勢山323号墳 墳丘背後全景(北から)
- 図版41 1. 北地区および巨勢山324号墳(先端部)  
2. 巨勢山324号墳 周溝および墳丘検出状況
- 図版42 1. 巨勢山324号墳 周溝および遺物検出状況(南から)  
2. 巨勢山324号墳 周溝内遺物出土状況(北から)
- 図版43 1. 巨勢山324号墳 周溝内遺物出土状況(北から)  
2. 巨勢山324号墳 周溝内遺物完掘状況(北から)
- 図版44 巨勢山324号墳 完掘状況(南から)
- 図版45 巨勢山古墳群西南部航空写真
- 図版46 1. 第二次調査地 航空写真(西から)  
2. 第二次調査地 航空写真(東から)
- 図版47 1. 巨勢山243号墳 航空写真(西から)  
2. 巨勢山243号墳 航空写真(真上から)
- 図版48 1. 巨勢山243号墳 南方土取状況  
2. 巨勢山243号墳 南西方尾根土取状況
- 図版49 1. 巨勢山243号墳より南方を望む  
2. 巨勢山243号墳より南西を望む
- 図版50 1. 巨勢山243号墳(北から)  
2. 巨勢山243号墳 墳丘上から北を望む
- 図版51 1. 巨勢山243号墳 東部傾斜変換部  
2. 巨勢山243号墳 墳丘上から東を望む
- 図版52 1. 巨勢山243号墳 盗掘壕調査前(北から)  
2. 巨勢山243号墳 主体部1・2検出状況(北から)
- 図版53 1. 巨勢山243号墳 主体部1・2検出状況(北から)  
2. 巨勢山243号墳 主体部1・2検出状況(北から)
- 図版54 1. 巨勢山243号墳 主体部1検出状況(南から)

2. 巨勢山243号墳 主体部2 検出状況(北から)

- 図版55 1. 巨勢山243号墳 下部土壌検出状況(北から)  
2. 巨勢山243号墳 下部土壌(北から)
- 図版56 巨勢山243号墳 下部土壌(北から)
- 図版57 巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内出土遺物(S.=約1/3)
- 図版58 巨勢山321号墳 主体部内出土遺物(S.=約1/3)
- 図版59 巨勢山322号墳 主体部1 排水溝内出土 土製丸玉(S.=約1/1)
- 図版60 巨勢山322号墳 主体部2内出土遺物(S.=約1/3)
- 図版61 巨勢山322号墳 主体部2内出土遺物細部写真
- 図版62 巨勢山323号墳 石室内再利用面出土遺物(S.=約1/3)
- 図版63 巨勢山323号墳 墳丘周辺および墳丘盛土内出土遺物(S.=約1/3)
- 図版64 巨勢山323号墳 石室内出土その他の遺物
- 図版65 巨勢山324号墳 墳丘背後周溝内出土遺物(S.=約1/3)
- 図版66 巨勢山243号墳 下部土壌内出土遺物(S.=約1/3)

本

文



## 第1章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

御所市は、奈良盆地の西南部に位置する。西部には金剛山・葛城山の峻峰がそび立ち、東南部には竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵などの丘陵が起伏し、それらの南をいわゆる中央構造線が走って吉野川河谷と境している。北部は低平な奈良盆地の一部を占めているが、葛城川・曾我川の上流部は南方に入り、前記の山地の間に渓谷をつくっている。

さて、奈良盆地と吉野川河谷の間にある竜門山地は主として花崗岩類よりなり、東方より西方に向うにしたがって高さを減じ幅も狭くなる。本市の東部はちょうどその西端付近にあたる丘陵地帯となっている。

金剛山の東方葛城川上流の谷と、さらに東側の曾我川の谷の間に巨勢山丘陵があり、曾我川の東側には高取山付近より次第に低くなった山地の端が奉譲山などで終わっている。また、南方吉野川流域との分水嶺には阿田峯の低い台地がある。

巨勢山丘陵は西は葛城川の谷、東は曾我川の構造谷で切られてほとんど独立した丘陵となって南北約5 kmに細長く延びている。中央部には巨勢山の高社山(295 m)を始め、朝町山(286 m)、さらに北方の盆地に細く延びた先端に国見山となっている。南は唐笠山(323 m)を経て、重阪峠(202 m)で終わっている。地質は、傾家複合岩類の葛城石英閃緑岩となっている。

### 第2節 歴史的環境

御所市における縄文時代の遺跡として、後期の梅羅遺跡<sup>(1)</sup>、玉手遺跡<sup>(2)</sup>等が知られているが、昭和61年度、小林地区改良事業に伴う発掘調査によって、後期初頭の小林遺跡<sup>(3)</sup>の存在を確認した。本遺跡は葛城山東麓に位置し、中津式の縄文土器片と共に、原石面を多く残す多数のサヌカイト石核、同削器、同ピエス=エスキュー、砂岩製印石等を検出した。これらから、当遺跡が二次的な加工を行う石器製作場であったと考えられる。

弥生時代の遺跡として、葛城川流域に成立したのものには、中核の存在をなす鴨部波遺跡<sup>(4)</sup>の他、玉手遺跡<sup>(5)</sup>、池ノ内遺跡<sup>(6)</sup>がある。また、小林遺跡<sup>(7)</sup>においては中期後葉に一辺10mの方形周溝墓が築かれた。調査ではコーナーを3箇所確認し、うち1箇所で溝のとぎれを検出した。市内で方形周溝墓を認めたのはこれが初めてである。

葛城川流域の高地性集落として吐田平遺跡<sup>(8)</sup>、葛城山頂遺跡<sup>(9)</sup>、境谷遺跡<sup>(10)</sup>がある。曾我川流域で営まれるものには今住遺跡<sup>(12)</sup>、古瀬遺跡<sup>(13)</sup>が挙げられ、高地性集落で国見山遺跡<sup>(14)</sup>、本馬丘遺跡<sup>(11)</sup>がある。

これら全ての弥生時代の遺跡は以後衰退を示し、後期中葉にはその営みを終える。そして弥生時代後期後半以降、前代と隔絶した形で名柄遺跡<sup>(15)</sup>が成立する。古墳時代前期には室・中西遺跡<sup>(16)</sup>

(16) が現れる。この時期の市内における遺跡の絶対数は少ないのであるが、昭和61年度の幸町地区改良事業に伴う調査によって楢原遺跡<sup>(17)</sup>を明らかにした。当遺跡において、畿内第V様式、庄内式土器、布留式土器の一括資料を得ている。

5世紀前半、大形前方後円墳である室・宮山古墳<sup>(18)</sup>が築造される。本墳は、後円部主体部の壜穴式石室内に長持形石棺を有し、鏡片、武器類、石製品等の遺物を出土している。一辺63mの方墳である室・ネコ塚古墳<sup>(19)</sup>は本墳の陪冢的位置を占め、遺物より比定される築造年代を主墳に併行させる。

室・宮山古墳の次に首長墓として位置づけられるのが掖上鎌子塚古墳<sup>(19)</sup>(20)である。埋葬主体に長持形石棺を想定されている大形前方後円墳である。本墳は径約30mの陪冢的円墳を周濠内にとりこんだ形で有する。その後の首長墓の系譜は、新庄屋敷山古墳<sup>(20)</sup>(21)、飯豊陵古墳<sup>(21)</sup>(22)、二塚古墳<sup>(22)</sup>(23)とたどれよう。

さて、室・宮山古墳以降の首長墓出現を契機として多くの群集墳が成立するがここでその個々を概観してみることとする。寺口和田古墳群<sup>(23)</sup>(24)は寺口の北側に派する支尾根に13基で構成される。4世紀末ないし5世紀初めに13号墳の築造をもって群形成が開始され、7世紀後半まで造営された。主体部は木棺直葬を中心として小壜穴式石室、横穴式石室等である。本古墳群の東側にある新池の周囲に約10基の古墳<sup>(24)</sup>がある。これらは寺口千塚・新池支群、寺口新池古墳群などと呼称は様々であるが、いずれにしても寺口和田古墳群(24)中に位置づけるのが妥当であろう。また寺口大池遺物散布地<sup>(25)</sup>において、小札飯留骨片、革綴短甲片、三角板飯留短甲片、頸甲片、肩甲片などが採集されており、これらの遺物は5世紀代のものである。

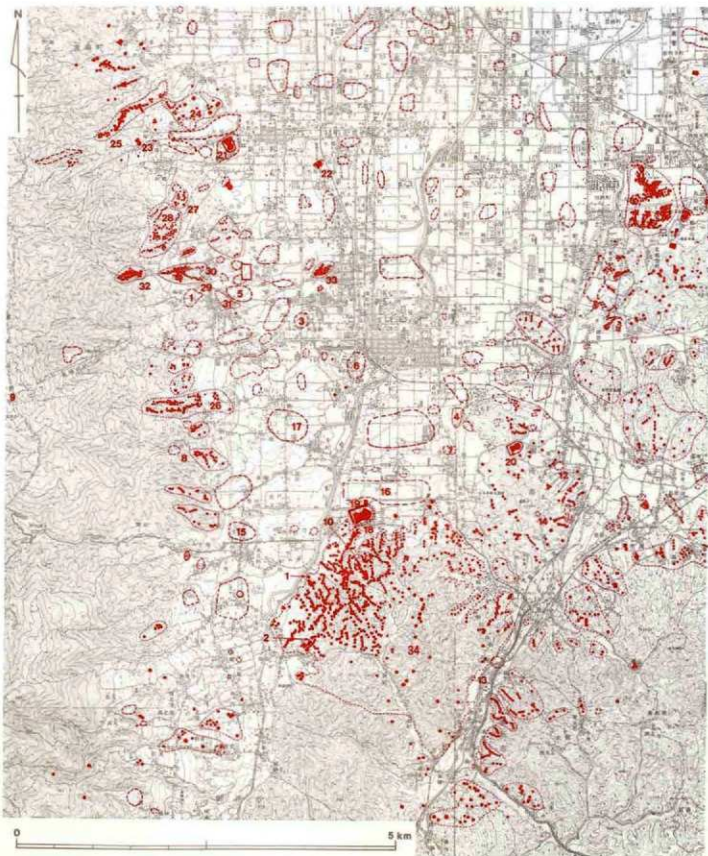
寺口千塚古墳群<sup>(25)</sup>(25)は寺口の北方尾根上に位置し、前方後円墳1基を含む約60基からなる後期群集墳である。多くはその主体を横穴式石室とするみられている。

石川古墳群<sup>(27)</sup>(26)は葛城山腹の尾根の稜線上に、1基の前方後円墳を含む約70基の古墳で群を形成する。うち10基のみが横穴式石室を有し、群として中心とする埋葬主体は木棺直葬である。

火野谷山古墳群<sup>(28)</sup>(27)は寺口字岩谷の尾根上に位置し、2基の前方後円墳と10基の円墳で構成される。5世紀前半代に群形成が始まり、6世紀まで継続する。本古墳群の主流をなす内部主体は木棺直葬であるが、8号墳では小壜穴式石室を主体部とし、3号墳では木棺直葬の2棺を主体にしつつ、墳丘裾部に小壜穴式石室を有する。

寺口忍海古墳群<sup>(29)</sup>(28)は、120基以上の古墳を6条の尾根・支脈上や谷間の平坦地に分布する。内部主体は横穴式石室が大多数で、壜穴系横口式石室を含む。木棺直葬、箱式石棺、小壜穴式石室も少数ながら存在する。5世紀末から6世紀初めにかけて群形成は開始され、6世紀代に継続して造墓され、7世紀前半に終末をみる。

笛吹古墳群<sup>(30)</sup>(29)は、笛吹神社西方の東西にのびる尾根上に立地する群集墳である。前方後円墳1基と径10～20m前後の円墳で、約75基を数える。ほとんどが、主体部に横穴式石室を用い、それ



1. 第1次調查地
2. 第2次調查地
3. 樺皮遺跡
4. 玉手遺跡
5. 小林遺跡
6. 鴨潭遺跡
7. 池ノ內遺跡
8. 吐山平遺跡
9. 葛城山頂遺跡
10. 埤谷遺跡
11. 本瓦丘遺跡
12. 今住遺跡
13. 吉樂遺跡
14. 圓瓦山遺跡
15. 名軒遺跡
16. 寮・中西遺跡
17. 橋頭遺跡
18. 寮・宮山古墳
19. 寮・木ノ塚古墳
20. 境上獅子塚古墳
21. 新住屋敷山古墳
22. 飯盤塚古墳
23. 二塚古墳
24. 寺口和田古墳群
25. 寺口千塚古墳群
26. 石川古墳群
27. 火野谷山古墳群
28. 寺口原山古墳群
29. 源收古墳群
30. 源收神社古墳
31. 小林別家古墳群
32. 山口千塚古墳群
33. 石北山古墳群
34. 巨勢山古墳群

第1圖 舊道遺跡分布圖 (S. = 1/50,000)

を南に開口する。笛吹神社古墳<sup>(30)</sup>においては6世紀前半の朝抜式家形石棺を石室内に安置する。本古墳群の群形成のピークは6世紀後半に求められる。また、本古墳群の南方、小林壆ノ木地区(5)に横穴式石室を主体とする3基の円墳を確認し、壆ノ木1号墳からは銀製鏡子を検出している<sup>(31)</sup>。これは、当地の韓半島方面との関わりを示唆するものである。さらに、兄川をはさんで別家地区(31)にも3基の横穴式石室を主体部とする円墳の存在を確認した<sup>(31)</sup>。

笛吹古墳群の西方には、山口集落の西の方に位置する山口千塚古墳群<sup>(32)</sup>がある。径10~15m前後の円墳、約40基で構成される。群形成のピークは6世紀中葉から後半にある。

吐田平と呼ばれる葛城山腹の棚状台地地形から派生する、丘陵尾根上に吐田平古墳群<sup>(33)</sup>(8)は位置する。23基の円墳からなる。主体部として横穴式石室を早くから取り入れたようであるが、木棺直葬とそれとは6世紀代を通じて併行採用されていたと考えられる。

石光山古墳群<sup>(34)</sup>(33)は、御所市元町の西の独立丘陵にあり約100基で構成される。5世紀後半に前方後円墳が築造され、以降に群形成は盛期を迎え7世紀代まで継続する。本古墳群は、初め木棺直葬墳を中心に壜穴式石室や埴輪円筒棺を埋葬施設とし壜穴系横口式石室の構築を経て6世紀後半に横穴式石室を採用する。その他土器棺や箱式石棺を直葬したものもある。

さて、以上概観してきたように古墳群の採用する埋葬施設の傾向がその性格を表わしていると理解するのであるが、巨勢山古墳群(34)(後出)ではその点において他との特異性を有しており興味深い。つまり、横穴式石室を6世紀前葉の段階で採用する支群が存在するのに対し、以然として従来の埋葬形態を保持し、横穴式石室の導入が遅れる支群も存在する。既に指摘がなされている通り、各支群ごとにそれぞれの性格を有しており、その集合体として古墳群全体が捉えられよう。

### 第3節 既応の調査

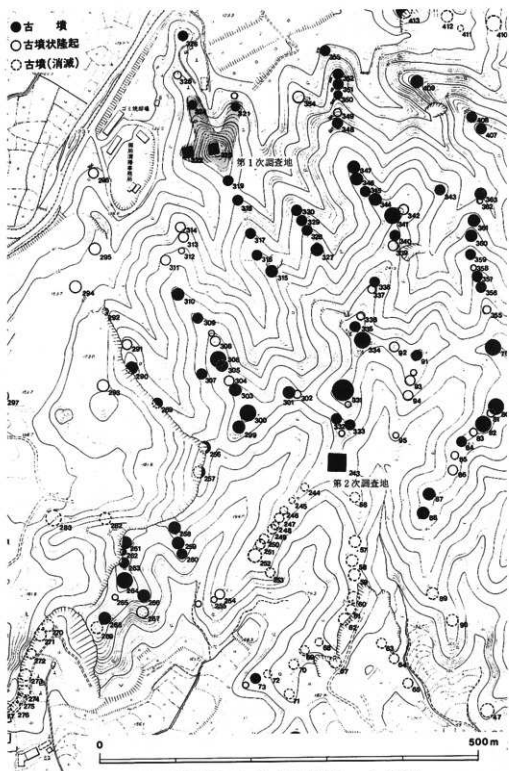
巨勢山丘陵は、北は平野部に面しており、東は曾我川の構造谷と大口峠で、西は葛城川の谷で、また南は朝町川その他の小河川による氾濫原により画され、ほとんど独立丘陵状を呈している。

従来、巨勢山古墳群の範囲は、この丘陵のうち特に古墳分布の著しい西北部に限って言われることが多かったが、この西北部においてさえ昭和47年の『奈良県遺跡地図』が400基程度であったのに対し、昭和58年の踏査結果によれば、これが707基にもふくれ上がっている。このことから見て、東南部も再踏査によってかなりの増加が見込まれ、従って、この巨勢山丘陵全域をもって巨勢山古墳群の範囲とするべきであろうと考える。

この様に考えると、巨勢山古墳群は、総数800数十基により構成されるものと推定され、我国最大級の群集墳であることが改めて認識されるのである。

以下巨勢山古墳群における既応の調査について述べる前に、各古墳の名称について、統一を図っておきたい。

従来各古墳の名称については、所在地の小学名を支群名のようにして冠し、巨勢山境谷1号墳、



第2図 巨勢山古墳群分布図(一部)と調査位置 (S. = 1/5,000)

巨勢山ミノヤマ2号墳などと呼称されてきた。

しかしながら、現行の小字の境界が、古墳築造当時の墓域の境界に必ずしも合致するはずはなく、支群の分離について語る時に混乱をまねくおそれがある。したがってこの呼称法についてはあくまでも「通称」に留めるべきであろう。

また昭和58年度、御所市教育委員会は榎原考古学研究所に委託して分布調査を行い、成果の概要は『巨勢山古墳群調査概要Ⅱ』<sup>(35)</sup>として刊行されている。同書中で報告者の田中一広氏（現、大阪府文化財協会）は巨勢山古墳群全体を『水系を基準にして』41支群に分離し、各支群ごとに1号墳から順次番号をつけている。これが、例えば38支群のように、1本の尾根筋に縦列に並び、しかも周辺支群との境界が古墳の分布状態によっても明確である場合はまだしも、例えば、5、6、7、8支群あるいはその周辺のように、尾根筋がいきりくみ、複雑な地形を呈している部分については、いずれの支群にも帰属させることのできない古墳、または複数の支群に帰属するようにみえる古墳も存在していることを認めねばなるまい。

そもそも古墳群を支群に分解する作業の目的は、その支群構成の背景に「家族」を想定し代々の『同一家族の長』によって営まれたと仮定される個々の支群を類型化し、比較検討することにより、その仮定を検証、さらには当時の社会構造の一端を究明することにほかならないと考える。

すなわち支群への分解は、古墳群研究の究極の目的へ至る最も基礎的な前提作業であることについては、大勢の認めるところであろう。

したがって、この基礎的作業の段階での不合理性は極力排除せねばならないのであり、そのためには地形的な条件のみならず、発掘調査によって得られる知見、例えば埋葬施設や副葬品などあらゆる条件を検討することによりこの作業を行なう必要がある。

総数800基を超える巨勢山古墳群中、発掘調査の行なわれた古墳はわずか31基、4%にも満たない現在、この様な現状で支群分離を進めることはあまりに無謀であると言わざるを得ないのである。

よって、ここでは巨勢山古墳群中の全古墳について通し番号をつけ、これをもって呼称する方法をとる。これは支群分離について先述した仮定の有効性をも含めてあらゆる可能性を残しておいたいがゆえであり、決して支群に分離して比較検討するという一方法論を否定するものではない。

なお、各古墳の名称に用いた通し番号は、無用の混乱を避けるため先述した田中一広『巨勢山古墳群調査概要Ⅱ』の表2、御所市巨勢山古墳群一覧に示された左端のそれを基本的には踏襲することにしたい。ただし、451(27-17)、452(27-18)、628(35-21)号墳はそれぞれ、室・宮山古墳、室・ネコ塚古墳、室・みやや塚古墳であり、これらを巨勢山古墳群中に含める立場には従うことはできず、これらの番号は欠番とせざるを得ない。また今回報告を行う第一次調査地については、320、321号墳とされたものが古墳ではないことが判明、かわりに記載のないもの一基を検出したため、これに欠番となった321号墳の名称を与えた。したがって320号墳については欠番のままである。この様な混乱については、この方法が古墳群全域の発掘調査によって得られる知見ではない次

現行古墳名	概要Ⅱ	通称(仮称)	遺跡地図	墳形	径(一辺)m	内部主体	出土遺物	文献
288号墳	18-28	小殿1号墳	16-D-66	—	—	箱形石棺	須惠器	36
287号墳	18-27	小殿2号墳	16-D-67	—	—	木棺直葬	鉄斧、須惠器	37
439号墳	27-5	境谷1号墳	16-B-225	円	14.5	横穴式石室	須惠器	38
438号墳	27-4	境谷2号墳	ナシ	円	10.0~14.0	木棺直葬	銅鏡2、剣、勾玉、管玉	38
437号墳	27-3	境谷3号墳	16-B-224	円	10.0	木棺直葬	須惠器	38
436号墳	27-2	境谷4号墳	ナシ	円	10.0	木棺直葬	鉄鎧、鉄鉗、鉄斧等	38
433号墳	26-27	境谷6号墳	16-B-219	円	8.0	木棺直葬	須惠器	38
434号墳	26-28	境谷7号墳	16-B-220	円	10.0	木棺直葬	鉄鏃、鉄鎌、須惠器	38
431号墳	26-25	境谷8号墳	16-B-214	円	12.0	横穴式石室	馬具、鉄鏃、須惠器	38
432号墳	26-26	境谷9号墳	16-B-213	円	14.0	横穴式石室	須惠器	38
458号墳	28-6	境谷10号墳	16-B-256	円	24.0~30.0	(横穴式石室)	須惠器	42
41号墳	3-1	ミノヤマ1号墳	16-D-129	円	8.0~11.0	木棺直葬	刀子	39
42号墳	3-2	ミノヤマ2号墳	16-D-128	円	8.0~15.0	木棺直葬	步部付飾金具、馬具等	39
43号墳	3-3	ミノヤマ3号墳	16-D-127	円	7.0~8.0	木棺直葬	鉄鏃、須惠器、土師器	39
44号墳	3-4	ミノヤマ4号墳	16-D-126	円	10.0~16.0	木棺直葬	須惠器、管玉	39
45号墳	3-5	ミノヤマ5号墳	16-D-532	円	9.6	横穴式石室	標原石、鉄矢	39
47号墳	3-7	ミノヤマ7号墳	16-D-125	円	約15.0	横穴式石室		39
48号墳	3-8	ミノヤマ8号墳	16-D-124	円	約20.0	木棺直葬		39
49号墳	3-9	ミノヤマ9号墳	16-B-123	円	10.0~15.0	木棺直葬		39
50号墳	3-10	ミノヤマ10号墳	16-D-534	円	10.0~15.0	木棺直葬	鉄鏃、耳環、須惠器	39
52号墳	3-12	ミノヤマ12号墳	16-D-536	円	10.0~15.0	横穴式石室	馬具、玉、須惠器	39
89号墳	5-14	ミノヤマ13号墳	16-D-121	円	7.0~10.0	木棺直葬	胡麻金具、鉄鏃、鉄鎌	39
90号墳	5-15	ミノヤマ14号墳	16-D-122	円	10.0	木棺直葬	須惠器	39
71号墳	4-16		16-D-95	円	15.0~16.5	横穴式石室	銀製指輪、馬具、須惠器	40
640号墳	37-4	桑池南古墳	16-B-315	円	13.0~16.0	横穴式石室	家形石棺、馬具、須惠器	35
641号墳	37-5	桑池北古墳	16-B-316	円	13.0~15.0	横穴式石室	馬具、刀、須惠器	35
321号墳	付換	(みどり台2号墳)	ナシ	円	7.3~8.0	木棺直葬	須惠器	本報告
322号墳	21-8	(みどり台4号墳)	ナシ	方	7.5~8.0	木棺直葬	土製丸玉、須惠器	本報告
323号墳	21-9	(みどり台1号墳)	16-D-41	方	11.2~14.8	横穴式石室	須惠器	本報告
324号墳	21-10	(みどり台3号墳)	ナシ	円	6.0~7.0	—	刀子、須惠器	本報告
243号墳	17-10		16-D-113	方	17.0~18.0	木棺直葬	刀子、鉄鏃、須惠器	本報告

第1表 既応調査古墳一覧

善のものである以上、甘受せざるを得ないものと理解している。

なお、御所市稲宿所在、新宮山古墳は従来巨勢山古墳群に含まないことが多かったが同じ巨勢山丘陵から派生する支尾根先端部に占地しており、同墳も含めた東南部の一群についても同様に巨勢山古墳群として認め、通し番号を与えた。新宮山古墳については『巨勢山古墳群調査概要Ⅱ』の最終の番号が707号墳であるので、巨勢山708号墳（新宮山古墳）と通称を併記して以下記述する。なお、通称の扱いについては各古墳とも以下同様である。ただし仮称についてはこの限りではない。

さて、巨勢山古墳群の発掘調査は、古墳群西南部の小殿で、国道24号線開発に伴い、不時発見された2基の古墳のそれを端緒とする。288号墳（小殿1号墳<sup>(36)</sup>）は、緑泥片岩製の箱形石棺を直葬したもので、TK10型式の須恵器杯蓋・身各2点のほか、須恵器埴1、土師器壺2等を副葬していた。287号墳（小殿2号墳<sup>(37)</sup>）は、木棺直葬墳かと推定され、TK43型式須恵器杯身のほか、須恵器台付長頸壺、鉄斧等の出土が知られる。

昭和40年代以降、地元業者による土砂採集が丘陵のいたる所で始まる。この間、ようやく調査が出来たのは、わずか9基に止まり、多くの古墳が未調査のまま破壊された。

9基は境谷支群の名称で呼ばれているもので、438（境谷2）号墳<sup>(38)</sup>は、径10～14mの扁円形の円墳で、割竹形木棺2棺を同一墓室内に直葬する。北棺からは変形神獸鏡1面、珠文鏡1面、勾玉約60個（石材種不詳）、ソロバン玉約30個（同）、碧玉製管玉4個等が、また、南棺からは剣1振が出土している。5世紀前半の築造かと見られ、現在のところ巨勢山古墳群最古の古墳である。

436（境谷4）号墳<sup>(38)</sup>は、6世紀初頭築造かと思われる。径10mの円墳で、組合式木棺を直葬する。鉄鏡、鉄鉗等の鍛冶工具の出土が目される。

431（境谷8）号墳<sup>(38)</sup>、432（境谷9）号墳<sup>(38)</sup>は、共に6世紀前半の築造とされる。片袖式横穴式石室を内部主体とする円墳で、巨勢山古墳群西北部においては、横穴式石室の受容の早かったことが判る。

続く調査は、国体ラグビー場建設に伴うもので、古墳群南端の9基の古墳を発掘調査している。

最も顕著な遺物を出土した42（ミノヤマ2）号墳<sup>(39)</sup>には、東西の2棺が直葬されていた。西棺は6世紀中葉のものとされ、木心鉄板張壺と環状鏡板付轡が出土、東棺は6世紀後葉のものとされ、埋木製瓊玉と銀製空玉を交互に連ねた首飾り、円形歩揺付金銅製胸飾、金銅製胡籬金具などが出土した。他の多くも6世紀代を通じて営まれたもので、6世紀後葉に至って木棺直葬から横穴式石室に内部主体が変化する。

なお、ラグビー場に通じる県道開設の為に調査が行なわれた71号墳<sup>(40)</sup>は、さきのミノヤマ地区からは200mしか離れていないが、ここではMT15型式須恵器を伴う横穴式石室が検出されており、必ずしも古墳群南部が横穴式石室の受容に遅れたとは言えない様である。本墳からは、他に銀製指輪等が出土している。

開発に伴う調査に翻弄され続けた観のある巨勢山古墳群ではあったが昭和58年に至り御所市教育



委員会はようやく積極的な保護対策にのり出し、国庫・県費の補助を受けて西北半の詳細な分布調査を行ない、707基の古墳もしくは古墳状隆起を確認、また古墳群北東部、大字條に所在する荒廃のひどい2基の古墳の発掘調査を行なった。640号墳(糸池南古墳)からは二上山の白石を用いた、石枕付剣伎式家形石棺、TK10型式の須恵器群や各種馬具も出土し、貴重な資料を提供した。

この国庫補助事業は59年度にも継続され、大字室小字サカイ谷所在の458(境谷10)号墳の調査を行なった。458号墳は境丘西半を既に土砂採取により破壊されており、中心的な主体部の検出は出来なかったが、副次的な埋葬施設として小形無袖のTK209型式期構築の横穴式石室を検出、また、弥生時代後期前半の高地性集落、境谷遺跡の存在を明確にした点に意義を見い出せる。

こうした中で、今回、開発に伴う調査に入らざるを得なかったのは大変残念なことである。

なお、蛇足ながら、調査当時の第1次調査地各古墳の名称について、複数の研究者から御批判を頂いたので、この場を借りて、それに答えておきたい。

調査当時、我々は第1表の通り、各古墳を巨勢山みどり台1号墳～4号墳と仮称をもって呼び習わせてきた。現地説明会資料にもこれが仮称であることを明記し、付載した323号墳石室略測図にも仮称の名を冠した通り、これを正式名称として通用させるつもりは全くなかった。この時点で筆者は巨勢山古墳群中の各古墳の名称については、通し番号をもって呼称するべきであるとの考えを持っており、それでもなお、このような仮称を用いざるを得なかったのは、某書の刊行が諸般の事情により大幅に遅れ、調査終了際においてさえ適切な名称を付け得なかったためである。

よって、正式名称が決まれば、二度と用いることはないであろう、仮称を用いて、当面の便宜を図つたにすぎない。以上のこと、御理解頂ければ幸いである。

- 註1 松室尚夫「萬城山麓発見の縄文式土器遺跡について」(『大和志』第6巻第7号、1939年)
- 2 伊藤勇輔「御所市玉手 玉手遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1984年度』、1985年)
- 3 1966年 御所市教育委員会調査
- 4 吉村定治郎「鴨都波神社附近の遺物について」(『大和石器時代研究』、1939年、大和上代文化研究会)  
網干善教「鴨都波遺跡」(『御所市史』、1965年)  
横野二・菅谷文則・吉村雅博・吉田二良「奈良県御所市鴨都波遺跡出土の石文」(『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年)  
伊藤勇輔「鴨都波遺跡一調査概報一」(1977年 御所市教育委員会)  
伊藤勇輔「鴨都波遺跡発掘調査概報(原立御所高等学校内)」(『奈良県遺跡調査概報1978年度』、1979年)
- 5 履原考古学研究所 寺沢薫・林部均、西氏の1967年の調査による。
- 6 奈良県遺跡地図第3分冊16-B-423に相当する。
- 7 前出註3
- 8 奈良県遺跡地図第3分冊16-B-167に相当する。
- 9 松本俊吉「先史文化」(『御所市史』、1965年)
- 10 久野邦雄「大和巨勢山古墳群(境谷支群)一昭和48年度発掘調査概報一」(1974年、奈良県教育委員会)  
藤田和尊「奈良県御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第4集、1986年、御所市教育委員会)
- 11 松本俊吉(前出註9文獻)  
藤田和尊「奈良県御所市本馬西遺跡」(『御所市文化財調査報告書』第5集、1986年、御所市教育委員会)
- 12 松本俊吉(前出註9文獻)
- 13 松本俊吉(前出註9文獻)

- 14 関川尚功「総括」(『奈良県五條市引ノ山古墳群』、1980年、五條市教育委員会)  
藤田和尊「位置と環境」(前出註10文獻)
- 15 松本俊吉(前出註9文獻)
- 16 奈良県遺跡地図第3分冊16-B-239に相当する。
- 17 1987年 御所市教育委員会調査
- 18 網干善教「室大墓」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1950年)
- 19 奈良県「南葛城郡椋上村柏原鏡子塚古墳出土 鳥形埴輪」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報』第2輯、1941年)  
網干善教「鏡子塚古墳」(『御所市史』、1965年)
- 20 橋元哲夫「御所市椋上鏡子塚前方部周濠発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年)  
南葛城地域の古墳文化研究会「奈良県御所市椋上鏡子塚古墳調査報告」(1986年)
- 21 菅谷文則「新庄屋敷山古墳」(1975年、奈良県教育委員会)
- 21 河上邦彦「新庄町飯登腰外庭の調査」(『奈良県古墳発掘調査報告Ⅱ』『奈良県文化財調査報告書』第30集、1978年)  
土生田純之「城口丘陵外堤遺構工事区域の調査」(『宮後部紀要』第32号、1980年)
- 22 上田宏福・北野耕平・伊達宗孝・森浩一「大和二塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊、1962年)
- 23 伊藤勇輔「寺口和田古墳群発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1979年度』、1980年)
- 23 伊藤勇輔「寺口和田古墳群第2次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1980年度』、1981年)
- 24 泉森蛟「新庄町寺口千塚・新油支群発掘調査報告」(『奈良県遺跡調査概報1981年度』、1983年)
- 25 泉森蛟(前出註24文獻)  
松永博明・高橋工・中川貴「新庄町寺口大地採集の遺物」(『青陵』No62、1967年)
- 26 白石太一郎「新庄町寺口千塚古墳群」(『奈良県の主要古墳』、1971年)
- 27 奈良県遺跡地図第3分冊16-A-2・3及び16-B-47~125に相当する。
- 28 関川尚功・生田藤道・松田真一「新庄火野谷山古墳群」(『奈良県文化財調査報告書』第31集、1979年)
- 29 泉森蛟「新庄町史 考古篇」(1984年)  
吉村農温「平岡(西方)古墳群」(『新庄町埋蔵文化財調査概報』第1集、1984年)  
千賀久・吉村農温「奈良県新庄町寺口忍海古墳群の諸問題」(『日本考古学協会第53回総会発表要旨』、1987年)
- 30 坪井良平「大和国笛吹社の古墳」(『考古学雑誌』第3巻第7号、1921年)  
泉森蛟・菅谷文則「大和葛城の笛吹・山口古墳群の分布」(『考古学研究』60、1971年)  
白石太一郎「新庄町笛吹古墳群」(『奈良県の主要古墳Ⅱ』、1974年)  
河上邦彦・橋元哲夫「新庄町笛吹古墳群試掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年)
- 31 前出註3
- 32 喜田貞吉「大和南葛城郡山口の千塚」(『歴史地理』第19巻第3号、1912年)  
泉森蛟・菅谷文則(前出註30文獻)  
白石太一郎「新庄町山口千塚古墳群」(前出註30文獻)
- 33 網干善教「吐田平古墳群」(『奈良県文化財調査報告』第4集、1961年)
- 34 白石太一郎・河上邦彦「葛城・石光山古墳群」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年)
- 35 田中一広「奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要Ⅰ—分布調査及び終地区における発掘調査—」(『御所市埋蔵文化財調査概報』58-1J、1984年)
- 36 網干善教「小籠古墳」(『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第3集、1960年)
- 37 網干善教「御所市小籠第二号墳」(『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第4集、1961年)
- 38 久野邦雄「大和巨勢山古墳群(境谷支群)—昭和48年度発掘調査概報—」、1974年
- 39 千賀久・田中一広「巨勢山古墳群(ミノヤ支群)発掘調査概要Ⅰ」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』、1983年)
- 40 田中一広「御所市巨勢山古墳群(タケノケ支群)発掘調査概要—県道古瀬小籠道路路線改良工事に伴う調査—」(『奈良県遺跡調査概報1983年度』、1984年)
- 41 田中一広「奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」(前出註35文獻)
- 42 藤田和尊「奈良県御所市 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」(前出註10文獻)
- 43 御所市教育委員会「御所市みどり台開発事業に伴う巨勢山古墳群発掘調査(第1次)現地説明会資料」(1985年)

## 第2章 調査の契機と経過

御所市の南部、巨勢山丘陵には、早くから大群集墳の存在が知られていたが、昭和58年度の古墳群東北半部の分布調査の結果、707基の古墳もしくは古墳状隆起を確認することができた。したがって、古墳群全体としては先述のように800数十基の群小古墳の存在を推定でき、我国最大級の群集墳であることが改めて認識されるのである。

この丘陵地に、御所市と奈良日日新聞社との共同事業、「御所市みどり台総合開発事業」が計画され、予定地内には159基以上の古墳もしくは古墳状隆起の存在することが明らかになった。

この事態を重くみた御所市教育委員会は、奈良県教育委員会文化財保存課ほか、関係諸機関との協議を行なったが、開発事業者側から提出された59基の記録保存（調査後破壊）という希望に対しては、10数次にわたるであろう調査の都度対応を協議することになり、昭和60年1月22日から第1次調査に入った。

第1次調査は、大字西寺田小字幕谷所在の4基の古墳とそれをのせる尾根筋が対象となった。調査は実働115日を要し、昭和60年8月16日に終了した。

第2次調査は雨にたたられながら昭和61年2月3日から同3月31日まで、実働34日間を費して行なったが、調査の契機が第1次調査等とは異なっている。対象となった大字栗阪小字タケノクチ所在の巨勢山243号墳の南方は、徳永工務店（御所市栗阪）が土取りを行なっており、誠に残念なことであるが、第1次調査を行なっている間に244号墳から255号墳、計12基の古墳の占地する尾根1本を破壊してしまった。ブルドーザーが243号墳の裾までせまっているところをようやく工事を中止させ発掘調査を行なったものである。

したがって原因者は本来徳永工務店であるべきものであったが、この土取り場の跡地をみどり台開発の事業地として購入することになっていたためみどり台開発の関連事業として調査を行なったものである。

なお、調査後の協議の結果、323号墳については現地保存の方針で臨むことが決定された。



第3図 第1次調査 現地説明会風景

## 調査日誌抄

### 第1次調査(昭和60年)

- 1月22日 午後より下草刈り。  
 1月23日 下草刈り、現場への造道を行う。現場事務所(プレハブ)建築予定箇所の試掘。  
 1月24日 立木伐採。調査地の平板測量。  
 1月25日 立木伐採。平板測量。  
 1月26日 立木伐採。平板測量。  
 1月28日 立木伐採。平板測量。  
 1月29日 立木伐採。平板測量。  
 1月30日 立木伐採。西側緩斜面に第1トレンチを設定し、掘削を開始する。  
 1月31日 第1トレンチ掘削完了。  
 2月1日 第1トレンチ分層完了。プレハブ資材を持ち上げ、夕刻ようやく完成する。  
 2月4日 南地区斜面掘削開始。第1トレンチ土層図作成。全くの自然堆積で遺構、遺物なし。  
 2月5日 南地区斜面掘削。中央部を通る浅い落ち込みを検出。323号墳の墓道かと思われたのでこの地区の作業を休止し、323号墳の開口部付近の掘削を開始する。  
 2月6日 323号墳の開口部掘削。羨道部に落ち込んだ天井石を検出する。  
 2月7日 323号墳開口部の縦断面土層図、落ち込んだ天井石の立面図作成開始。  
 2月8日 323号墳前日にひきつづき、図面作成。ほぼ終了。東地区斜面の掘削開始。標高173mの付近で土壌を検出。土壌1と名付ける。斜面下方には若干の整形がある。  
 2月11日 土壌1縦横断の堆積状況図作成。完掘。東地区斜面の掘削を続行し、先端部に321号墳の背後に巡る周溝を検出する。  
 2月12日 321号墳の墳丘背後周溝掘削。焼土と炭層があり、その中より須恵器片検出。323号墳開口部に落ち込んだ天井石を除去する。  
 2月13日 323号墳石室内堆積土の縦断面をとるため、西側半分のみ掘削。中途。321号墳墳丘背後周溝内須恵器出土状況図作成。北地区斜面の掘削開始。  
 2月14日 雪降り雨のため現場中止。  
 2月15日 321号墳周溝内須恵器さらに出る。精査続行。北地区斜面掘削。  
 2月18日 321号墳周溝内須恵器出土状態実測。北地区斜面掘削。323号墳開口部さらに下げ、土

層実測。

- 2月19日 雨のため現場中止。  
 2月20日 321号墳周溝内須恵器出土状態実測。北地区斜面掘削。午後より雨のため現場中止。  
 2月21日 北地区斜面掘削。  
 2月22日 北地区斜面掘削。321号墳の墳丘平板測量開始。  
 2月25日 321号墳周溝内須恵器出土状態実測終了。同墳丘平板測量完了。北地区斜面先端で322号墳の墳丘背後周溝を一部検出。  
 2月26日 321号墳周溝堆積状況の土層断面図作成。323号墳石室内掘削。土層図作成。横口式石帯であることが判明する。北地区斜面掘削。  
 2月27日 323号墳中世再利用面検出。写真。321号墳周溝土層断面図終了。西地区斜面掘削。  
 2月28日 雨のため休み。  
 3月1日 321号墳主体部の西端を検出。323号墳石室内再利用面遺物出土状態実測。北地区斜面先端で、324号墳の墳丘背後周溝検出。西地区斜面掘削。  
 3月2日 323号墳石室内再利用面の遺物取り上げ。横断面土層図作成。西地区斜面掘削。  
 3月4日 323号墳の石室内掘削。漆喰出土。東地区斜面調査後、平板測量。西地区斜面掘削。  
 3月5日 321号墳主体部を検出後全景写真。322号墳墳丘背後周溝掘削。  
 3月6日 323号墳石室内中世再利用面の石帯部側掘削。火熱を受けた動物遺存体出土。321号墳主体部内精査。北地区・西地区斜面掘削。  
 3月7日 雨のため作業中止。  
 3月8日 321号墳主体部内掘削。分層。322号墳流出土を除去した後平板測量。324号墳墳丘背後周溝掘削。西地区、北地区斜面掘削。  
 3月11日 321号墳主体部内掘削。土層断面作成。323号墳羨道部掘削。324号墳墳丘背後周溝内掘削。322号墳平板測量終了。  
 3月12日 321号墳主体部木棺部分完掘。土器取り上げ。322号墳掘削開始。324号墳墳丘背後周溝掘削。アゼ分層、写真。北地区斜面アゼ分層。立木伐採の後第2トレンチ設定、掘削。  
 3月13日 321号墳主体部内土器取り上げ。322号墳表土および直下層の土層断面図作成。324号墳表土および流出土除去後の平板測量。西地区

- 斜面掘削。第2トレンチ掘削。慰霊祭。
- 3月14日 雨のため現場中止。
- 3月15日 321号墳主体部墓塚掘削。322号墳土層断面終了。323号墳石室内掘削。324号墳平板測量終了。アゼをはずす段階で、周溝内より土器群出土。第2トレンチ掘削。
- 3月18日 321号墳主体部墓塚掘削。322号墳墳丘背後周溝部分の土層断面作成。323号墳石室内掘削。
- 3月19日 雨のため現場中止。
- 3月20日 321号墳主体部1完掘、写真、平面図。323号墳南方墓道検出のため、南地区掘削。324号墳墳丘背後周溝内土器群写真。
- 3月22日 323号墳墳丘掘削。南地区掘削。324号墳周溝内土器群実測。西地区斜面分層、土層断面実測。第2トレンチ掘削。
- 3月25日 323号墳石室内掘削、分層、土層図作成。324号墳周溝内土器群取り上げ。閉鎖・開放トラバース関係図作成。
- 3月26日 雨のため作業中止。
- 3月27日 雨のため作業中止。
- 3月28日 東、北、西地区斜面写真撮影。323号墳石室内掘削、分層、土層図作成。西地区斜面アゼとりはずし。北地区斜面平板測量途中。
- 3月29日 } 報告書作成のため現場一時休止。
- 4月7日 }
- 4月8日 現場再開。321号墳土壌の掘り方検出。322号墳主体部検出未だならず。322号墳羨道部の天井石を復原構築する作業を開始する。324号墳墳丘掘削。
- 4月9日 322号墳主体部2検出。323号墳羨道部天井石構築。324号墳墳丘掘削。
- 4月10日 321号墳土壌掘削。322号墳主体部2精査。323号墳羨道部天井石構築。324号墳墳丘掘削。
- 4月11日 321号墳土壌掘削。322号墳主体部2精査。323号墳石室洗浄。夕刻より雨強くなり中止。
- 4月12日 雨のため現場中止。
- 4月13日 323号墳羨道部天井石構築。
- 4月15日 323号墳墳丘掘削。石室内掘削、分層。
- 4月16日 322号墳主体部2堆積状況の分層、土層図作成。323号墳墳丘掘削。
- 4月17日 321号墳土壌堆積状況の分層、土層図作成。323号墳墳丘掘削。
- 4月18日 321号墳土壌堆積状況図作成。墳丘縦横断面土層図作成。全景写真。323号墳墳丘掘削。
- 4月19日 323号墳石室内、墳丘掘削。
- 4月22日 323号墳石室内地積土の縦横断面図作成。324号墳墳丘掘削。
- 4月23日 322号墳墳丘掘削。323号墳石室内掘削。
- 4月24日 323号墳石室内掘削。324号墳墳丘掘削。
- 4月25日 323号墳石室内掘削。
- 4月26日 324号墳墳丘掘削。
- 4月27日 雨のため現場中止。
- 4月29日 現地説明会へ向けて道の整備。
- 4月30日 道の整備。
- 5月1日 321号墳墳丘掘削。323号墳石室内掘削、分層。南方に墳丘を画する溝検出。方墳であることが確定的となる。
- 5月2日 323号墳石室内土層図作成。全景写真。
- 5月7日 雨のため現場中止。
- 5月8日 323号墳墳丘北側で墳丘を画する溝検出。方墳であることがさらに明らかになる。
- 5月9日 323号墳の南方、南地区斜面掘削。墓道検出に努める。
- 5月10日 322号墳主体部2の全景写真。
- 5月13日 323号墳墳丘掘削。西側緩斜面に設定した第2トレンチは、自然堆積であることを確認する。
- 5月14日 雨のため現場中止。
- 5月15日 323号墳墓道の縦横断面土層図作成（本書では割愛）。墳丘掘削。
- 5月16日 323号墳墳丘掘削。
- 5月17日 322号墳主体部2横断面土層図作成。323号墳墳丘北側掘削。
- 5月20日 雨のため現場中止。
- 5月21日 321号墳墳丘断面分層。323号墳墓道のアゼはずしの後、墓道から墳丘へ向けての全景写真。
- 5月22日 322号墳主体部2墓塚検出。
- 5月23日 323号墳石室割り付け。
- 5月24日 雨のため現場中止。
- 5月28日 323号墳石室割り付け。
- 5月29日 323号墳墓道の延長部分（南地区斜面）掘削。
- 5月30日 323号墳墳丘平板測量。墓道掘削。
- 5月31日 322号墳主体部2遺物出土状態実測。
- 6月3日 322号墳主体部2遺物出土状態実測。

- 323号墳墓道掘削。石室実測開始。
- 6月4日 323号墳墓道掘削。石室実測。
- 6月5日 雨のため現場中止。
- 6月6日 323号墳石室実測。墳丘平板測量。本墳に関しては現地保存の方針が確定的となったため、墳丘の調査はトレンチ調査に切り替える。墳丘東トレンチを設定して掘削。石塚部の天井石外へ検出。
- 6月7日 322号墳主体部2土器出土状態実測。323号墳墳丘東トレンチ掘削。墳丘北トレンチ設定、掘削。
- 6月10日 322号墳全景写真。323号墳石室実測。墳丘東トレンチ、北トレンチ掘削。
- 6月11日 322号墳墳丘掘削。323号墳墳丘東・北トレンチ掘削。石塚部外面、墓壁の写真。
- 6月12日 雨のため現場中止。
- 6月13日 雨のため現場中止。
- 6月14日 321号墳、324号墳全景写真。323号墳石室実測。
- 6月15日 } 事務処理、天候不順のため現場中断。
- 6月30日 }
- 7月1日 現地説明会準備。
- 7月2日 現地説明会準備。
- 7月3日 雨のため現場中止。
- 7月4日 322号墳墳丘掘削、分層。323号墳石室実測。現地説明会準備。記者発表。
- 7月5日 322号墳墳丘土層断面実測。323号墳石室実測。現地説明会準備。
- 7月6日 現地説明会準備。
- 7月7日 現地説明会。約300名来る。
- 7月8日 322号墳主体部2土器取り上げ。323号墳石室実測。
- 7月9日 323号墳石室実測。明後日の航空写真撮影に備えて清掃。
- 7月10日 323号墳石室実測。明日の航空写真撮影に備えて清掃。
- 7月11日 航空写真撮影。
- 7月12日 雨のため中止。
- 7月15日 321号墳墳丘掘削。
- 7月16日 323号墳石室実測。墳丘西トレンチ設定、掘削。西地区斜面平板測量。
- 7月17日 323号墳石室実測。墳丘西トレンチ掘削。西地区斜面平板測量。
- 7月18日 323号墳石室実測。西地区斜面平板測量。
- 7月19日 323号墳石室実測。石室細部写真撮影。西地区斜面平板測量。
- 7月22日 323号墳墳丘北トレンチで検出した石塚部外面、墓壁の写真撮影。西地区斜面平板。
- 7月23日 西地区斜面平板測量。終了。
- 7月24日 323号墳石塚部外面実測。墓道平板測量。西地区斜面下方の土留め。
- 7月25日 323号墳石塚部外面実測。墓道平板測量。西地区斜面下方の土留め。
- 7月26日 323号墳墳丘東トレンチ分層。墓道平板測量。西地区斜面下方の土留め。322号墳主体部1検出。
- 7月27日 西地区斜面下方の土留め。
- 7月29日 322号墳主体部1堆積土層断面実測。323号墳墳丘東トレンチ土層断面実測。墳丘西トレンチ分層。
- 7月30日 322号墳主体部1木棺部、墓壁掘り上げ写真。323号墳墳丘東トレンチ土層断面実測。墳丘北トレンチ分層。
- 7月31日 323号墳墳丘東・西・北トレンチ土層断面実測。
- 8月1日 323号墳墳丘東・西・北トレンチ土層断面実測。
- 8月2日 事務処理のため現場中止。
- 8月5日 323号墳石室実測。石塚部外面実測。墳丘北・西トレンチ土層断面実測。墳丘東トレンチ埋め戻し。
- 8月6日 322号墳主体部1に伴う排水溝掘削。323号墳石室実測。墳丘北・西トレンチ埋め戻し。墳丘北側の流出土掘削。
- 8月7日 322号墳全景写真。323号墳石室実測。墳丘北側平板測量。
- 8月8日 322号墳平板測量。323号墳石室実測。全景写真。墓道写真。墳丘北側平板測量。
- 8月9日 323号墳全景写真。石室細部写真。墳丘



第4図 巨勢山323号墳調査風景

北側平板測量。器材撤収。

8月14日 323号墳石室実測。

8月15日 323号墳石室実測。

8月16日 323号墳石室実測。

昭和61年3月13日

3月15日

3月17日

3月18日

3月19日

保存のため芝張りを行う。

第2次調査(昭和61年)

2月3日 レベル上げ、器材撤入、慰霊祭。

2月4日 レベル上げ終了。トラバース設定、平板測量。伐採、道造り。

2月5日 平板による墳丘測量。立木伐採、道造り。

2月6日 平板による測量。立木伐採。

2月7日 現状写真撮影の後、掘削開始。平板測量続行。

2月10日 平板測量終了。表土、流出土掘削。

2月12日 墳丘掘削。主体部1・2検出。

2月13日 墳丘掘削。墳丘北アセ分層。主体部1・2断面土層実測。

2月14日 雨のため現場中止。

2月15日 ローリングタワー搬入。

2月17日 主体部1・2の木棺完掘状態での全景写真撮影。墳丘掘削。

2月18日 大雪のため現場中止。

2月19日 主体部1・2の墓壇にトレンチを入れ分層。一部実測。墳丘流出土掘削。

2月20日 主体部1・2墓壇の土層図終了。墳丘流出土掘削。

2月21日 墳丘流出土掘削。

2月22日 墳丘流出土掘削。

2月24日 主体部1・2墓壇掘削。墳丘流出土掘削。

2月25日 主体部1墓壇掘削。主体部2完掘後の平面実測。墳丘流出土掘削。

2月26日 主体部1墓壇掘削、完掘後平面実測。墳

丘流出土掘削。

2月27日 主体部1断ち割り。その下にさらに遺構の存在する可能性高くなる。墳丘流出土掘削。

2月28日 雨湿りの雪のため現場中止。

3月3日 墳丘流出土掘削。流出土除去後の平板測量開始。主体部1の下方遺構(以下、下部土壇)掘削開始。

3月4日 平板測量。墳丘流出土掘削。下部土壇掘削。

3月5日 平板測量。墳丘流出土掘削。下部土壇掘削。

3月6日 墳丘流出土掘削。下部土壇掘削。

3月7日 下部土壇掘削。

3月10日 雨のため現場中止。

3月11日 雨のため現場中止。

3月12日 下部土壇掘削。

3月13日 下部土壇掘削。航空写真撮影。

3月14日 雨のため現場中止。

3月17日 下部土壇掘削。

3月18日 下部土壇掘削。

3月19日 下部土壇縦横断面土層図作成。

3月20日

天候不順のため現場中止。

3月27日

下部土壇縦横断面土層図作成。平面図作成。

3月31日 下部土壇平面図作成。全景写真。

### 第3章 各古墳の調査

#### 第1次調査

##### 第1節 位置と調査方法(第2図、別添図2・3)

第1次調査地は、巨勢山古墳群の西端部、御所市大字西寺田小字墓谷に相当する。

標高286.3mの朝町山から四方に尾根が派生し、巨勢山丘陵の西半部を形成しているが、うち東へ延びる主尾根からさらに北へ派生した一支尾根上に巨勢山315号墳～326号墳の12基の古墳により構成される一支群がある。

調査地内で最高地に位置する323号墳は、南方からの尾根が一度下った後、再び高まった支尾根鞍部の頂上部分に占地しており、これを中心に四方へと尾根が派生する。東側の尾根上には321号墳、北側には324号墳、西側には322号墳が各々あり、計4基の古墳が調査対象となった。

昭和58年度の分布調査の結果では、当該地には、320(21-6)号墳～324(21-10)号墳の5基の古墳が存在するとされていたが、再踏査の結果、320(21-6)号墳と、321(21-7)号墳は古墳ではないことが判明、かわりに323号墳から東へと派生する尾根上に古墳1基が確認できたため、これを欠番となった321号墳とすることにした。したがって、320号墳はまだ欠番のままである。

調査地内最高所の323号墳を中心に、南方から上がってくる尾根筋を南地区、東方へと下る321号墳を含む尾根筋を東地区、北方へと下る324号墳を含む尾根筋を北地区、西方へと下る322号墳を含む尾根筋を西地区とし各尾根には、他の遺構あるいは古墳の存在する可能性も考えられたため、当初より全面発掘を計画、各尾根の中央部に土層観察用アゼを設定して掘り進めた。

さらに念のため、北地区から西へと向う緩斜面に第1、第2の2本のトレンチを設定し万全を期した。なお、これらのトレンチには全く遺構、遺物の存在は認められなかったので、本報告では割愛する。

##### 第2節 巨勢山321号墳

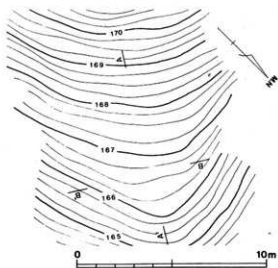
###### 1. 位置と墳丘・周溝(第5・6・7図)

321号墳は、調査地最高所に相当する323号墳より北東にのびる尾根上に立地し、基底は、斜面高所である南西側で標高約166.6m、斜面低所である北東側で標高約164.5mに置く。

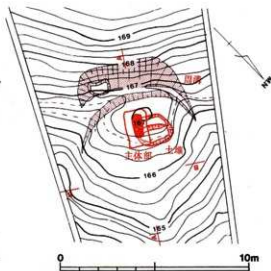
調査以前の平板測量(第5図)では、コンターライン166m～167mにかけて傾斜の変換がみられたものの、明確に古墳であるとは断定しなかった。

そこで、尾根中心部より東西、南北両方向にアゼを残しながら掘削したところ、尾根の南西方向に墳丘を区画する溝を検出した。この溝は、幅1.7m、深さ1.7mで地山を掘り込んで形成されており、北側及び東側で弧を描く半円形となっている(第6図)。また土層断面観察により北東側に於いて墳丘端部を確認したことにより、墳丘測量図も考え合わせて、本墳は長径8.0m、短径7.3





第5図 巨勢山321号墳 墳丘測量図  
(調査前 S. = 1/200)



第6図 巨勢山321号墳 墳丘測量図  
(調査後 S. = 1/200)

mの北東—南西方向に長い円墳であると推定される。

後述するように周溝内からは須恵器(高杯・鉢)、土師器(杯)が出土している。また、これらの土器の周辺には、稀薄ながらも焼土および炭化物が存在していた。

土層断面(第7図)からも判る様に、墳丘上面の東方側は既に流出しており、後でも触れるが、墓壙および木棺の上面東側約 $\frac{3}{4}$ も欠失している。しかしながら墳丘上面において厚さ約50cmで盛土が遺存しており、土層断面から判断して、盛土は墳丘端部より順に積まれていたことが判る。

なお、周溝は、墳丘背後に相当する南西側においてのみ検出できたが、北東側には当初よりなかったものと思われる。

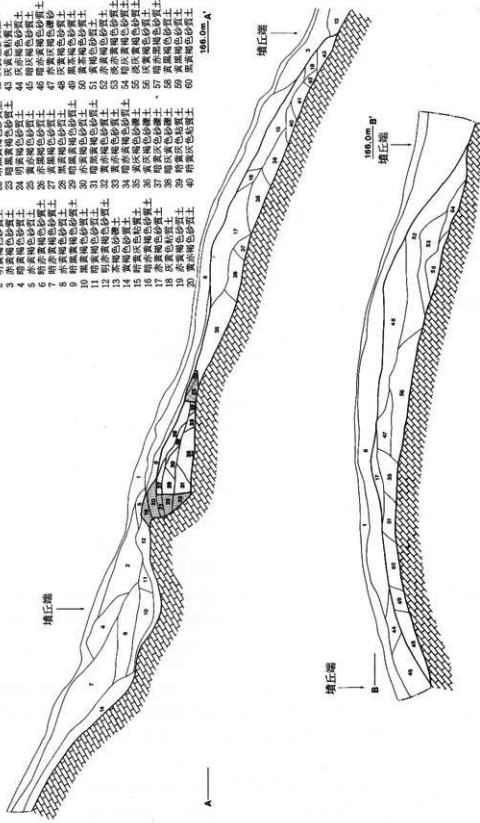
## 2. 周溝内遺物出土状態(第8図)

遺物は全て本墳背後周溝内底面のうち最も高いレベルで、約0.5m四方内にかたまって検出され、須恵器高杯の杯部のみがこれらの東方約0.5m、周溝墳丘寄りにて検出された。なお、これらの遺物は墳丘断面実測図第7図の第12層内検出である。

高杯(1)はこの集中部分の北東端、すなわち最も墳丘寄りの比較的高いレベルで、17片に割れて脚部は西寄り、杯部は東寄りに出土した。脚部については5片に割れているが、完形に復原が可能である。そのうち最大の1片は、ほぼ正立した状態で出土した。杯部は12片に割れており、約 $\frac{3}{4}$ 復原が可能である。杯部破片はいずれも口縁を下に向けて出土した。

高杯(2)は脚部を遺物集中部分の東端で、杯部を集中部分より東に約0.5m外れた位置で検出された。脚部は脚端部を北東に向け倒れた状態で出土した。一部欠損するもののほぼ完形をなす。杯部については集中部分より遊離した後、この場で5片に割れたと考えられる。杯部の約 $\frac{1}{4}$ 欠損する。

- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| 1 灰土       | 21 黄褐色砂质土  | 41 暗紫灰色粘质土 |
| 2 暗紫褐色粘质土  | 22 暗紫褐色粘质土 | 42 灰黄色粘质土  |
| 3 灰黄色粘质土   | 23 暗紫褐色粘质土 | 43 灰黄色粘质土  |
| 4 暗紫褐色粘质土  | 24 暗紫褐色粘质土 | 44 灰黄色粘质土  |
| 5 暗紫褐色粘质土  | 25 暗紫褐色粘质土 | 45 暗紫褐色粘质土 |
| 6 暗紫褐色粘质土  | 26 暗紫褐色粘质土 | 46 暗紫褐色粘质土 |
| 7 暗紫褐色粘质土  | 27 暗紫褐色粘质土 | 47 暗紫褐色粘质土 |
| 8 暗紫褐色粘质土  | 28 暗紫褐色粘质土 | 48 暗紫褐色粘质土 |
| 9 暗紫褐色粘质土  | 29 暗紫褐色粘质土 | 49 暗紫褐色粘质土 |
| 10 暗紫褐色粘质土 | 30 暗紫褐色粘质土 | 50 暗紫褐色粘质土 |
| 11 暗紫褐色粘质土 | 31 暗紫褐色粘质土 | 51 暗紫褐色粘质土 |
| 12 暗紫褐色粘质土 | 32 暗紫褐色粘质土 | 52 暗紫褐色粘质土 |
| 13 暗紫褐色粘质土 | 33 暗紫褐色粘质土 | 53 暗紫褐色粘质土 |
| 14 暗紫褐色粘质土 | 34 暗紫褐色粘质土 | 54 暗紫褐色粘质土 |
| 15 暗紫褐色粘质土 | 35 暗紫褐色粘质土 | 55 暗紫褐色粘质土 |
| 16 暗紫褐色粘质土 | 36 暗紫褐色粘质土 | 56 暗紫褐色粘质土 |
| 17 暗紫褐色粘质土 | 37 暗紫褐色粘质土 | 57 暗紫褐色粘质土 |
| 18 暗紫褐色粘质土 | 38 暗紫褐色粘质土 | 58 暗紫褐色粘质土 |
| 19 暗紫褐色粘质土 | 39 暗紫褐色粘质土 | 59 暗紫褐色粘质土 |
| 20 暗紫褐色粘质土 | 40 暗紫褐色粘质土 | 60 暗紫褐色粘质土 |



第7图 巨势山321号填丘断面实测图(番号は第12图に对应)

竪(3)は最も低いレベルで検出された。体部の4片は西寄り、口縁部の8片は集中部分中央から東寄りに出土した。一部欠損するものの、ほぼ完形に復元が可能である。

竪(4)は、破片を竪(3)の体部破片の上に被せて口縁部を北東、つまり墳丘側に向けて出土した。小片22片より構成され、ほぼ完形に復元される。

竪(5)は口縁部の破片1片で、口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を残存する。遺物集中部分の南寄り内面を上にして出土した。

土師器杯身(6・7)は他と同じく墳丘断面実測図第7図の第12層内より検出されたのであるが、調査の不便によりその出土状況を図化しえなかった。

土師器杯身(6)は口縁部の破片1片で、全体の約 $\frac{1}{2}$ を残存する。

土師器杯身(7)は小片12片で構成され、ほぼ完形に復元しうる。

なお先述したようにこれらの土器の周辺には稀薄ながらも焼土および炭化物の存在が認められた。各土器の散乱状況は著しいが、多くはほぼ完形に復元が可能である。このことは、これらの土器が、この場で用いられたことを示している。また高杯(2)の場合、脚部と杯部は0.5m離れて出土し、しかも杯部の口縁は脚部と離脱した後、その場で割れた状態で出土している。

以上のことから、これらの土器はこの場に並べられたものが割れて散乱したというのではなく、当初より、この場で割ることに目的があり、それらが散乱していると考えた方が妥当である。また、周辺に焼土・炭化物の存在が認められたことから、これらの土器は火を用いた祭祀に伴い割られ、遺棄されたものと考えておきたい。

### 3. 周溝内出土遺物 (第9図)

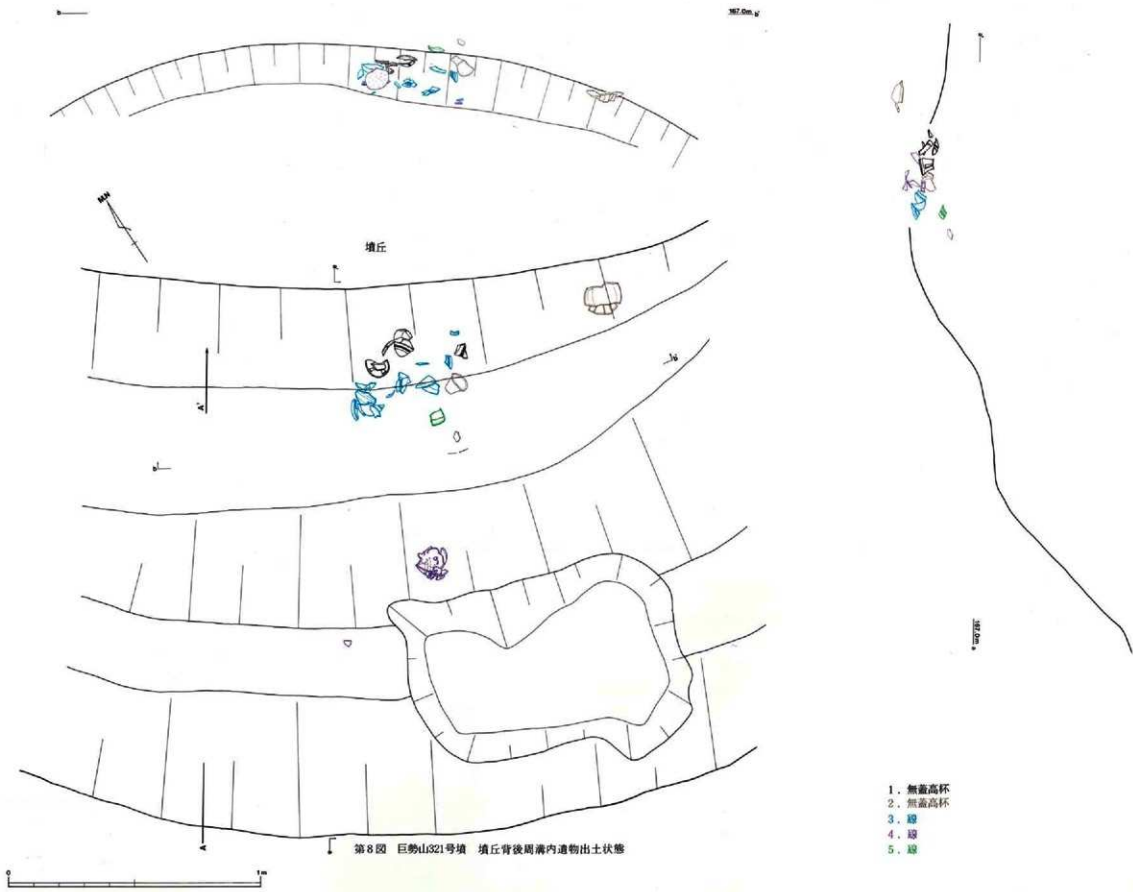
墳丘背後の周溝内より、須恵器および土師器を検出した。

須恵器は、高杯2点(1・2)、竪2点(3・4)、また、竪の口縁部の破片1点(5)で、土師器は、杯身1点(7)、杯身口縁部の破片1点(6)である。

窯体資料に基づく須恵器の型式編年は、ここで改めて述べるまでもなく、既に多くの先学によって検討されてきている。しかしながら、その中であっても高杯に関しては、窯体資料として良好なものが稀少であるため、遺構から出土したものの型式比定を試みた場合、該当型式範囲を幅広くとらざるを得ないという状況も生ずる。

この様な認識のもとにここでの出土遺物を観察すると、まず高杯(1)についてはT K23型式<sup>(2)</sup>ないしはMT15型式の範囲に相当するものであると見做されるが、脚部の形態が太く短かいものとなっていることより、MT15型式に通有の高杯と比較して、より古い型式の特徴を有しているものと考えられる。

高杯(2)については、形態的に類似するものを窯体資料の中に見出し難いが、口縁端部あるいは脚端部の処理がシャープであることから、田辺編年I期末ないしはII期初頭に比定できるものと



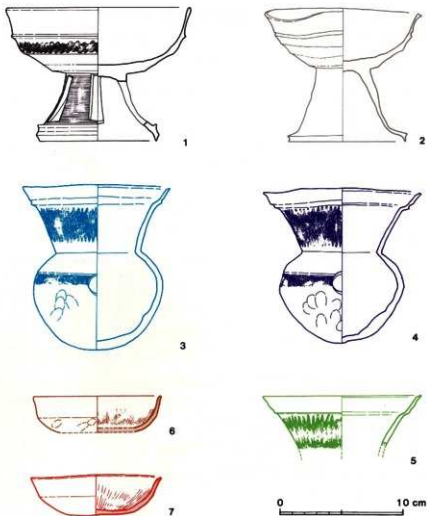
第8図 巨勢山521号墳 墳丘背後周溝内遺物出土状態

- 1. 無蓋高杯
- 2. 無蓋高杯
- 3. 罍
- 4. 罍
- 5. 罍

見做される。なお、高杯（2）には口縁部に焼きひずみが認められ、楕円形に変形している。

罍（3）および罍（4）は、MT15型式に近似するものとみられるが、いずれも肩部の張りがやや乏しく、頸部はわずかに長くのびる傾向を有しており、MT15型式に通常の罍に比してより古い要素を多く残している。従って、TK47型式とMT15型式の中間型式と考えられるTK85型式に相当するものと見做して大過ない。

以上、周溝内出土の須恵器群の総体的な型式期は、TK85型式であるとするのが最も適切であると考えられる。また、周溝内出土須恵器の器種構成が、高杯および罍という祭祀に関係するとみられるものであること、また、先述したように、須恵器周辺から稀薄ながらも焼土および炭化物を検出していることから、これらの須恵器は周溝内での火を用いた祭祀に伴う可能性を想定し得る。



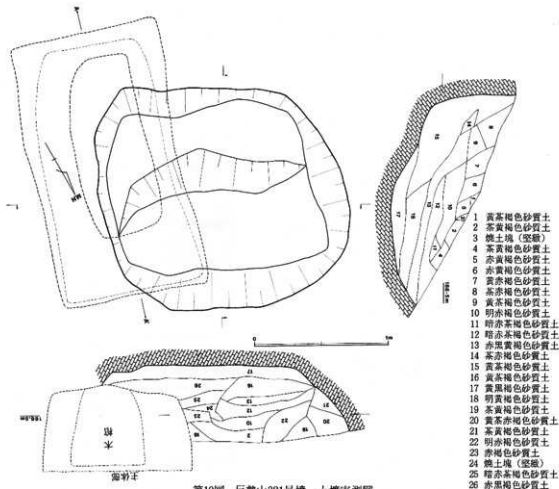
第9図 巨勢山321号墳 墳丘背後周溝内出土遺物（S. = 1/5）

#### 4. 土 壤 (第10図)

墳丘中央の主体部の東側に、これに先行する土壌を検出した。土壌は、尾根平行方向に1.12 m、尾根直交方向に1.85 mを測り、深さは0.90 mを測る。また、主体部によってその西側約1/3を削り取られている。掘り込みは、主体部のそれより約22cm低い位置から行なわれている。

土壌内の土は、全体的に赤色を呈する焼土(第5章 考察 安田博幸博士・井村由美氏の報文参照)であり、土層断面より看取されるように、土層埋土のうち中位の層に赤味の著しいものが多い。焼土の中には、③層および④層のように堅緻な焼土塊として混入しているものもあったが、このような焼土塊は小さなものも含めると土壌全体にわたって散在していた。

調査中、この土壌は窯等の残存部ではないかとの指摘もあったが、土層断面に示されるとおり人為的に土砂を投入した状況を想定したい。この焼土がいかなる場所で形成されたかは明らかにし難いが、先述したように墳丘背後の周溝内に、稀薄とはいえ焼土および炭化物の存在が認められたことから、その場での火を用いた祭祀に伴い形成された焼土を、土壌に投入したものと考えられる。



第10図 巨勢山321号墳 土壌実測図

## 5. 主体部 (第11・12図)

墳丘中央部において、地山を掘り込んだ、主軸M.N. -60°-W.におく木棺直葬の埋葬施設を検出した。墓壇は長軸1.97m、短軸1.07m、深さが0.77m、木棺の痕跡は、長軸1.32m、短軸0.55m、深さ0.56mを測る。床面は平坦であり、箱形を呈する木棺であったと考えられる。しかしながら前項「位置と墳丘・周溝」でも述べた様に、墓壇および木棺の上面東側約半分は既に欠失している(第11図)。

なお主体部西南隅より須恵器(杯身・杯蓋)が出土している。

また先述した様に主体部東側に、これに先行する土壌が検出されており、墓壇はこの土壌の西半部を切り込んで掘削されている。

## 6. 主体部内遺物出土状態 (第11図)

墓壇西南隅より、約0.4m四方の範囲内にかたまって須恵器杯身および杯蓋を検出した。

杯身(3)は完形品で、口縁部を下方に向けたうづつ伏せ状で出土した。これは、この須恵器群のうち、最西南端に位置する。

その北側に隣接する形で、杯蓋(1)が、やはり口縁部を下方に向けて出土した。残存部は全体の $\frac{1}{2}$ で小片7片により構成され、これらはいずれもかたまって出土し各々接合可能であった。

杯蓋(2)は残存部が全体の $\frac{1}{2}$ で、小片7片により構成される。7片各々は散在していたが、いずれも接合可能であった。

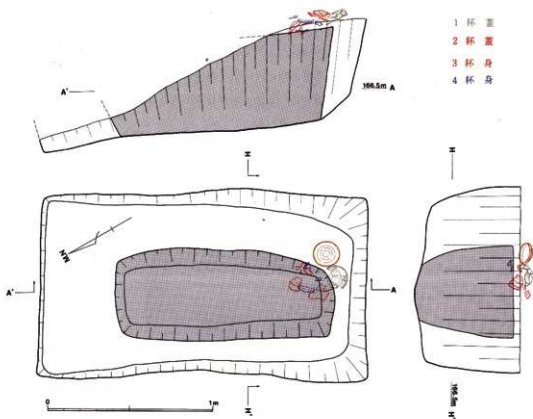
杯身(4)は口縁部のみ $\frac{1}{2}$ 残存しており、底部については全て欠失している。小片5片で構成され、散在して検出されたが、いずれも接合可能である。

完形で、あるいは、破片が一箇所にまとまって出土した杯身(3)および杯蓋(1)は、須恵器群の西半部に位置しているのに対して、杯身(2)および杯身(4)の破片は、須恵器群東半部のレベルの低いところに混在して出土した。また、杯蓋(1)は欠失部分を東側に向けて出土しており、以上のことから、東半部に位置していた須恵器は、割れて後当初の位置を動いているものと見做される。これは、本来は墓壇西南隅に置かれていたと思われる須恵器群が、木棺の崩壊とともに崩れ落ち、その後、盗掘あるいは土砂の流出等による削平に際して、その東半部を削り取られたためと考えられる。このことは、前項「埋葬施設」でも述べた様に、墓壇上面の東側約半分が欠失していることとも合致する。

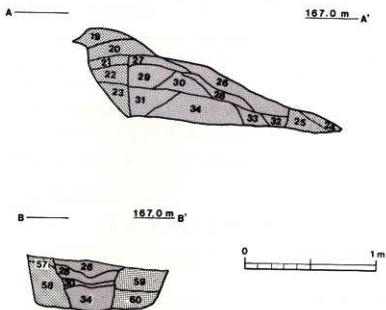
## 7. 主体部内出土遺物 (第13図)

前項「遺物出土状態」でも述べた様に、墓壇西南隅より、須恵器杯蓋2点(1・2)、同じく杯身3点(3・4・5)を検出した。

これらの杯蓋および杯身の口縁端部は、杯蓋(1)および杯身(3)、(5)では、内傾してにぶい段をつくっているが、杯蓋(2)および杯身(4)については、直立したのち内傾し、にぶい



第11図 巨勢山321号墳 主体部実測図



第12図 巨勢山321号墳 主体部土層断面図 (番号は第7図に対応)



段をつくるという形態をとっている。

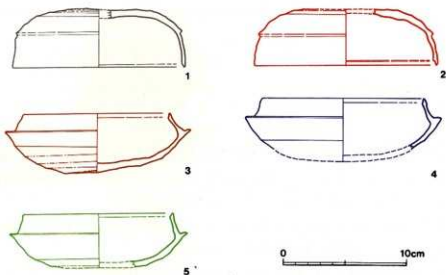
また、杯身の天井部と口縁部とを分ける境界は、にぶく、外方へ突出しない稜線となっているもの(2)と、凹線気味の稜線となっているもの(1)の2通りの形態が看取される。

以上の様な形態から、これらの須恵器はいずれもMT15型式のものと考えられる。

ところで、杯蓋(1)の口縁端部の形態と杯蓋(2)のそれを比較してみると、杯蓋(2)では、直立した後内傾するという、杯蓋(1)に比してやや新しい要素を有していることが看取される。しかしながら、天井部と口縁部との境界の稜線は、杯蓋(2)のそれがにぶく外方へ突出しないものになっているのに対して、杯蓋(1)のそれは、凹線的な形態をとっており、杯蓋(2)の方が杯蓋(1)よりやや古い要素を有しているといえる。このように、土器1個体中において、新しい要素と古い要素が共存していることは、興味深いことである。

さて、321号墳主体部出土の須恵器はいずれもMT15型式のものと考えられたが、「周溝内出土遺物」の項で述べたように、周溝内出土の須恵器はTK85型式に該当するものと見做された。すなわち、主体部出土の須恵器と周溝内出土のそれとの間に型式差が生ずることになる。この型式差については、次に述べるように理解することができる。既述したように、主体部が構築される以前に、その東側に土壌が掘り込まれているが、この土壌内には周溝内の火を用いた祭祀に伴ない形成されたとみられる焼土が投入されていた。さらに、周溝内出土の須恵器はこの祭祀に伴なうものであると考えられた。すなわち、主体部は周溝内祭祀と時間を隔てて構築されたのであり、この時間差が須恵器の型式差に反映されていると理解できるのである。

ただし、主体部出土の須恵器が杯身および杯蓋という日常的な器種であるのに対し、周溝内出土



第13図 巨勢山321号墳 主体部内出土遺物 (S. = 1/4)

のそれは高杯および竈という祭祀に関わる器種であり、祭祀関係の遺物に古い形態的特徴が残存する傾向があるという認識からして、周溝内に型式としては1段階古い形態を有する須恵器が埋納された可能性も考え得る。

### 第3節 巨勢山322号墳

#### 1. 位置と墳丘・周溝(第14・15・16図)

本墳は、323号墳より、西部部に延びる支尾根端部に立地し、標高約163mに基底を置く。

調査前においては、古墳の存在が明瞭ではなかった。しかし、標高165mから163mにかけてコンターラインの傾斜の変換があり、遺構の存在する可能性が認められた(第14図)。

そこで標高165mから162mにかけて東西方向に土層観察用アゼを残しながら掘削を始めた。

本墳の墳形は、先の分布調査では、円墳と登録されていたが、今回の調査の結果、墳丘背後に相当する東側周溝が直線上に掘削されており、平板測量図(第15図)を観察してみても、北東部、南東部でコーナーが検出され、本墳は、方墳であると考えられる。

墳丘規模は断面土層図(第16図)とも考えあわせて東西約7.5m、南北約8.0mと考えられる。

埋葬施設は、ふたつあり、この墳丘、周溝は主体部1に伴うものである。

墳丘断面を観察すると、上部はやや流失しているものの、厚さ約1.0mの盛土が遺残していた。主体部1に関する盛土は、東西方向に関しては、墳丘両端(第16図⑨層)より中央部に向けて積みあげていた。南北方向に関しては、不本意にも作業の下手際により、記録することができなかった。また、主体部1に伴う排水溝との関係もこの土層断面図よりよくわかる。

周溝は、墳丘背後に相当する東側においてのみ検出できたが、それ以外の場所では、当初よりなかったものと思われる。この周溝は、幅約1.0m、深さ約0.4mであり、遺物等は一切検出されなかった。

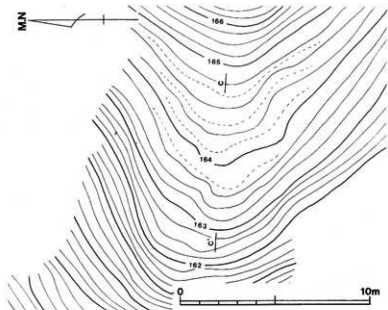
主体部2は、主体部1の墳丘盛土を掘り込んでつくられていたが、上部が流出しており、盛土を施していたかどうかは不明である。

#### 2. 主体部1(第17・18・19図)

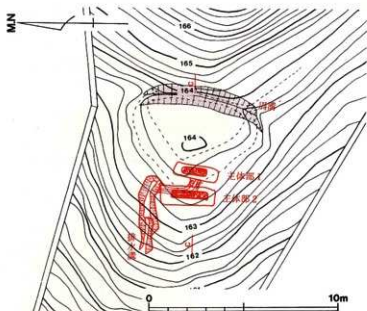
墳丘中央部において、地山を掘り込んだ、主軸M.N.-5°-E.におく木棺直葬墓である。墓壇は、長軸2.50m、短軸0.71m、深さ0.37m、木棺の痕跡は、長軸1.37m、短軸0.38m、深さ0.34mを測る。床面は平坦であり、箱形を呈する木棺であったと考えられる。

この主体部の墓壇埋土は、土層断面図(第19図)より、順次積み上げられており、木棺痕跡場所においても段階をおって土砂がくずれていったことがわかる。

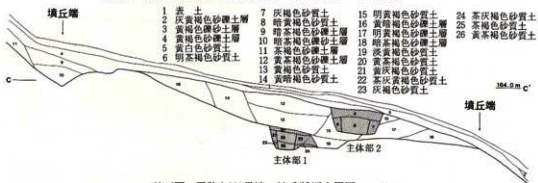
また、この主体部の西側より溝が検出された。これは、レベルが墓壇底よりも若干高いものの、排水溝以外の用途は考えることができず、ここでは排水溝と記述しておく。



第14图 巨势山322号墳 墳丘測量図(調査前 S. = 1/200)



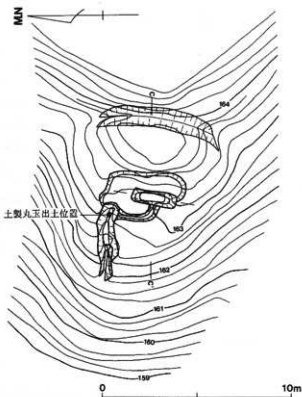
第15图 巨势山322号墳 墳丘測量図(調査後 S. = 1/200)



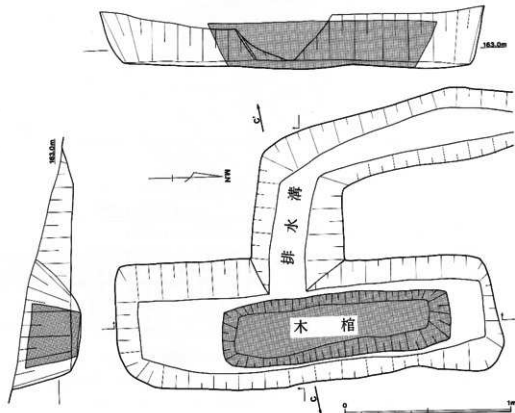
第16图 巨势山322号墳 墳丘断面土層図

この排水溝は、主体部の付近で幅0.75m、深さ0.32mであり、0.7m程西に下った所（主体部2の直下）で北側に90°まがり、さらに2.5m程で、再び西側へ90°まがっている。ここでは排水溝の幅も0.82mと広がっており、深さは0.26mと変化する。その上2.5m程西に下ったところで南側が2段堀りとなっており、溝幅も内側が0.56mと狭くなる。

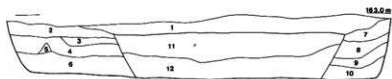
遺物は、第17図●付近で外面黒灰色、断面黄褐色を呈する土製丸玉が破片も含めて18点以上出土している。ただし、このような場所でのこの種の遺物が出土する意味については、明瞭にしがたいが、主体部に元来あったものが、排水溝を通じて流失した可能性を指摘しておきたい。



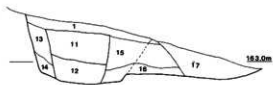
第17図 巨勢山322号墳 主体部1 検出状況 (S.-1/200)



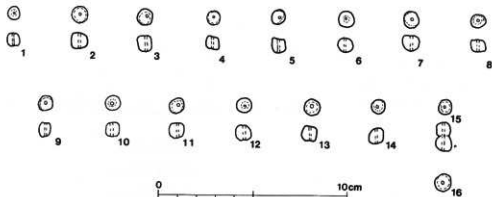
第18図 巨勢山322号墳 主体部1



- 1 黄茶褐色砂質土 (第16図の20に相当)
- 2 黄茶褐色砂質土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 茶灰褐色砂質土
- 5 黄色礫砂
- 6 黄灰褐色砂質土
- 7 黄茶褐色砂質土
- 8 黄茶灰褐色砂質土
- 9 黄褐色砂質土
- 10 赤灰褐色砂質土
- 11 茶褐色砂質土 (第16図の25に相当)
- 12 黄茶灰褐色砂質土 (第16図の28に相当)
- 13 黄灰褐色砂質土 (第16図の21に相当)
- 14 茶灰黄褐色砂質土 (第16図の14に相当)
- 15 灰褐色砂質土 (第16図の23に相当)
- 16 茶灰褐色砂質土 (第16図の24に相当)
- 17 淡黄褐色砂質土 (第16図の19に相当)



第19図 巨勢山322号墳 主体部Ⅰ 断面土層図



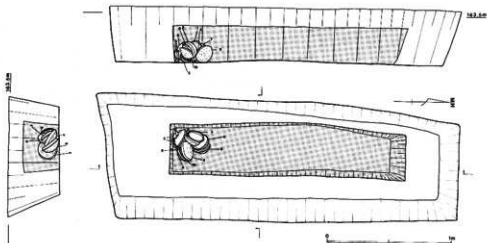
第20図 巨勢山322号墳 主体部Ⅰ 排水溝内出土 土製丸玉 (S. = 1/2)

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
長さ (mm)	7.30	8.35	7.80	7.00	7.15	8.15	8.30	7.65	7.40	7.45	8.15	8.00	8.45	7.45	7.70	7.80
幅 (mm)	7.20	8.00	6.45	5.95	6.70	7.30	7.05	6.05	7.05	7.20	7.35	7.50	7.60	7.40	6.00	6.85
孔径 (mm)	1.15	1.05	1.15	1.15	1.05	1.05	1.05	1.00	0.90	0.95	0.75	0.65	0.95	0.85	1.00	0.70

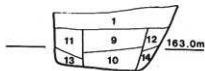
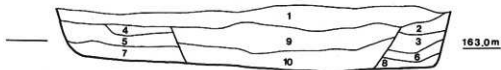
第2表 巨勢山322号墳 主体部Ⅰ 排水溝内出土 土製丸玉計測表

### 3. 主体部 2 (第21図)

この埋葬施設は、先の主体部1の墳丘盛土を掘り込んでつくられたものであり、主軸M.N.-2°-E.におく木棺直葬墓である。墓壇は、長軸2.81m、短軸0.96m、深さ0.42m、木棺の痕跡は、長軸1.73m、0.42m、深さ0.30mを測る。床面は平坦であり、箱形を呈する木棺であったと考えられる。遺物は、この木棺南側底面より、須恵器(杯身、杯蓋)が出土している。



第21図 巨勢山322号墳 主体部2 実測図



- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1 黄茶褐色砂質土 (第16図の19に相当) | 10 黄茶褐色砂質土 (第16図の25に相当)  |
| 2 黄茶褐色砂質土              | 11 灰褐色砂質土 (第16図の21に相当)   |
| 3 黄茶灰褐色粘質土             | 12 黄灰褐色砂質土 (第16図の20に相当)  |
| 4 黄褐色砂質土               | 13 茶灰褐色砂質土 (第16図の23に相当)  |
| 5 茶灰褐色砂質土              | 14 茶灰黄褐色砂質土 (第16図の21に相当) |
| 6 黄褐色砂質土               |                          |
| 7 黄灰褐色砂質土              |                          |
| 8 赤灰褐色砂質土              |                          |
| 9 茶褐色砂質土 (第16図の24に相当)  |                          |

第22図 巨勢山322号墳 主体部2 土層断面図

#### 4. 主体部 2 遺物出土状態 (第21図)

遺物は、木棺内南側底面にかたまって出土した。

これらの遺物は全て須恵器(杯身、杯蓋)であり、そのほとんどが、完形、あるいは復原完形の状態で残されていた。

須恵器は総数10点で、そのうちわけは、杯蓋5点(1~5)、杯身5点(6~10)であった。

北側より、杯身(9)が口縁を上にしてあり、その上に杯蓋(4)が口縁を上にして重なっていた。すぐ南側では、杯蓋(1)が口縁を西にして床面とほぼ垂直の状態であり、西側に杯身(7)が口縁西で、もたれかかっていた。その東側では杯蓋(5)が口縁北で、南側にやや傾斜しつつあり、その上に杯身(10)、杯身(8)が口縁を北にして重なっており、杯身(10)にかぶさるように、杯蓋(2)が口縁を南にし、若干南側に傾斜して出土した。これらの南側(木棺南端)には、杯身(6)が口縁を北側に向け、杯蓋(1)、杯身(8)にたおれかかり、その南側に杯蓋(3)が、口縁北側でかぶさって出土した。

このように、杯身(9)と杯蓋(4)、杯身(7)と杯蓋(1)、杯身(10)と杯蓋(5)、杯身(8)と杯蓋(2)、杯身(6)と杯蓋(3)というように、蓋がかぶさった状態ではないことを無視すれば、それぞれ杯身と杯蓋がセットと一応認識できる状態で検出できたが、後述するように、法量の比較により認識できるセット関係とは矛盾している。

#### 5. 主体部 2 出土遺物 (第23・24図)

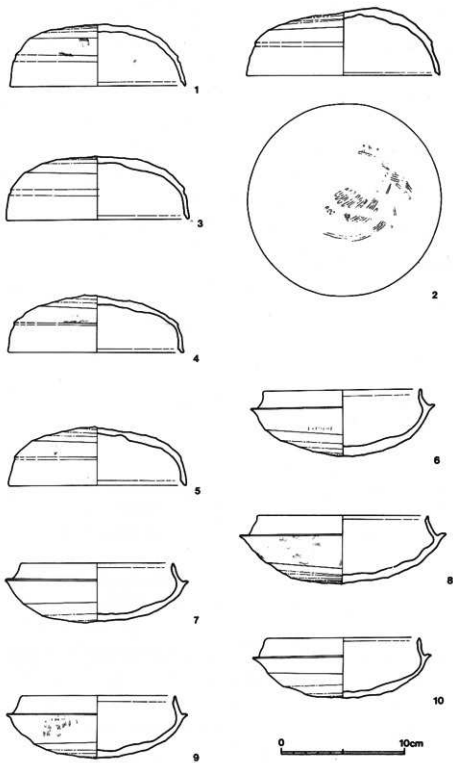
主体部2の木棺南側底面より、須恵器杯蓋5点(1・2・3・4・5)、杯身5点(6・7・8・9・10)を検出した。

杯蓋は、天井部と口縁部を分ける境界にいずれも凹線をめぐらせているが、(2)、(4)、(5)の凹線の下段についてはよく不明瞭なものとなっている。口縁端部は、内傾したのち段を有するもの(1・2・4・5)と、その段があまく不明瞭なもの(3)がある。また杯蓋(2)の内面には、同心円文状のタタキメが認められる。

杯身は、いずれもたちあがり低く、その内傾度は大きなものとなっている。口縁端部は、丸味を帯びて内傾したのち、ややあまい段のつくもの(8・10)と、その段が非常に不明瞭になったもの(6・7・9)とがある。

以上の様な杯蓋および杯身の形態より、これらはTK10型式の須恵器と見做して大過ないと考える。ただし、杯身の口縁端部の形態は、既述したように段を有しており、若干古い要素を残しているものと見做される。

さて、個体数が杯蓋、杯身ともに5点ずつと、数の上での一致がみられるが、第24図より各々の間には次のようなセット関係の成立も認められる。すなわち、杯蓋(2)に対して杯身(8)、杯蓋(3)に対して杯身(6)、杯蓋(1)に対して杯身(9)、杯蓋(5)に対して杯身(7)、杯蓋



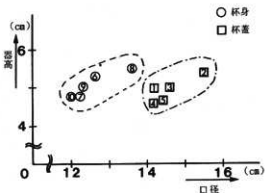
第23图 巨勢山322号墳 主体部2 出土遺物 (S. = 1/2)



(4) に対して杯身(10)である。しかしながら、このセット関係はさきに遺物出土状態で認識し得たセット関係と一部矛盾するものとなっている。これは、須恵器の出土状態からして、セットを意識して埋納されたものであるとは認め難いこと、また、第24図より看取されたようなセット関係は、明らかに動かし難いものであることから、当初はセットとして運び込まれた須恵器が、埋納にあたってはセットとして扱われなかったと理解するのが最も妥当であると考えられる。

ところで、杯蓋(1)、(4)、(5)および杯身(8)、(9)には、外面一部分にハケ状工具による成形痕が認められる(図版61)が残存するものはわずかで、その多くはヨコナデあるいはヘラ削りにより消失している。また、杯身(6)には、鋭利な工具によると思われる刺突状の痕跡が認められる。これは体部中程に、やや間隔をおいた2箇所を観察されるが、いずれもヨコナデによって消失しており、ごく一部しか残存していない。

この様なハケ状工具による痕跡や刺突状の痕跡は、いずれもヨコナデあるいはヘラ削りによりその多くを消失しているため、成形段階において施されたものとみられる。特に、ハケ状工具による成形痕は、ハケメの方向が縦あるいはななめ方向となっていることから、成形過程でロクロを使用しなかった可能性が高い。すなわち、本墳出土の須恵器の製作過程においては、本来の須恵器製作とは異なった手法が用いられたとみられ、このことから、製作時に在地工人が介入した可能性や、巨勢山古墳群近辺で窯が存在する可能性も想定し得るものと考えられる。



第24図 巨勢山322号墳 主体部2  
出土須恵器法量

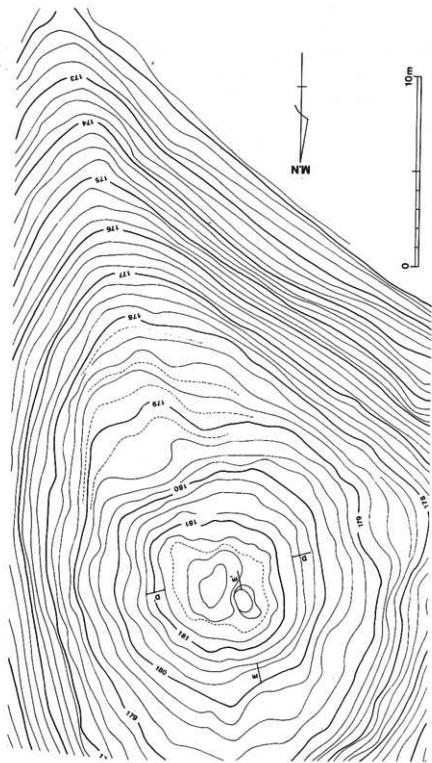
#### 第4節 巨勢山323号墳

##### 1. 位置と墳丘(第25・26・27・28図)

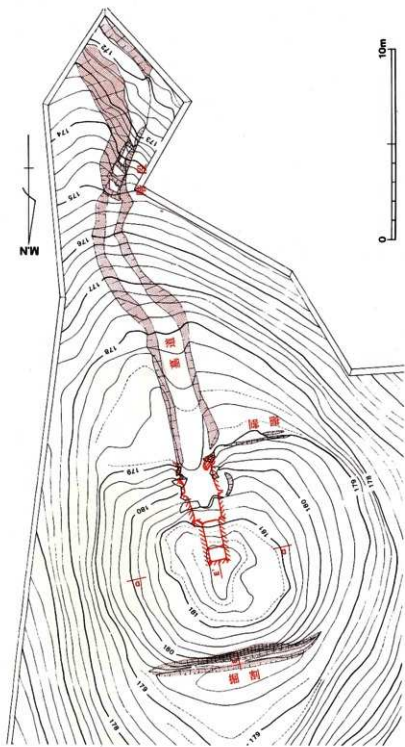
本墳は巨勢山山塊から北に向かって派生する一支尾根が一度下ってやや平坦になり尾根の鞍部となった後、再び高まった頂上部分にある。これを中心に東北に321号墳、北に324号墳、西に322号墳とそれらをのせる支尾根がさらに派生している。

調査前の時点においても腰高の墳丘の存在は明らかで(図版20~22)、また、南方の墳丘の中位においては葛城石英閃緑岩の露頭も認められた(図版22)。これは、横穴式石室の天井石であろうと考えたが、後に横穴式石室のそれであることが判明する。

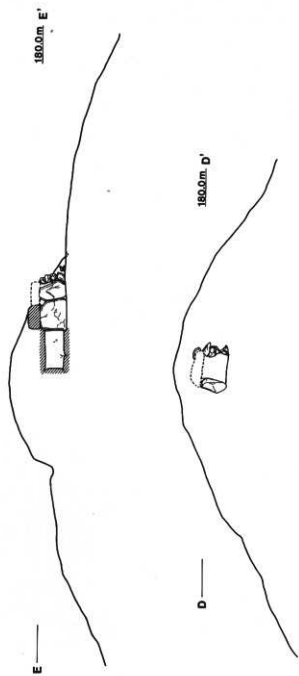
平板測量図(第25図)を作成したところ、墳丘東方では180.00m、南方では179.00m、西方では



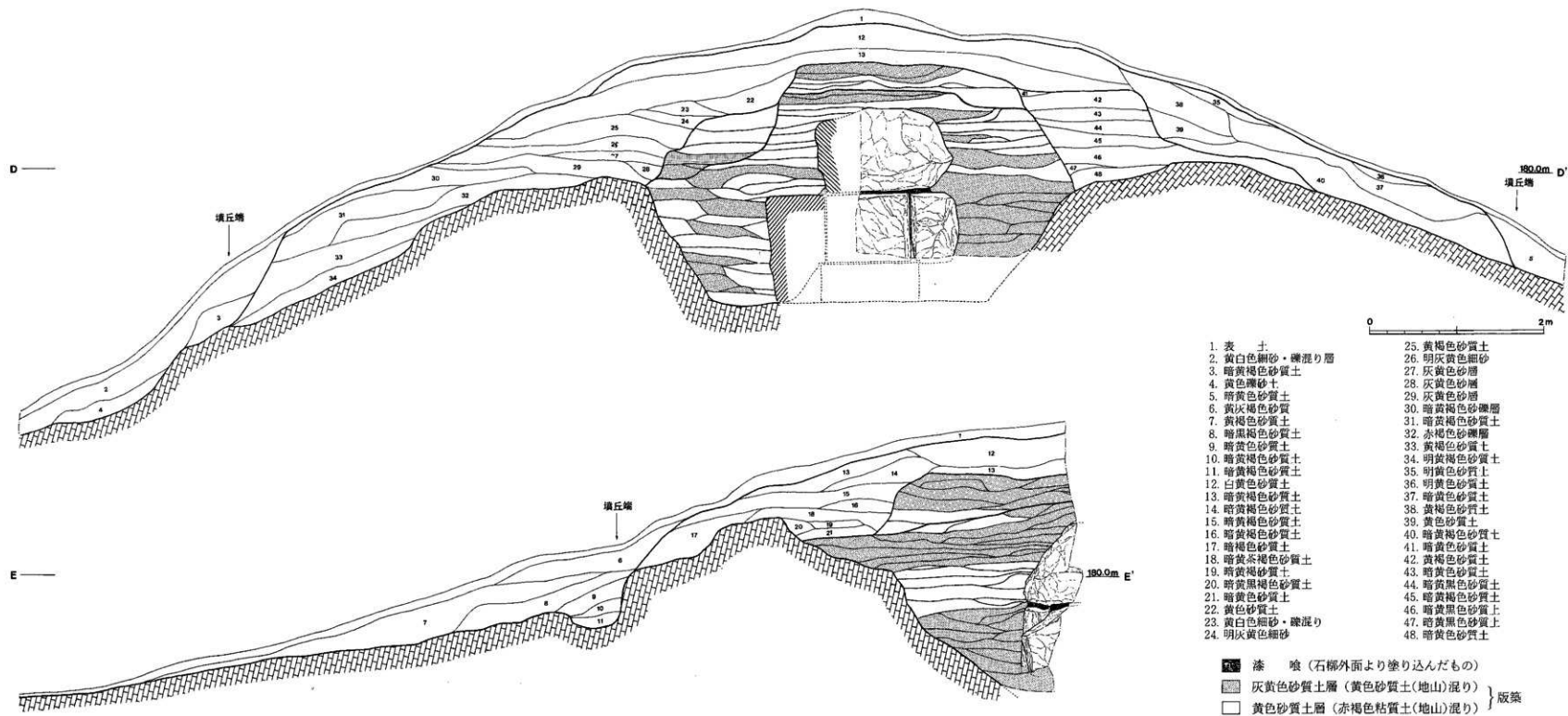
第25圖 巨勢11323号墳 堆丘測量圖 (調査前)



第26图 巨勢山323号墳 墳丘測量図（調査後）



第27图 巨勢山323号墳 墳丘断面図 (S. = 1/200)



第28図 巨勢山323号墳 填丘断面土層図

180.00m、北方では180.25m付近のコンターラインでそれぞれ、傾斜の変換が認められ、それぞれの方向のコンターが直線状に延びることから、方墳の可能性も考えられた。また、南方においては、傾斜変換部分のさらに南側に、約5m四方の平坦面があり、墓道等の検出も期待できた。

当初墳丘については墳頂部より東西南北各方向に土層観察用アゼを設けて掘削を開始し、表土を除去したが、その後本墳の現地保存が確定的となったため、東、北、西の各方向に幅1mのトレンチを設ける方法に切り替えた。

墳丘部分の表土、流出土を除去したところ(第26図)、北および南方においては直線状に延びる墳丘端を画する掘削が検出でき、本墳が方墳であること、南北の一辺が11.2mであることを確認できた。東西については掘削は存在しなかったが、墳丘断面土層(第27図)の観察あるいは、表土、流出土除去後の平板測量図により、一辺14.8mを測ることが判った。従って本墳は南北11.2m、東西14.8m、高さ2.25m~3.00mの若干東西方向に長い、長方墳であることが判明した。

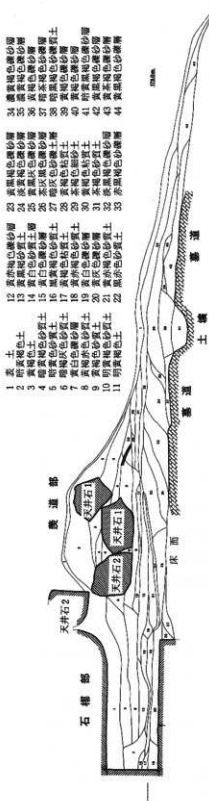
さて、墳丘頂部を中心として、東、北、西方向に設定した各トレンチの所見によれば、横口式石櫛の外面部の石材調整は、多くの部分については割石加工に留まっているが、各石材の接合面付近では敷打具<sup>(4)</sup>技法によるかと思われる、平滑に仕上げられた部分も認められる(第32図)。また、各石材の接合面、目地部分には外面からも漆喰が適当量効果的に塗り込まれており(図版32)、土砂や水の浸入を防いでいる。

墳丘土層断面(第28図)の観察によれば、墳丘の形成は、まず地山を全面に露出させた後、墓壇を1.5~2.0mの深さまで掘り込み、最下底に横口式石櫛の底石を置き、奥壁あるいは側石さらには天井石と配石するごとに、版築により埋設している。版築に用いた土は、ほぼ純粋に地山から成り、黄色砂質土の地山を主体とする灰黄色砂質土と、赤褐色粘質土の地山を内を含む黄色砂質土の両者を互層積みにし堅く叩きしめて、まず墓壇肩付近より天井石の上方約0.6mまでを被う。次いで通常の横穴式石室にみられる程度の盛土を、原則として墳丘の内側より外側にかけて行い、墳丘を形成している。なお、版築層および墳丘盛土の各層からは、第35図に示すような埴輪片や鉄製品残欠が出土しており、本墳が、先行して存在した古墳を破壊して築造されたことが判る。

## 2. 墓 道 (第26図、図版35~39)

後述するように本墳主体部の横口式石櫛はほぼ真南に開口するが、さらにその南方にはこれに伴う墓道を検出できた。墓道は最大幅2.5m、最大深さ0.3mを測る断面逆台形の溝状を呈している。

開口部より南方へ約15m比高にして約3.75mは若干西方へ蛇行しながら尾根鞍部上を通るが、175.00mのコンター付近で南西へ屈曲すると同時に尾根鞍部から西側の斜面へと至る。175.00mから173.50mへと至る斜面は傾斜角27度を測るほどの急斜面であるため、地山を削り出して4段の階段を設けている(図版38~39)。墓道はその後再び南東方向へと屈曲するが、もはや尾根鞍部上へと上ることはなく、調査区外となっている。なおこの付近では鞍部から西へ向けて大きく削ってそ



の下端を墓道の東側の肩としており、その西側には幅1m程度の平坦面を形成してこれを墓道とし、さらに西側は自然地形の急斜面となっている。

このような状況や、先述したように鞍部上から階段によりわざわざ西方斜面側へ下ることからみて、調査区外においても墓道は再び尾根鞍部上へと上ることはなく、斜面の中腹を尾根の方向と平行して延び、最終的には本墳の西南方向に相当する平地へと至ったものと推定される。

### 3. 横口式石槨 堆積(第29図)

本墳の埋葬主体である横口式石槨は、入口に近いやや高く幅の広い「羨道部」と、奥側の棺を安置する低く幅の狭い「石槨部」とに分かれている。以下記述にあたってはこのようにし、また、羨道部と石槨部の両方を指す必要がある場合には便宜上「石室」とのみ記す。

さて、石室内の堆積状況については、縦断面についてののみ表土から床面までの全土層を図化することができた。

羨道部には天井石を2石構築しており、入口に近い方の1石は全て(図版26~28)、続く1石は一部を石室内に落下させていたが、その最下底は、⑨層の上面に留まっている。後述するように、石室内では中世に再利用が行なわれたが、⑨⑩⑪層が間層として存在することから、少なくともこの段階では天井石は構築された状態であったことが判る。また、落下した天井石と残存した天井石の間には5cmほどの空間ができているが、こより石槨部へも①表土層が20cm以上の厚みで流れ込んでいる。①層内にはほとんど腐蝕の進んでいない枯枝のあったことからみても、羨道部における天井石の落下は比較的近時のことであろうと判断される。

⑨層は、焼土および炭層であり、石室再利用時における火の使用を裏付ける。その上層である⑩層は部分的に焼土の混ざるもので、同層内からは後述の再利用に伴う遺物が出土している。⑩⑪層は石室入口に向うに従ってレベルを上げるが、

入口部付近で消滅し、その延長は、㊸層の上層となる。これと復原して構築し得る天井石との空間が再利用当時の石室入口部分での高さに相当するもので、約80cmを測る。逆に奥へ向かうにつれ、この㊸層はレベルを下げ、石槨部入口付近では天井石との空間が120cm程度と最高になる。しかしながらいずれにせよ、立って歩けるほどの空間は望めず、再利用時における行動は、ほとんど座った状態で行なわれたことは想像に難くない。㊸層は石槨部入口付近で急にレベルを上げつつ㊹層の上面と合致して消滅し、その延長は㊹層の上面となる。㊹層の上層である㊺層からは、火熱を受けた動物遺存体が出土した(第5章 考察 松井章氏の報文参照)。再利用時に調理して食用に供した後、石槨部へと押しやったものであろう。

さて、この再利用面からさらに下の層についてはほとんどそれより以前の盗掘により形成されたもので、石室構築当初または直後の状態を留めるものは(a)石槨部入口に緑泥岩製の扉石を用いるがそれを固定するために用い、さらには羨道部の床面を兼ねた㊻層と(b)羨道の埋土である㊼、㊽、㊾、㊿層の計4層に過ぎない。

扉石は現存最大厚5.1cmを測る緑泥片岩製の板状のもので、㊸層の下底付近に下端が据えられ、石槨天井部までを閉塞していたものと思われるが、同層形成時の攪乱により833片の大小の破片となっている。

第3表は各層ごとの扉石(緑泥片岩)片の破片数と総重量および破片1個の平均値を示すものであるが、やはり石槨閉塞部近辺の㊼、㊽、㊾層各数値が目立って高いものとなっている。また、先述の再利用面の埋没土である㊿層も次いで高い数値を示しており、破片1個あたりの平均重量すなわち大きさも大きく周辺の各層とは隔絶した状況を呈している。ここでは扉石(緑泥片岩)片もまた故意に集められ、再利用されたのであろう。

㊼㊽㊾㊿層は盗掘に際して石室内に堆積していた土砂を石室外にかき出したことにより形成されたものである。これらのうち、㊼層にのみ扉石(緑泥片岩)片が認められることは、㊽～㊿層がいずれも羨道部の堆積土であり、㊼層形成の直前に至って盗掘はようやく扉石にまで達し、これを破砕したことを示している。なお、このかき出し行為以前に、羨道埋土を掘り込んで形成された土壌がある。埋土の㊼㊽層は若干黒っぽいが、上層の㊼層とはほぼ同質であることから、土壌の掘削は、先述の盗掘に伴って行なわれた行為と考えておきたい。

層序	データ 数(片)	重さ(g)	平均(g)
2層	4	217	54.25
5層	3	30	10.00
7層	1	1	1.00
8層	3	3	1.00
9層	20	690	34.50
16層	10	39	3.90
19層	2	20	10.00
20層	109	7,564	69.39
21層	25	1,806	72.24
24層	145	519	3.58
25層	159	6,833	42.98
26層	188	6,836	36.36
その他	164	1,603	9.77
合計	833	26,161	—

第3表 巨勢山323号墳 扉石(緑泥片岩)片 包含状況



### 構造と調整(第30・31・32図)

本墳主体部の構造は、葛城石英閃緑岩(第5章 考察 奥田尚氏の報文参照)の切石、割石を組み合わせた横口式石槨で、石室主軸の方向はM.N.-12°44'08"-W.にとりほぼ真南に開口する。石室全長は5.36mを測り、やや高く幅の広い羨道部と、棺を安置する低く幅の狭い石槨部とに分かれている。なお記述に際しては石室の左右は入口側から見た場合のそれとする。また数値は全て内法である。

石槨部の構造は、床面に2石、左右側石、奥壁、天井石に各1石を用いて合計6個の切石を組合せることにより成り、全長2.10mを測る。

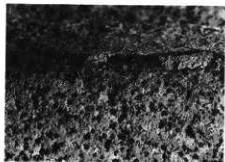
石槨部床面における奥壁側の1石は、復原幅0.90m、長さ0.70mで、石槨部全長の1/5に相当する。奥壁と、左右側石をその上にのせる三辺には、深さ1.5~2.0cmの段彫があり、各石材の安定を図っているが、左右側壁はやはり長年の土圧により若干外開きとなっており、現状での幅は0.92mを測る。続く床面の1石は復原幅0.90m、左側の長さ1.40m、右側での長さ1.35mを測り、左右の長さの差は石室構築当初からのものである。南端部には、閉塞用の扉石を嵌入するための仕口はなく、閉塞に際しては扉石をこれに接するようにして落とし込んだものと思われる。床面における2石の石材調整はいずれも敲打具技法よりなるが、羨道部に近い方の1石は表面の剝離が著しい。おそらく盗掘時に踏み荒されたためであろう。

奥壁を構成する1石は、高さ0.79m、幅は床石の断面により復原すると0.90m、現状では最大0.93mの直方体で、天井石との1.0cmの空間には漆喰を充填する。調整は、天井石や右側石に接する付近では一部成形段階の痕跡を残すが、多くは敲打具技法により平滑に仕上げられている。

石槨部右側石は高さ0.80~0.81m、長さは仕口までで下端2.10m、上端2.08m、最大長2.26mを測る。天井石と接する一辺には漆喰が充填されている。観察可能部分での最大高は0.88mで、床石と接する一辺には最大の深さ3.4cmの段彫がある。扉石を嵌入するための仕口は主軸に直交して2.0cm、平行して5.5cm程度の段彫となっている。石槨内に相当する面は敲打具技法により、平滑に仕上げられ、成形時の痕跡はわずかに認められる程度であるが、仕口を境にして羨道部側は調整がやや粗雑になる。

石槨部左側石は高さ0.80m、仕口までの長さ2.07m、最大長2.17m、観察可能部分での最大高0.96mを測り、床石と接する一辺には最大の深さ3.5cmの段彫がある。扉石を嵌入するための仕口は、主軸に直交して3.0cm、平行して8.0cmの段彫となっているが、平

行する部分のうち、3.0cmは、床石が羨道部側へとび出ている関係で、不用のものとなっている。調整は、右側石と同様で、石槨内と羨道部より見える部分では差が認められる。また、石槨内でも



第31図 巨勢山323号墳 石槨部左側石・天井石間 漆喰残存状況

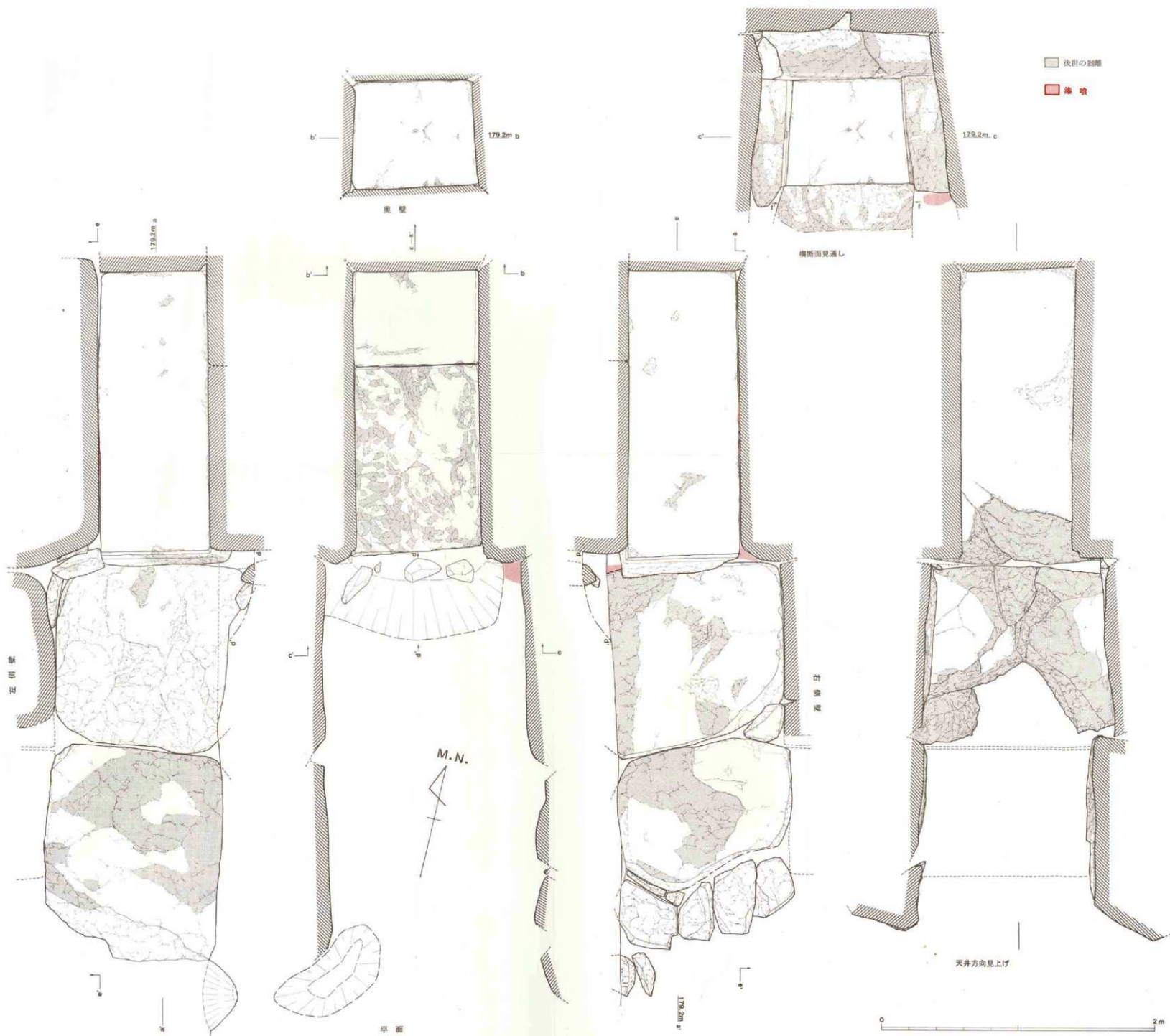
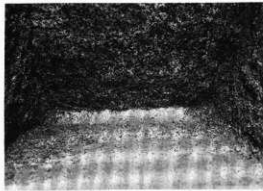


図30図 巨勢山323号墳 横口式石槨実測図 (S.-1/20)



石構部外面 北側小口(天井石・奥壁・左側石と漆喰)



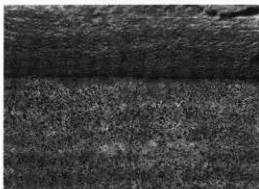
石構部外面 東側(天井石・右側石と漆喰)



石室内 石構部左側仕口上部付近



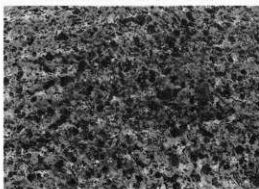
石室内 石構部右側仕口上部付近



石室内 石構部(天井石・右側石と漆喰)



石室内 義道部右側壁



敲打具技法による調整



粗作り段階の割石成形

第32図 巨勢山323号墳 横口式石塚細部写真

床石と接する下端付近では、成形の痕跡を残す部分がある。

石槨部天井石は、現状での最大幅は0.84mであるが、土圧での歪みの影響が認められるので床面と同様、0.90mの幅であったと復原しておきたい。観察可能部分での最大長は2.18mで、左右両側石と接する部分に段形は認められない。厚さは先述の墳丘断面との関係から、0.96m以上であることが判る。調整は、敲打具技法により平滑に仕上げられるが、一部に成形時の痕跡も残存する。なお、扉石を嵌入するための仕口が存在したか否かについては、この部分の剝離が著しく、明らかにすることはできなかった。

羨道部の幅は1.45~1.55m、長さは3.26mで、閉塞の有無・方法については明らかではない。その構造は、床面は土床で、その上に2個の巨大な直方体の石と数個の割石で構成される側壁を設け、さらに2石の天井石を構築している。漆喰の使用は石室外からのみ行なっているようで、石室内からは観察できない。天井石は入口側の石を全て石室内に落とし込んだ状態で検出され(図版26~28)、奥の1石も入口側の部分を欠失している。なお、羨道部の天井石のうち奥のものは石槨部のそれよりも約0.30m高い位置にあり、入口側のものはそれよりもさらに10~15cm高い位置に構築されていたことが、側壁との関係で判る。2石とも内面は敲打具技法により平坦に仕上げられている。

羨道部の床面は盗掘により荒らされ、凹凸はあるものの、ほぼ平坦な土床で、石槨部床石上面よりも0.08~0.15m低い位置にある。石槨部寄りには深さ25cm以上の掘り込みがある。先述の④層と数個の自然石によって埋められており、扉石の下端を埋め込んで立てるためにこのような構造になっているものと思われる。

羨道部右側壁は、奥より長さ1.34m、高さ1.24m程度の1石、次いで最大長1.05m、高さ1.26m程度の1石があり、両者間の上部の空間には逆三角形の石が落とし込まれている。なお、石槨部右側石の上部で羨道部の奥の1石との間に形成される空間(漆喰により充填されているように図化した所)には割石1石が存在したが、図化以前に崩壊したため、作図不能となった。さて、これらの主要な2石と逆三角形の石の調整はいずれも敲打具技法によるもので、一部に成形時の痕跡を残すものの、平滑に仕上げられている。次いで入口側には4個の割石が積み上げられ、さらに2石以上を積んで石室端となっている。これらの調整は粗雑で成形時の割石の状態を多分に残している。

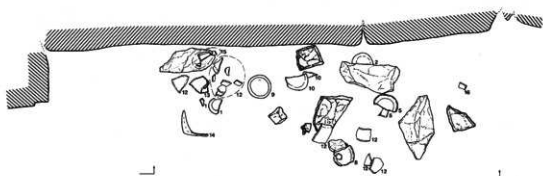
羨道部左側壁は、奥より長さ1.38m、高さ1.41m以上のほぼ正方形の1石に続き、長さ1.50m、高さ1.29m以上のほぼ長方形の1石があり、さらには石材の抜取り穴となっている。石槨部との接触部分は、不整形の割石3石により空間を埋めている。石材調整については、主要な2石はいずれも敲打具技法より成るが、奥の正方形の1石のそれはやや粗雑で、また入口側の長方形の1石も、抜取り穴に接する面については成形時の割石の痕跡をそのまま残している。

#### 4. 石室内遺物出土状態(第33図)

第33図に示すのは、石室再利用時の羨道部における遺物出土状況である。先述の通り、④黒赤色



②黒赤色砂質土(焼土炭)層



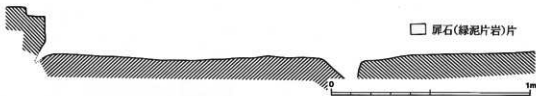
石槌部

炭道部



D12

□ 扉石(緑泥片岩)片



第33図 巨勢山323号墳 石室内再利用面遺物出土状態

砂質土(焼土・炭層)の上面で②黄赤褐色砂質土に包含されて出土した。

石室構築時の遺物として(15)(16)と扉石(緑泥片岩)片があるがいずれも細片となっており、盗掘の著しさを示している。

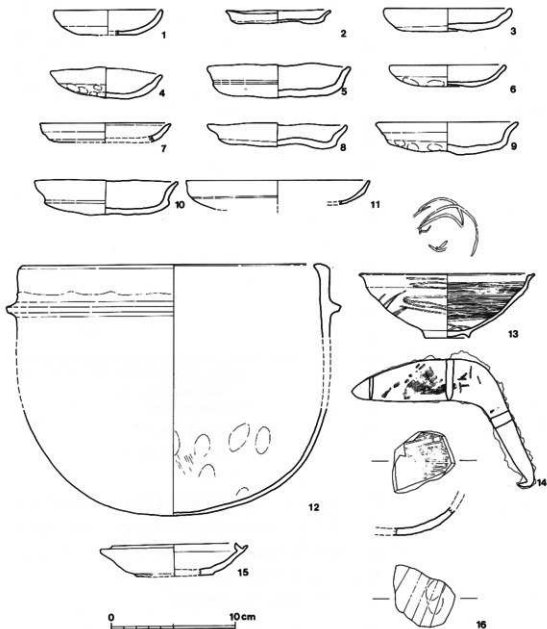
再利用に伴う遺物は(1)~(13)の各種土器と(14)の鉄鎌である。土器はほとんどが大小の破片となって散在しており、接合を行っても完形になるものは少ない。このことは、土器等を伴う再利用が行なわれなくなった後も人の出入りがあり、この面がかなり荒らされていることを示している。

また、先述の通り石槌部の同一面に相当する②層上面、③層内からは、火熱を受けた動物遺存体が出土した(第5章 考察 松井章氏の報文参照)。再利用時に炭道部で調理して食用に供した後、石槌部へ押しやったものであろう。

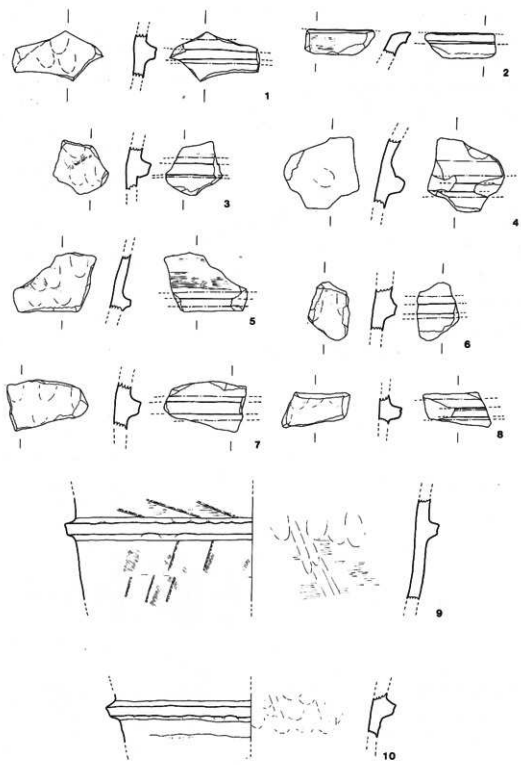
5. 出土遺物 (第34・35・36図)

石室内再利用面の出土遺物(第34図)には新旧のものが混在している。最も古い段階のものは(15)須恵器杯Hと(16)土師器杯Cで、いずれも飛鳥Ⅱ期に比定でき本墳の築造年代を示すものである。

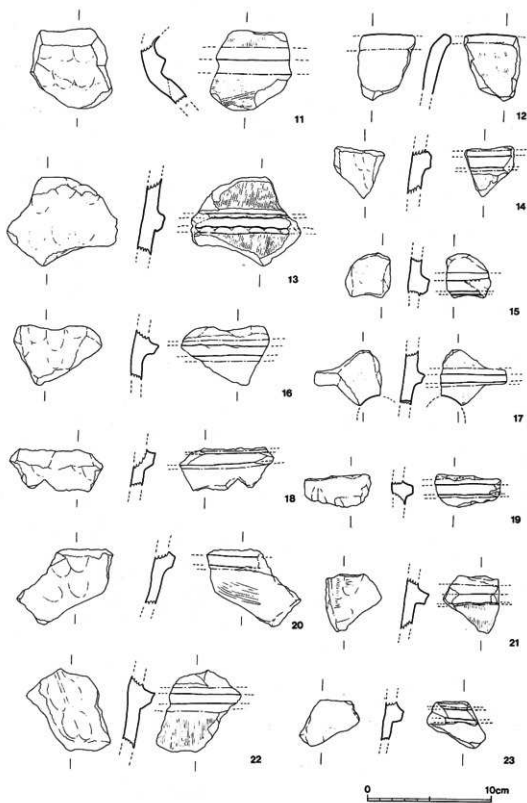
石室の再利用もまた長期にわたって行なわれたようで、(13)瓦器碗はⅡ段階3期で13世紀前葉に、(12)土師器羽釜はd1類で15世紀代に比定できる。



第34図 巨勢山323号墳 石室内再利用面出土遺物 (S. = 1/4)

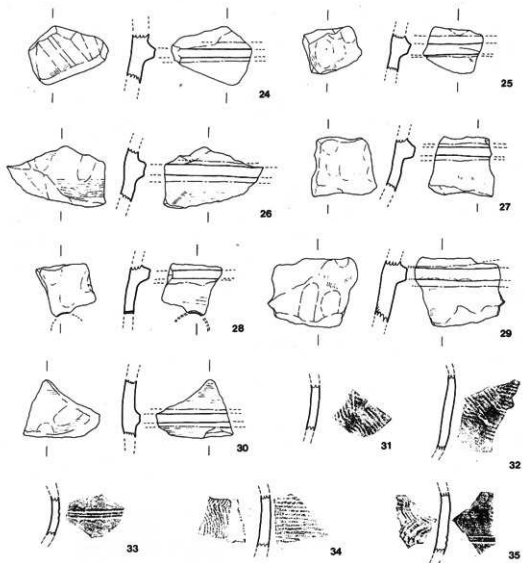


第35図の1 巨勢山323号墳 墳丘周辺および墳丘盛土内出土遺物 (S. = 1/5)

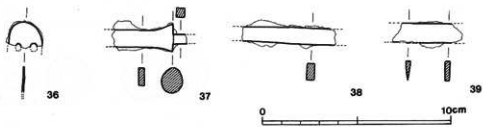


第35図の2 巨勢山323号墳 墳丘周辺および墳丘盛土内出土遺物 (S. = 1/2)





0 10cm  
(S. = 1/2)



0 10cm  
(S. = 1/2)

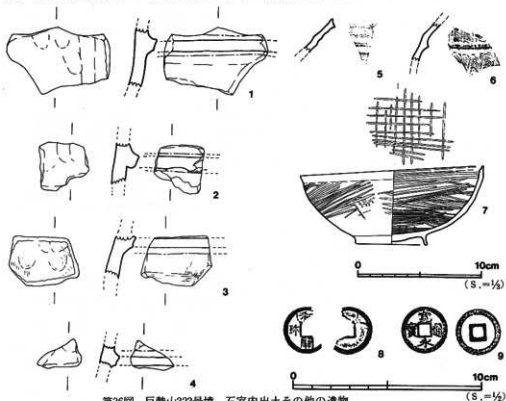
第35図の3 巨勢山323号墳 墳丘周辺および墳丘盛土内出土遺物

土師器皿は実年代を語り得るほど研究が進展していないので、ここでは型式名のみ記しておく、<sup>(6)</sup>  
 a類 (11)、b類 (1) (4) (5) (9) (10)、f類 (3) (7) (8) のほか、口径、器高が異常に小さいもの (2) がある。

以上の土器の詳細は観察表に譲り、ここでは<sup>(7)</sup>(14)鉄鎌についてのみに詳述すると、刃部から茎にかけて大きく折曲するC類Iに相当し草刈鎌かも知れない。刃部長10.7cm、茎部長7.1cmを測る。重厚なつくりで、刃部断面の最大厚は0.6cm、茎部断面の最大厚は0.9cmある。刃部片側の中央付近には木質の残存が認められるが反対の面には存在しない。木質の残存する面を下に向けて出土した。

墳丘周辺および墳丘盛土内出土遺物には埴輪片、須恵器片、鉄製品残欠がある(第35図の1・2・3)。埴輪の大半は円筒埴輪で、わずかに朝顔形埴輪(11)も含む。タガは低く断面は台形で、張り付けた時の指頭圧痕を側面に残すものも多い。サカシ孔の形状の判る破片は少ないが、円形(28)であろうと思われる。外面の調整は第一次調整のタテハケを施したままのものとそれに第二次調整を加えたものがある。ヨコハケは<sup>(8)</sup>(9)でみる通りB種ヨコハケであろう。内面の調整はタテ方向のナデが主で、一部ヨコもしくはナメ方向のハケをその前に用いるものがある。黒斑を有する個体はない。いずれも川西編年IV期に比定できよう。

須恵器片のうち甕と思われるものには、内面の同心円状のタキにスリケシを加えたもの(31)(32)とそのまま残すもの(34)がある。(35)は高杯形器台の杯部かと思われる破片で、外面に



第36図 巨勢山323号墳 石室内出土土その他の遺物

は2本の凹線と波状文があり、内面は同心円状のタタキメにスリケシを加える。いずれもTK23型式を前後する段階のものと見做して大過ないであろう。

鉄製品残欠は、多くの資料を得たが、図化できるものはわずかである。(36)は馬具辻金具の足金具かと思われるもので、2孔を穿っている。金銅装は認められない。(37)はやや特異ではあるが、長頸鐵の籠被と茎部分ではないかと思われる。

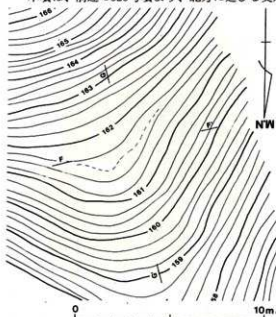
以上述べたように、墳丘周辺部および盛土内出土遺物は、埴輪については川西編年Ⅳ期、須恵器についてはTK23型式前後に比定でき、鉄製品の年代観についてもこれに矛盾するものではない。横口式石椁を内部主体とする本墳は、これに先行して存在した5世紀後葉段階の古墳を破壊して築造されたことが判る。

なお、石室内出土遺物には、先述した再利用面出土遺物の他に次のものがある(第36図)。(1)～(4)は円筒埴輪片、(5)(6)は須恵器であるが、(6)はTK23型式前後の縁口縁部の破片かと思われる、いずれも墳丘周辺および盛土内出土のものと同併期の遺物である。(7)は瓦器碗で、Ⅱ-1期に比定できる。石室内出土の中世の遺物中最も古い段階のもので、11世紀代に遡るかも知れない。盗掘はこの時期に行なわれたものと考えておきたい。(8)は和同開珎、(9)は寛永通宝である。それぞれ第29図の25層、32層から出土した。

## 第5節 巨勢山324号墳

### 1. 位置と墳丘、周溝(第37・38・39図)

本墳は、前述の323号墳より、北方に延びる支根の鞍部上に立地し、基底は、斜面高所である



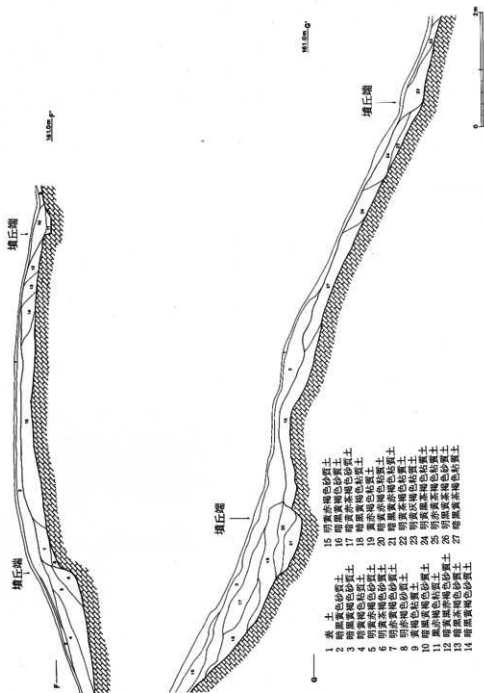
第37図 巨勢山324号墳 墳丘測量図(調査前)



第38図 巨勢山324号墳 墳丘測量図(調査後)

南側で標高約161m、斜面低所である北側で標高約159mに置く。

調査前においては、古墳の存在が確認できるような兆候は認められなかった。しかし、コンターラインの標高が162mと161mの間で若干の傾斜の変換があり、遺構が存在する可能性が認められ



第39図 巨勢1324号墳 墳丘断面実測図

た(第37図)。そこで、この変換点を中心として、南北と東西の2方向に土層観察用のアゼを残しながら掘削を始めた。

墳丘は、東西に関しては、周溝底より、南側は、周溝、北側は、標高159mでのコンターラインの変換と土層断面図(第39図)により、南北約7.0m、東西約6.0m前後の若干南北方向に長い楕円形の円墳であったと推測される。

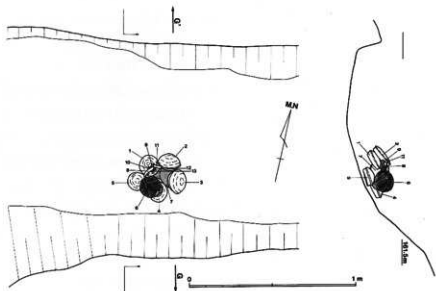
墳丘断面を観察すると、急斜面上に立地しているためか、墳丘上部は既に流失しており、主体部を検出するには至らなかったが、厚さ0.3mの盛土が遺存していた。この盛土は、南北方向に関しては、墳丘高所の南側墳丘端より北側にむけて順次積み上げており(第39図)、東西方向に関しては、墳丘中央部より両端にかけて積み上げてあることが、墳丘土層断面より看取できる。

周溝は、墳丘背後に相当する南側においてのみ検出できたが、北側には、当初よりなかったものと思われる。この周溝は、幅約1.5m、深さ約0.3m前後であり、周溝の南東部で土師器(長頸壺、短頸壺)、須恵器(杯身、杯蓋)、鉄製品等が一括して検出された。

## 2. 周溝内遺物出土状態(第40図)

遺物は全て本墳南側周溝のほぼ中央部で約0.4m四方にかたまっており、それ以外の場所からは検出されなかった。

土器は総数7点で、そのほとんどが完全な状態で残されていた。そして、土器の上ののるように鉄製品がかたまっていた出土した。



第40図 巨勢山324号墳 墳丘背後周溝内遺物出土状態

土器のうちわけは、須恵器5点と土師器2点であり、土師器の長頸壺(7)が、口縁を西に向けて横たわり、その上に須恵器の杯蓋1点と杯身2点(2・3)が覆うように被さっていた。そして、これらのすぐ南側に隣接するように須恵器の杯身2点(4・5)があり、その上に土師器の短頸壺が口縁を下にして被さっていた。なお、杯身・杯蓋は全て口縁が下になっていた。

また、鉄製品は、杯蓋(1)の上にコ字形金具(9)があり、その内部に刀子(10・12)、鋏付金具(13)などがかたまってあり、さらにその上に鉄鎌(8)が横たわっていた。

### 3. 周溝内出土遺物(第41図)

墳丘南側の周溝内より、須恵器、土師器、および鉄製品を検出した。

須恵器は、杯蓋1点(1)、杯身4点(2・3・4・5)である。杯身は4点出土しているのに対して杯蓋は1点であり、個数のうえで的一致は認められない。

杯蓋、杯身いずれも口縁端部の処理はシャープで、杯蓋天井部および杯身底部は平坦なうえにもやや丸味を帯びていることなどから、これらの須恵器はTK23型式のものと思われて大過ない。

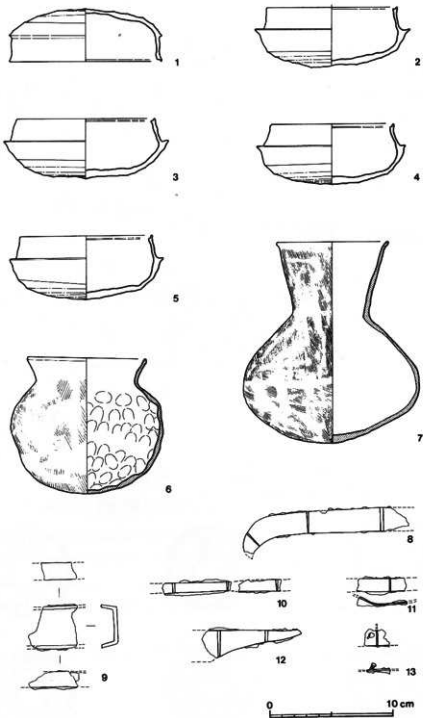
ところで、これらの須恵器のうち杯身(3)は、次の点で他のものとは異なった形態を示している。すなわち、色調においては、他の須恵器が黒味を帯びた青灰色であるのに対して杯身(3)は淡灰青色を呈しており、また胎土においても、他に比して径0.4cm~0.5cmというやや大粒の石英を含んでいる。さらに、他の杯身よりも底部の丸味が少なく、また底部にはヘラ記号があり、これは9.8cm程度の直線を描いたのち斜交して3.0cm程度の直線が描かれている。以上のことから、杯身(3)は、他のものとは製作地あるいは製作者などといった何らかの製作過程での相違を指摘し得る。

また、鉄製品については、鉄鎌(8)、コ字形鉄製品(9)、刀子(10・12)、鋏付金具(13)などが出土している。いずれもコ字形鉄製品中に入れられた状態で検出されており、コ字形鉄製品は皮革などを用いた箱状のものの底板であった可能性も考えられる。

土器に関する詳細は観察表に譲り、ここでは鉄製品について詳述すると、まず(8)は曲刃の鉄鎌で、刃部長推定11.2cm、刃部最大幅1.8cm、刃部最大厚0.2cmを測る。柄への装着方法・角度については破損のため明らかにし難い。(9)はコ字形鉄製品と名付けた通り断面がコ字形を呈するもので、1枚の鉄板の両端を折り返している。先述の通り箱状のものの底板であろうと想定しているので、内法にて記しておく。底部幅2.5cm、立ち上り長1.0cm、同高0.9cmを測る。(13)は厚さ0.1cmの薄い鉄板に鉄頭径0.4cm、同足部分の断面径0.2cmの鋏を打ちつけたものである。鉄頭下面と鉄板の間は最大0.5cm開いているが、有機物の存否については不明である。

なお本墳については、主体部は既に流出しており、検出できなかったが、墳丘周辺、とくに北側の低い緩斜面においてさえ、上記以外には一片の遺物も得ることはできなかった。

鎌、刀子といった、副葬品としてはむしろ通常の鉄製品を周溝内に納めているという特殊な状況からみても、おそらくは、主体部内には副葬品を入れなかったものと考えておきたい。

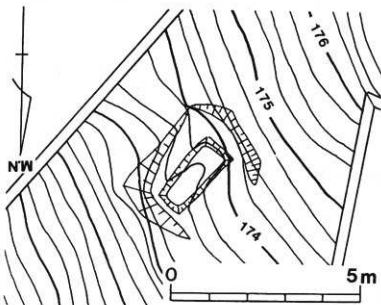


第41图 巨勢山324号墳 墳丘背後周溝内出土遺物

## 第6節 その他の遺構・遺物

### 1. 土 壙 1 (第42図)

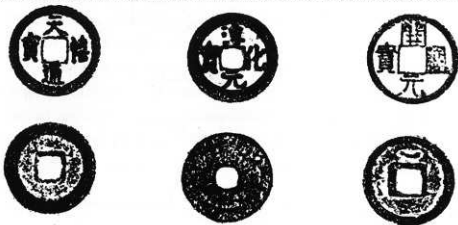
東地区斜面の上方で土壙を検出した。斜面に併行して長軸があり、長軸2.08m、短軸0.87mを測る。底面は平坦であるが、西南端と東北端では斜面なりに0.28mの比高をもって下降する。ほぼ水平に堆積しており、遺物は認められなかった。土壙の周辺には若干の整形が認められる。



第42図 土壙1測量図(調査後、S. = 1/100)

### 2. 西地区斜面出土の銅銭(第43図)

西地区斜面の標高175.25m付近で遺構を伴わず表土直下の黄褐色砂質土から銅銭3枚が出土した。



第43図 西地区斜面出土銅銭拓影(原寸)



## 第 2 次 調 査

### 第 7 節 巨勢山243号墳

#### 1. 位置と墳丘(第44・45・46図)

243号墳は、本古墳群の南西に伸びる尾根が、南西及び南方向に分かれる分岐点に立地し、標高約240mに基底を置く。

本墳の墳形は、先の分布調査では円墳と報告されたが、発掘調査後の平板測量図(第45図)を観察すると、墳丘の南半が土採り工事のため破壊されているものの、コンターラインが東、西、北部で直線状になり、北西部では明瞭にコーナーが検出された。よって本墳は方墳と考えられる。墳丘規模は、東西17m、南北推定18mである。

墳丘断面(第46図)を観察すると、墳丘の上部は既に流失しており、その高さは不明であるが、厚さ約40cmで盛土が遺残していた。墳丘はこの盛土と地山の整形により形成される。地山は、墳頂部を平坦に整形しており、また、東、北斜面では、整形した様子は伺えなかったが、傾斜角がやや急になる西斜面では、墳丘基底付近で2段に平坦面を造っている。これは盛土の土留めを目的としたものと思われる。なお、東、西斜面では明確ではないが、北斜面の堆積状況からみて、盛土は頂部から順に積まれていったことが判る。

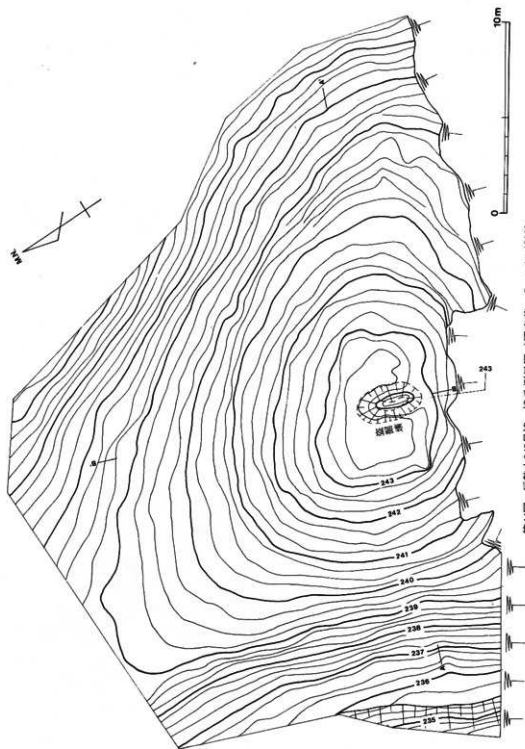
#### 2. 主体部1(第47図)および下部土壌(第48図)

主体部1(第47図)は墳頂中央に存在する木棺直葬墓である。これは、当初から盗掘によるかと思われる陥没が認められた地点で、主体部の存在が予想されていたものである。

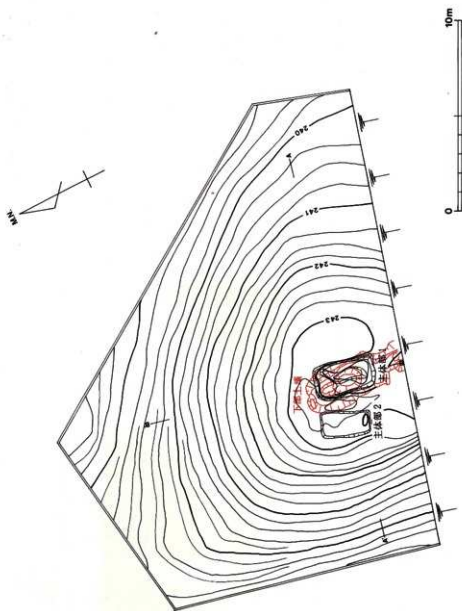
墓壇は、長軸3.3m、短軸1.7mの隅丸長方形を呈する。木棺は主軸をM.N.-23°-E.に向けており、長軸2.6m、短軸1.2m、最大の残存の深さ0.3mを測る。底は平坦であるが、長短共側辺は斜めに立ち上がっており、剝抜式舟形木棺を用いた可能性が高い。遺物は墓壇埋土中より須恵器が検出されたが、木棺内からの遺物は認められなかった。

この主体部1の下層に地山を掘りこんで主軸をM.N.-10°-E.に向ける、長軸5.1m以上、短軸2.4m、深さ0.6m以上の土壌(以下、下部土壌)が存在した。平面形は概ね楕円形であるが、南部でややくびれ再び広がるという状況を呈する(第48図)。この土壌埋土中より、須恵器片、鉄片が検出された。

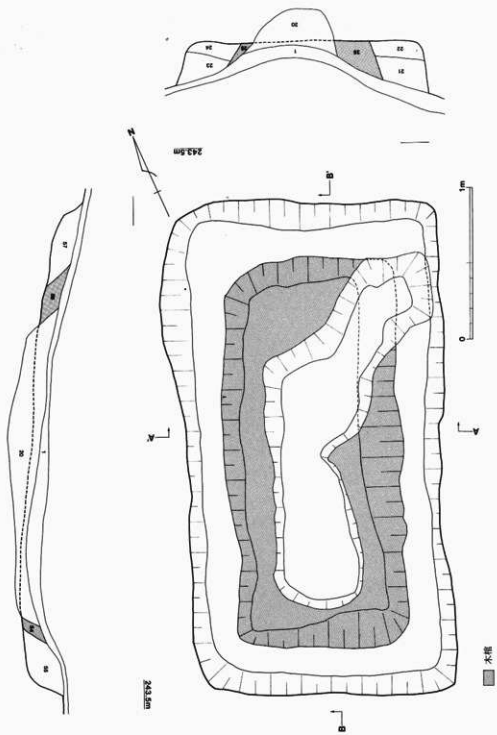
主体部1は、この下部土壌が埋められた後、その埋土を掘りこんで造られている。また、「遺物の出土状態」で述べるように、墓壇埋土出土の須恵器と下部土壌埋土の須恵器に同一個体のものがあった。



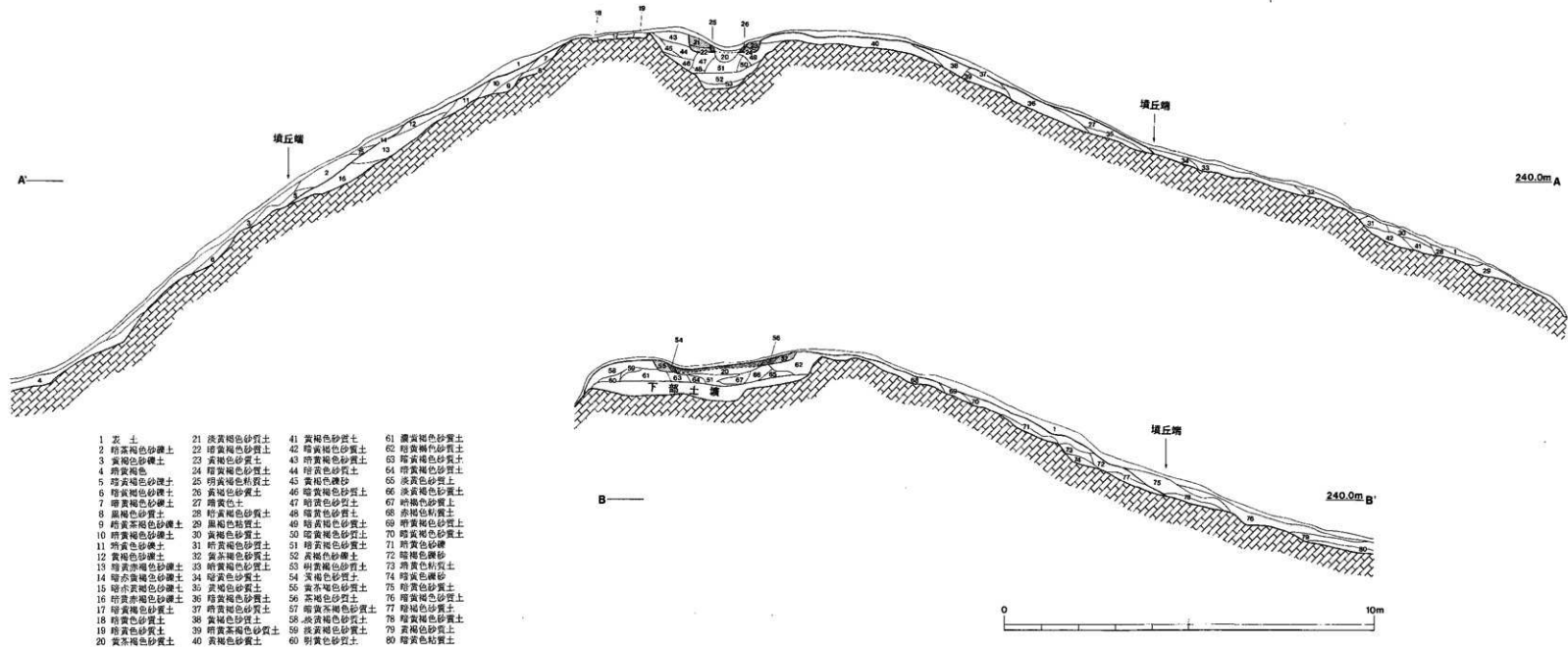
第44图 巨纳山243号填 填丘测量图 (四叠前, S. = 1/200)



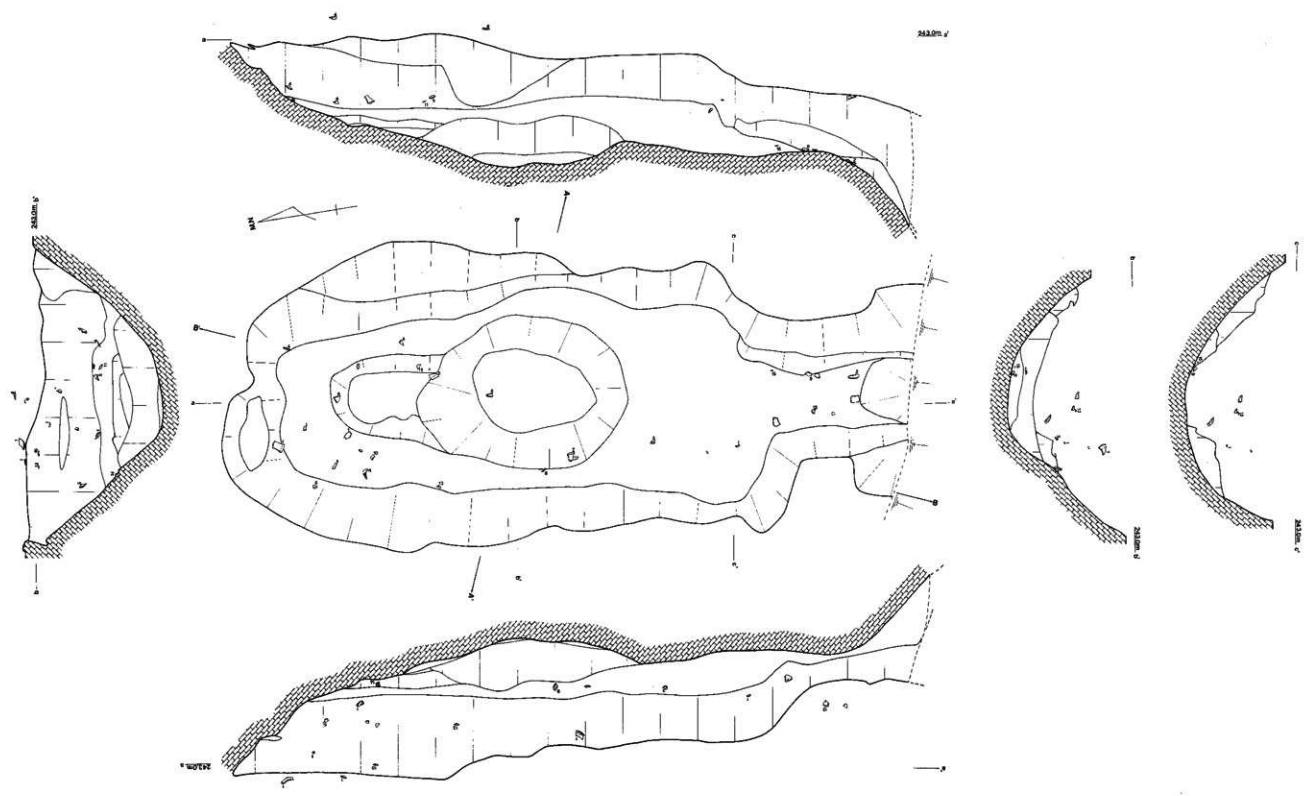
第45図 巨勢山243号墳 墳丘測量図 (調査後、S. = 1 / 200)



第47図 巨勢山243号墳 主体第1実測図 (番号は第46図に対応)



第46圖 口勢山243号墳 填丘土層断面図



第48図 巨勢山243号墳 下部土構および遺物出土状態

### 3. 下部土壌遺物出土状態(第48図)

遺物はいずれも破片となった須恵器と鉄製品で、主体部1の墓壇埋土より出土したのもある。

(1) 須恵器杯蓋は同一個体が大小の6片に分かれて出土し、約 $\frac{1}{2}$ まで復原することができた。出土位置を図化できたのはうち5片で、その分布をみると、4片が下部土壌の北側に集中し、1片のみが、土壌がやや幅を狭める C-C' 断面付近にある。北側の4片のうち、2片は主体部1の墓壇埋土より出土したもので、他は下部土壌埋土内より出土した。

複数の破片を同一個体と認定できたものとしては他に、(4) 須恵器杯身(3片)、(5) 須恵器杯身(2片)がある。

また、鉄製品としては、(14) 鹿角装刀子、(15) 鉄鏃などがあるが、いずれも破片となって出土している点注目される。

同一個体であっても破片1片1片の分布が垂直的にも水平的にも分散的であること、接合を行っても完形になるものは1点もなく、多くは小破片であること、鉄製品も破損した状態で出土したことなどから、これらの遺物は、この場で割られて散乱したとするよりも、墳丘上などで割られたものが、この下部土壌を埋めるに際して、土砂といっしょに流入したと考えた方が合理的であろう。すなわち、主体部1への埋葬に先行して行われた墓前祭祀の一例として理解しておきたい。

### 4. 主体部2(第49図)

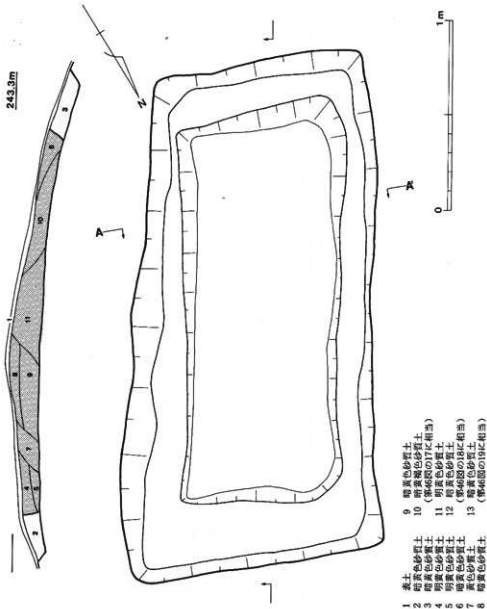
主体部2は、主体部1の西側に並列して造られていた木棺直葬墓である。墓壇は長軸2.7m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。木棺は主軸をM.N.-32°-E.に向けており、長軸2.1m、短軸0.87mを測る。遺存状態は極めて悪く、深さ最大で5cmしか残っていない。遺物の出土も認められなかった。このため、主体部1との前後関係は明確にし難いが、主体部1が墳頂ほぼ中央に存在することから、主体部1を築造後、主体部2を造ったものと考えられる。

### 5. 下部土壌内出土遺物(第50図)

主体部1の埋土および下部土壌より、須恵器と鉄製品を検出した。以下これらの出土遺物について記述するが、須恵器の詳細は観察表に譲り、鉄製品の詳細は本文中で述べる。

須恵器はいずれも破片で、杯蓋(1・9・10・11・12・13)、杯身(2・3・4・5・6)、踵(7)、高杯(8)である。

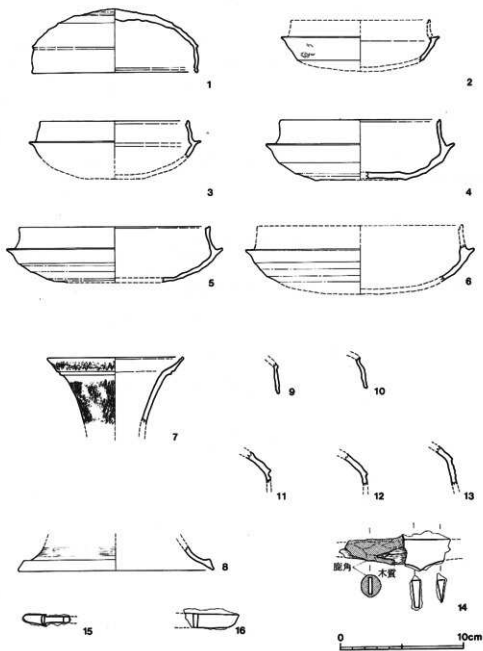
各個体の細部について観察すると、杯蓋の天井部と口縁部との境界は、やや外方へ突出した稜線となっているもの(1・9)と、凹線となっているもの(10・11・12・13)の両者が認められる。また、杯蓋、杯身の口縁端部は、やや丸味を帯びて内傾し、あまい段をつくるものとなっている。図上復原し得た6個体以外はいずれも小片で、全体のプロポーションを知ることはできないが、上記の様な細部の形態、あるいは杯身のたちあがりや内傾度の大きいものであること、さらに稜



- 1 赤土
- 2 暗茶色砂質土
- 3 暗茶色砂質土
- 4 暗茶色砂質土
- 5 暗茶色砂質土
- 6 暗茶色砂質土
- 7 赤土
- 8 暗茶色砂質土
- 9 暗茶色砂質土
- 10 暗茶色砂質土
- 11 暗茶色砂質土 (第48図の17に相当)
- 12 暗茶色砂質土
- 13 暗茶色砂質土 (第48図の18に相当)
- 14 暗茶色砂質土 (第48図の19に相当)

第49図 巨勢山243号墳 主体部2実測図





第50图 巨势山243号墳 下部土層内出土遺物

(7)は頸部が細長く外反するものであることなどから、本墳出土の須恵器はMT15型式のものと見做して大過ない。なお、杯蓋(1)の天井部には、焼成時における重ね焼きに起因すると思われる粘土の付着が認められる。また、杯身(2)には指紋の跡が認められる。

次に鉄製品について述べる。

(14)は鹿角装把付刀子である。把と刀身の一部分が残存しており、把に鹿角が装着されているが、その下から木質が露出している部分もある。区は大きく突出したのち、再び急激に幅を狭めて刀身となる。刀身は、幅1.9cm、棟の幅0.6cmで、断面が逆三角形を呈している。また、区の部分の断面は、幅2.2cm、長辺0.7cm、短辺0.4cmの逆台形、茎の部分の断面は、幅1.3cm×0.3cmの長方形となっている。

(15)は、鐵身断面がレンズ状の両丸造の細根式鉄鏃である。鐵身の形状は長三角形で脇快を有し、そこから籠被となっている。籠被の断面は0.5cm四方の正方形である。

(16)は刀子の把の破片かと思われ、その断面は1.1cm×0.3cmの長方形を呈している。

- 注1 田中一広「奈良縣御所市巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」(『御所市埋蔵文化財調査概報58-1』、1984年)  
2 田辺昭三「阪邑古墳址群 I」(『平安学関研究論集』第10号、1966年)、以下須恵器の型式分類等は本書に依る。  
3 藤田和孝「奈良縣御所市室 巨勢山墳谷10号墳発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第4集、1985年)、P.30注6  
4 和田崎吾「古墳時代の石工とその技術」(『北陸の考古学』『石川考古学研究会誌』第26号、1983年)  
5 西弘海「B 土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 Ⅱ』『奈良国立文化財研究所学報』第31冊、1978年)  
6 毛利光用子「布留遺跡 布留(西小路)地区出土の中世土器」(『考古学調査研究中間報告』11、1985年、埋蔵文化財天理教調査団)  
7 澤出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」(『考古学研究』第13巻3号、1967年)  
8 川西空幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)  
9 毛利光用子「IV 丸形椀と圓の扁年案」(『布留遺跡 布留(西小路)地区中世の遺構と出土瓦器』『考古学調査研究中間報告』6、1982年、埋蔵文化財天理教調査団)

## 土 器 観 察 表

巨勢山321号墳	周溝内出土土器観察表	61
巨勢山321号墳	主体部内出土土器観察表	63
巨勢山322号墳	主体部2内出土土器観察表	64
巨勢山323号墳	石室内再利用面出土土器観察表	67
巨勢山323号墳	墳丘周辺および盛土内出土土器観察表	69
巨勢山323号墳	石室内出土その他の土器観察表	74
巨勢山324号墳	周溝内出土土器観察表	75
巨勢山243号墳	下部土壇出土土器観察表	77

巨勢山321号墳 周溝内出土土器観察表

通物番号 出土場所	形態と調整 ○口縁部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面	備考
1 須恵器 高杯 墳丘背後周溝内	<p>口径 14.8cm 器高 10.6cm</p> <p>口縁部は、内彎気味に外方へのびたのち、さらに上外方へのび、端部は丸くおさまっている。脚部は外反して下り、端部近くで下方に屈曲する。西方向に、外面から内面に向けて穿たれた長方形スカシを有する。</p> <p>○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ後1条(18本)の波状文。底部付近はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび40本のカキノ調整。 内面 ヨコナデ。</p>	<p>直径5mmの石英をわずかに含む。 直径1mm以下の石英、長石をわずかに含む。雲母をわずかに含む。</p>	<p>良好。</p>	<p>○青灰色。 ○灰青色。 ○青灰色。</p>	<p>脚部内面以外の全体に自然釉が付着している。</p>
2 須恵器 高杯 墳丘背後周溝内	<p>口径 12.7cm 器高 10.5cm</p> <p>口縁部は、内彎気味に外方へのびたのち、さらに上外方へのび、口器部のみ外反して面を有する。脚部は外彎気味に下外方に下り、端部近くで大きく外方にひらく。外縁面は、やや内傾した窪み気味の平面を成す。</p> <p>○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヘラケズリ(ロクロの回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。</p>	<p>直径1cmの石英をわずかに含む。 直径1mm以下の石英、長石をわずかに含む。雲母をわずかに含む。</p>	<p>良好。</p>	<p>○灰青色。 ○灰青色。 ○青灰色。</p>	
3 須恵器 罐 墳丘背後周溝内	<p>口径 11.7cm 器高 13.0cm</p> <p>口縁部は、外反して上外方へのび、上部で外方へ屈曲させ、再び上外方へのびる。屈曲点外面に凹線をめくらせている。端部は、わずかに内傾する平面を成す。肩はなだらかに下り、体部最大径は中位よりやや上方に有する。体部最大径をはかる部位に、円孔スカシ(直径1.6cm)を外面から内面に向けて穿つ。体部は全体的に丸味を帯びている。底部は丸くおさまっている。</p> <p>○外面 ヨコナデ後1条(37本)の波状文。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ後1条(9~13本)の波状文。波状文を施した後、その上下をヨコナデで消している。波状文上方に残いヘラガキ沈線が1本施されている。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。</p>	<p>直径0.5mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。雲母をわずかに含む。</p>	<p>良好。</p>	<p>○淡灰青色。 ○灰青色。 ○灰青色。</p>	<p>底部に粘土粒がわずかに付着しているが、焼成時における焼き台の痕跡かと思われる。 底面内面にも粘土粒の付着が認められる。 体部中位より下方に、指頭圧痕が認められる。 体部内面以外の全体に自然釉が付着している。</p>
4 須恵器 罐 墳丘背後周溝内	<p>口径 12.6cm 器高 12.3cm</p> <p>口縁部は、3の罐と同様の形態をとる。体部ほとんど3と同様であるが、3よりも肩部の隆りが明瞭であり丸味を帯びない。円孔スカシ(直径1.6cm)は、内面から外面に向けて穿たれている。底部はやや丸い。</p> <p>○外面 ヨコナデ後1条(45本)の波状文。 内面 ヨコナデ。</p>	<p>直径0.5mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。</p>	<p>良好。</p>	<p>○淡灰青色。 ○灰青色。 ○灰青色。</p>	<p>底部に焼成時における焼き台の痕跡が認められる。 底面内面に粘土粒の付着が認められる。 体部中位より下方に指頭圧痕</p>

遺物番号 出土場所	形態と調整 *口縁部 *体形 *底 部(脚部)	胎 土	焼 成	*外面 色 調 *内面 *断面	備 考
	*外面 ヨコナデ1条(9~13本)の波状文。波状文を施した後、その上下をヨコナデで滑している。波状文上方に浅いヘラガキ沈線が1本施されている。 内面 ヨコナデ。 *外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。				が認められる。体部内面以外の全体に自然釉が付着している。
5 須磨器 鉢(口頸部) 墳丘背後周溝内	口径 12.7cm (残存片からの回転復原) 口縁部は、3の縁と同様の形態をとる。 *外面 ヨコナデ1条(16本/cm)の波状文。(回転台の方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 *----- *-----	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	良好。	*灰青色。 *青灰色。 *灰青色。	
6 土師器 钵身 墳丘背後周溝内	口径 10.4cm (残存片からの回転復原) 口縁部は、わずかに外反し、底部は丸くおさめられている。体部はやや丸味を帯びる。 *外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 *外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデの後ココ方向にヘラミガキを施し、その後タテ方向に放射状のヘラミガキを施す。 *-----	直径0.5mm以下の長石、チャートを若干含む。	やや良好。	*明赤茶褐色。 *明赤茶褐色。 *明赤茶褐色。	体部外面に指頭圧痕が認められる。
7 土師器 钵身 墳丘背後周溝内	口径 10.5cm 器高 3.3cm 口縁部はやや外反する。底部は内傾して丸くおさめられている。体部はやや丸味を帯び、底部は平らである。 *外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 *外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデの後放射状のヘラミガキ。 *-----	直径1~2mmの石英、チャートをわずかに含む。直径0.5mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。	やや良好。	*赤茶褐色。 *赤茶褐色。 *赤茶褐色。	底部中心部分に原産が認められる。

巨勢山321号墳 主体部内出土土器観察表

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口部部 ○体部部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
1 須恵器 杯蓋 主体部	口径 14.0 cm (横存片からの回転複製) 器高 4.7 cm 口縁部は、わずかに内傾しつつ下り、端部近くでやや外反する。口縁端部は、内傾する段を成す。天井部と口縁部との境界の線は、凹線的な形態をとる。天井部は比較的低く平らに近い。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○——	直径3~4mmの石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の石英、長石を若干含む。	良好。	○灰青色。 ○黄灰色。 ○灰青色。	○口縁部外面に部分的に自然釉が付着している。
2 須恵器 杯蓋 主体部	口径 14.6 cm (横存片からの回転複製) 器高 4.5 cm 口縁部は、わずかに外反して下り、端部は直立した後に内傾する段を成す。天井部と口縁部との境界の線は、外方に突出しないにふい形態をとる。天井部は低く平らである。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○——	直径0.5~1mmの石英、チャートを含む。雲母を含む。	良好。	○黄灰色。 ○濃黄灰色。 ○黄紫灰色。	
3 須恵器 杯身 主体部	口径 11.8 cm 器高 4.7 cm たちあがりは短くやや内傾している。口縁端部は、内傾してにふい段をつくっている。受部は上外方へのびや丸くおさめている。底部は浅く平らにちかい。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○——	直径1~5mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、チャートを若干含む。雲母を含む。	良好。	○黄灰色。 ○黄灰色。 ○——	
4 須恵器 杯身 主体部	口径 12.9 cm (横存片からの回転複製) たちあがりは短くやや内傾している。口縁端部は、直立したのち内傾しにふい段をつくる。受部はやや丸味を帯びて水平にのび端部は丸い。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○——	直径3mmの石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の石英、長石、チャートを含む。雲母を含む。	良好。	○暗黄灰色。 ○淡黄灰色。 ○淡黄灰色。	体部外面に部分的に自然釉が付着している。
5 須恵器 杯身 主体部	口径 12.1 cm (横存片からの回転複製) たちあがりは短くやや内傾している。口縁端部は、内傾してにふい段をつくる。受部は上外方へのびや丸くおさめている。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○——	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。雲母を若干含む。	良好。	○灰青色。 ○灰青色。 ○灰青色。	

巨勢山322号墳 主体部2内出土土器観察表

遺物番号 出土場所	形態と調整 <ul style="list-style-type: none"> <li>○口部</li> <li>○体部</li> <li>○底部(脚部)</li> </ul>	胎土	焼成	色調・内面 ・外面	備考
1 須磨器 杯蓋 主体部 2	口径 14.2 cm 器高 5.0 cm <ul style="list-style-type: none"> <li>○口部はやや外彎突縁にのび、端部は内傾したのち段を成す。口縁部と天井部を分ける境界には凹縁をめぐらせている。体部はやや丸く、天井部はやや高い。</li> <li>○外面 ヨコナデ。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○外面 タテ方向あるいはナナメ方向のハケ後ヨコナデおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○——</li> </ul>	直径 8 mm の石炭をわずかに含む。直径 2 mm 以下の石英、チャートを含む。直径 1 mm 以下の長石を含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○明灰青色。</li> <li>○明灰青色。</li> <li>○明灰青色。</li> </ul>	体部外面に部分的にハケ状工具による成形痕が認められる。
2 須磨器 杯蓋 主体部 2	口径 15.5 cm 器高 5.4 cm <ul style="list-style-type: none"> <li>○口部はやや外彎突縁にのび、端部は内傾したのち段を成す。口縁部と天井部を分ける境界には凹縁をめぐらせるが、凹縁下段ははぶく不明瞭である。体部はわずかに丸味を帯びる。天井部はやや高い。</li> <li>○外面 ヨコナデ。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○外面 ヨコナデおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。</li> <li>○内面 ヨコナデ後中心部分に同心円文状のタタキ。</li> <li>○——</li> </ul>	直径 3~4 mm の石炭をわずかに含む。直径 2 mm 以下の石英、長石を多く含む。直径 0.5 mm 以下のチャートをわずかに含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○青灰色。</li> <li>○淡青灰色。</li> <li>○淡青灰色。</li> </ul>	体部内面に同心円文状のタタキが認められる。
3 須磨器 杯蓋 主体部 2	口径 14.6 cm 器高 5.0 cm <ul style="list-style-type: none"> <li>○口部はわずかに外彎しつつ垂直に下る。端部は内傾したのち段を成すが、段はあまり不明瞭である。口縁部と天井部を分ける境界には凹縁をめぐらせている。体部はやや丸く、天井部はやや高い。</li> <li>○外面 ヨコナデ。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○外面 ヨコナデおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○——</li> </ul>	直径 3~4 mm の石炭を若干含む。直径 2 mm 以下の石英、長石を多く含む。直径 0.5 mm 以下のチャートをわずかに含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○淡灰青色。</li> <li>○淡灰青色。</li> <li>○淡灰青色。</li> </ul>	
4 須磨器 杯蓋 主体部 2	口径 14.2 cm 器高 4.6 cm <ul style="list-style-type: none"> <li>○口部はわずかに内彎しつつ下方外方に垂直に下る。端部は内傾したのち段を成す。口縁部と天井部を分ける境界には凹縁をめぐらせるが、凹縁下段ははぶく不明瞭である。体部はやや丸い。</li> <li>○外面 ヨコナデ。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○外面 タテ方向のハケ後ヨコナデおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。</li> <li>○内面 ヨコナデ。</li> <li>○——</li> </ul>	直径 2 mm の石炭をわずかに含む。直径 1 mm 以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○青灰色。</li> <li>○淡青灰色。</li> <li>○青灰色。</li> </ul>	体部外面に部分的にハケ状工具による成形痕が認められる。 口縁部外面に部分的に自然物が付着している。
5 須磨器 杯蓋 主体部 2	口径 14.4 cm 器高 4.7 cm <ul style="list-style-type: none"> <li>○口部はわずかに内彎しつつ下方外方に下る。端部は内傾したのち段を成す。口縁部と天井部を分ける境界には凹縁をめぐらせるが、凹縁下</li> </ul>	直径 4 mm の石炭をわずかに含む。直径 1 mm 以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○青灰色。</li> <li>○淡青灰色。</li> <li>○淡青灰色。</li> </ul>	体部外面に部分的にハケ状工具による成形痕が認められる。 口縁部外面に

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口頸部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
	設はよく不明瞭である。体部はやや丸い。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 タナ方向のハケ後ヨコナデおよび天井部分はヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○				部分的に自然釉が付着している。
6 須惠器 杯身 主体部 2	口径 12.6 cm 器高 5.3 cm たちあがりは低く内傾し、端部近くでやや垂直気味になる。端部は丸味を帯びて内傾したのち非常に不明瞭な段がつく。受部は短くわずかに上外方にのび端部は丸い。体部は丸く底部も丸く仕上げている。体部に部分的に刺突状の痕跡が認められる。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径4~8mmの石英をわずかに含む。直径2mm以下の石英、長石を若干含む。直径0.5mm以下のチャートをわずかに含む。	良好。	○淡灰青色。 ○淡灰青色。 ○淡灰青色。	体部外面に「 V 」の刺突状の痕跡が部分的に認められる。
7 須惠器 杯身 主体部 2	口径 12.2 cm 器高 4.8 cm たちあがりは低く、やや外反気味に内傾する。端部は丸味を帯びて内傾したのち非常に不明瞭な段がつく。受部は短くわずかに上外方にのび端部は丸い。体部はやや丸い。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径4~5mmの石英、チャートをわずかに含む。直径2mm以下の石英、長石、チャートを含む。	良好。	○淡灰青色。 ○淡灰青色。 ○	
8 須惠器 杯身 主体部 2	口径 13.6 cm 器高 5.5 cm たちあがりは低く、やや外反気味に内傾する。端部は丸味を帯びて内傾したのち、ややあまい段がつく。受部はやや上外方にのび端部は丸い。体部はやや丸味を帯びる。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 タナ方向のハケ後ヨコナデおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径2~3mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートを含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡灰青色。 ○淡青灰色。	体部外面に部分的にハケ状工具による形成痕が認められる。
9 須惠器 杯身 主体部 2	口径 12.3 cm 器高 5.0 cm たちあがりは低く内傾する。端部は丸味を帯びて内傾したのち非常に不明瞭な段がつく。受部は短く丸い。体部はやや丸い。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 タナ方向のハケ後ヨコナデおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径2~3mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、チャート、長石を含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡灰青色。 ○淡青灰色。	体部外面に部分的にハケ状工具による形成痕が認められる。



遺物番号 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
10 須磨器 杯身 主体部 2	<p>口径 12.1cm 器高 4.8cm</p> <p>たちあがりは低く内傾する。端部は丸味を帯びて内傾したのちややまあい段がつく。受部は短く丸い。体部はやや丸い。</p> <p>・外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ・外面 ココナデおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ココナデ。 ・――</p>	直径3mmの石英をわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	<p>・淡青灰色。 ・青灰色。 ・――</p>	体部外面に部分的に自然胎が付着している。

巨勢山323号墳 石室内再利用面出土土器観察表

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口頸部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	装成	色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
1 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 8.8 cm (残存片からの回転復原) ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。 内面 ココナデ。 ○——	直径 0.5 mm 以下の石英、長石をわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○茶褐色。 ○茶黄褐色。 ○茶黄褐色。	
2 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 8.4 cm 器高 1.0 cm ○外面 ココナデ(左廻り)。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。 内面 不定方向ナデ。 ○——	直径 1 mm の石英をわずかに含む。直径 0.5 mm 以下の石英、長石をわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○赤褐色。 ○赤褐色。 ○——	
3 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 10.2 cm (残存片からの回転復原) ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。 内面 不定方向ナデ。 ○——	直径 0.5 mm 以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	良好。	○茶黄褐色。 ○茶黄褐色。 ○茶黄褐色。	
4 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 9.0 cm 器高 2.5 cm ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。指頭による押圧。 内面 ココナデ後不定方向ナデ。 ○——	直径 1 mm 以下の石英、チャートを若干含む。雲母を若干含む。	良好。	○茶赤褐色。 ○茶赤褐色。 ○茶赤褐色。	
5 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 11.6 cm 器高 2.7 cm ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。 内面 一定方向ナデ。 ○——	直径 2 mm の石英をわずかに含む。直径 0.5 mm 以下の石英、長石、チャートを若干含む。雲母を含む。	良好。	○淡黄褐色。 ○淡黄褐色。 ○淡黄褐色。	
6 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 9.4 cm (残存片からの回転復原) ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。指頭による押圧。 内面 ココナデ。 ○——	直径 0.5 mm 以下の石英、長石を含む。雲母を含む。	良好。	○茶褐色。 ○茶褐色。 ○茶褐色。	
7 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 10.5 cm (残存片からの回転復原) ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。 内面 ココナデ。 ○——	直径 0.5 mm 以下の石英、長石をわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○淡赤黄褐色。 ○淡赤黄褐色。 ○淡赤黄褐色。	
8 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 11.2 cm 器高 2.0 cm ○外面 ココナデ。 内面 ココナデ。 ○外面 未調整。 内面 不定方向ナデ。 ○——	直径 0.5 mm 以下の石英、長石を含む。直径 0.5 mm 以下のチャートを多く含む。雲母を若干含む。	良好。	○茶赤褐色。 ○赤褐色。 ○赤褐色。	
9 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 11.4 cm 器高 2.6 cm ○外面 ココナデ(左廻り)。	直径 1 mm の石英を若干含む。直径 0.5 mm 以下の石英	良好。	○茶褐色。 ○茶褐色。 ○赤茶褐色。	

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
	内面 ヨコナデ。 ○外面 未調整。指痕による押圧。 内面 不定方向ナデ。 ○	長石、チャートを含む。雲母を若干含む。		
10 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 11.6 cm 器高 2.8 cm ○外面 ヨコナデ(左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○外面 未調整。 内面 不定方向ナデ。 ○	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。 ○茶褐色。 ○明茶褐色。 ○明茶褐色。	
11 土師器 小皿 石室内再利用面	口径 14.8 cm (残存片からの回転複製) ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 未調整。 内面 不定方向ナデ。 ○	直径1mmの石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。雲母を含む。	良好。 ○黄茶褐色。 ○黄茶褐色。 ○黄茶褐色。	
12 土師器 羽釜 石室内再利用面	口径 22.6 cm (残存片からの回転複製) ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。指痕による押圧。部分的にヘケメが残存。	直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。 ○淡黄褐色。 ○淡黄褐色。 ○淡黄褐色。	底部にススが付着している。
13 瓦器 椀 石室内再利用面	口径 14.2 cm (残存片からの回転複製) 器高 5.1 cm 口縁部は、上外方にわずかに外彎してのびる。端部はわずかに内傾して段を成す。高台は低く断面が三角形を呈する。 ○外面 ヨコ方向のヘラミガキ(暗文)。口縁部は部分的にヨコナデで消している。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ(暗文)。口縁部はヨコナデで消している。 ○外面 不定方向へのヘラミガキ(暗文)を施すが底部付近はヨコナデで消している。 内面 ヨコ方向へのヘラミガキを密に施す。 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ後ラセン状のヘラミガキ(暗文)を施す。	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	良好。 ○淡灰青色。 ○淡黄褐色。 ○灰白色。	
15 須恵器 杯身 石室内再利用面	口径 9.8 cm (残存片からの回転複製) たちあがりは、内上方に短くのび、端部はやや丸い。受部はやや上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ。底部付近は未調整。 内面 ヨコナデ。 ○	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	良好。 ○濃黄灰色。 ○濃黄灰色。 ○濃黄灰色。	底部に粘土粒が付着している。
16 土師器 杯身 石室内再利用面	○ ○外面 指痕による押圧後ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)およびヨコナデ。ヨコナデ後ヨコ方向のヘラミガキ後放射状のヘラミガキ。部分的にヨコナデで消している。 ○	直径0.5mm以下の石英、長石をわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。 ○赤黄褐色。 ○赤黄褐色。 ○赤黄褐色。	

巨勢山323号墳 墳丘周辺および盛土内出土土器観察表

遺物番号 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	・外面 色・内面 ・断面	備考
1 円筒埴輪 323号墳 南方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、突出度がやや高い。 ・ ・外面 ココナデ。 内面 ナナメ方向のハケ後タテ方向のナデおよび指頭による磨り押圧。 ・	直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。2mm以下の石英、チャートを多く含む。雲母を含む。	良好。	・明褐色。 ・暗褐色。 ・明褐色。	黒斑なし。
2 円筒埴輪(口縁部) 323号墳 東方 表土直下層	口縁部は、端部近くで短くほぼ水平に屈曲したのち、上外方にのびて面を成す。 ・外面 ココナデ。 内面 6本/cmのヨコハケ後ココナデ。 ・ ・	直径2mm以下のチャート、石英を多く含む。直径1mm以下の長石を含む。	良好。	・明茶褐色。 ・明茶褐色。 ・明茶褐色。	黒斑なし。
3 円筒埴輪 323号墳 西方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、突出度は高い。 ・ ・外面 ココナデ。突帯粘り付け後ココハケ。 内面 ナナメ方向のハケ後指頭による押圧。 ・	直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。直径2mm以下の石英を含む。直径2mm以下のチャートを多く含む。雲母を含む。	良好。	・明茶褐色。 ・明茶褐色。 ・黄褐色。	黒斑なし。
4 朝鮮形埴輪 323号墳 北方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、丸味を帯びる。突出度は高い。タガより上方は、しばらくくだらかに内傾したのち角度を変えて、わずかに外反する。 ・ ・外面 ココナデ。 内面 指頭による押圧。割離著しい。 ・	直径2mm以下の石英、チャート、直径1mm以下の長石を含む。雲母を若干含む。	良好。	・黄褐色。 ・黄褐色。 ・黄褐色。	黒斑なし。
5 円筒埴輪 323号墳 西方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、突出度は高い。 ・ ・外面 10本/cmのヨコハケ。タガの部分はココナデ。 内面 10本/cmのナナメ方向のハケ後タテ方向のナデおよび指頭による押圧。 ・	直径5mm以下のチャートを多く含む。直径0.5mm以下の長石、直径2mm以下の石英を若干含む。雲母を含む。	良好。	・茶褐色。 ・茶褐色。 ・茶褐色。	黒斑なし。
6 円筒埴輪 323号墳 西方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや高い。 ・ ・外面 ココナデ。 内面 6本/cmのヨコハケ後タテ方向ナデ。 ・	直径1mm以下の石英、チャートを含む。0.5mm以下の長石、直径2mm以下の角閃石をわずかに含む。直径3mmのチャートを若干含む。	良好。	・明茶褐色。 ・明茶褐色。 ・淡赤褐色。	黒斑なし。
7 円筒埴輪 323号墳 西方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、丸味を帯びる。突出度はやや高い。 ・ ・外面 ココナデ。 内面 タテ方向のナデ。 ・	直径2mm以下の石英、チャートを多く含む。直径1mm以下の角閃石、0.5mm以下の長石をわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。	・淡赤褐色。 ・淡赤褐色。 ・淡赤褐色。	黒斑なし。

遺物番号 出土場所	形態と調整 <ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部</li> <li>○体部</li> <li>○底 部(脚部)</li> </ul>	胎 土	焼 成	外面 色 調・内面 ・断面	備 考
8 円筒埴輪 323号墳 南方 表土直下層	タガは、断面が台形を呈し、突出度は高い。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 タテ方向のナデ、および部分的にタテハケが残存。 ○	直径3mm以下のチャート、石英を多く含む。直径1mm以下の長石を含む。雲母を含む。	良好。	○暗褐色。 ○明褐色。 ○黄褐色。	黒斑なし。
9 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	突起径 30.0cm (残存片からの回転復原) タガは、断面が台形を呈し突出度はやや高い。 ○ ○外面 タガより上部および下部は8mmのココハケ(板ナデの状態にちかい)。タガ貼り付け後タガを指頭によって軽く押ししている。 内面 ココハケ後タテ方向のナデおよび指頭による押圧。 ○	直径1mm以下の石英、長石、チャートを含む。直径1mm以下の角閃石を若干含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○淡赤褐色。 ○淡赤褐色。 ○淡赤褐色。	黒斑なし。
10 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	突起径 23.3cm (残存片からの回転復原) タガは、断面が台形を呈し突出度はやや高い。 ○ ○外面 タテハケ。タガ貼り付け後タガを指頭によって軽く押ししている。 内面 タテハケ後タテ方向のナデおよび指頭による押圧。 ○	直径2mm以下のチャート、石英を多く含む。直径3mmのチャート、長石を若干含む。直径1mm以下の長石を含む。雲母を含む。	良好。	○暗褐色。 ○明褐色。 ○明褐色。	黒斑なし。
11 柳葉形埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が三角形を呈する。タガより上部の口縁部は大きく外反し、タガより下部は下外方に内彎している。 ○ ○外面 タガより上部は7本/cmのタテ方向のハケ。タガより下部は7本/cmのココハケ(右廻り)の後7本/cmのナメ方向のハケ。タガの部分はココナデ。 内面 タテ方向のナデおよび指頭による押圧の後ナメ方向のナデ。 ○	直径0.5mm以下の長石、直径2mm以下のチャートを含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○淡黄褐色。 ○淡黄褐色。 ○明茶褐色。	黒斑なし。
12 円筒埴輪(口縁部) 323号墳 墳丘盛土内	口縁部は端部近くで上外方にわずかに外反する。 ○外面 タテハケ後ココナデ。 内面 ココナデ。 ○ ○	直径1mm以下の石英、チャートを含む。直径1mm以下の長石を若干含む。雲母を若干含む。	良好。	○黄褐色。 ○黄褐色。 ○黄褐色。	黒斑なし。
13 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度はやや高い。 ○ ○外面 8本/cmのタテハケ。タガの部分はココナデおよび指頭による軽い押圧。 内面 タテ方向ナデおよび指頭による押圧。 ○	直径2mm以下のチャートを多く含む。直径2mm以下の石英、長石を含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○淡赤褐色。 ○淡赤褐色。 ○黄褐色。	黒斑なし。
14 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈するが不整形である。突出度は低い。 ○ ○外面 ココナデおよび部分的にタテハケ残存。 内面 タテ方向のナデ。 ○	直径0.5mm以下の長石を含む。直径1mm以下のチャートを含む。	良好。	○暗褐色。 ○暗褐色。 ○暗褐色。	黒斑なし。

遺物番号 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土	焼成	外面 色調・内面 ・断面	備考
15 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈する。 突出度はやや高い。 ・ ・外面 ヨコナデ。 内面 タテ方向のナデ。 ・	直径2mm以下の 石英、チャートを 多く含む。直径0. 5mm以下の長石を 含む。雲母を含む。	良好。	・暗茶褐色。 ・暗茶褐色。 ・暗茶褐色。	黒斑なし。
16 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度は高い。 ・ ・外面 ヨコナデ。 内面 タテ方向のナデおよび指痕による押 圧。 ・	直径2mm以下の チャート、石英を 多く含む。直径4 mmのチャートをわ ずかに含む。直径 0.5mm以下の長石 を若干含む。雲母 をわずかに含む。	良好。	・茶褐色。 ・茶褐色。 ・淡茶褐色。	黒斑なし。
17 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈する。 突出度はやや低い。 ・ ・外面 12本/cmのナメ方向のハケ後ヨコ ナデ。 内面 ナメ方向のハケ後ヨコナデ。 ・	直径2mm以下の チャート、直径3 mm以下の石英を若 干含む。	良好。	・黄褐色。 ・黄褐色。 ・黄褐色。	黒斑なし。
18 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや低 い。 ・ ・外面 ヨコナデ。 内面 タテ方向のナデ。 ・	直径2mm以下の チャートを含む。 直径2mm以下の石 英を若干含む。直 径5mmのチャート をわずかに含む。 直径0.5mm以下の 長石を含む。	良好。	・茶褐色。 ・茶褐色。 ・淡茶褐色。	黒斑なし。
19 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突 出度はやや低い。 ・ ・外面 ヨコナデ。 内面 不定方向のナデ。 ・	直径2mm以下の チャート、石英を 多く含む。直径4 mmのチャートをわ ずかに含む。直径 1mm以下の長石を 含む。	良好。	・暗黄褐色。 ・暗黄褐色。 ・暗黄褐色。	黒斑なし。
20 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや低 い。 ・ ・外面 ナメ方向のハケおよびヨコナデ。 内面 タテ方向ナデおよび指痕による押圧。 ・	直径2mm以下の チャートを多く含 む。直径1mm以下 の長石を多く含む。 直径1mm以下の石 英を含む。	良好。	・暗褐色。 ・暗褐色。 ・暗褐色。	黒斑なし。
21 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや高 い。 ・ ・外面 8本/cmのタテハケおよびヨコナデ。 内面 8本/cmのヨコハケ後タテ方向のナ デ。 ・	直径3mm以下の 石英を含む。直径 2mm以下のチャ ートを若干含む。直 径0.5mm以下の長 石をわずかに含む。	良好。	・暗褐色。 ・暗褐色。 ・暗褐色。	黒斑なし。
22 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度は高い。 ・ ・外面 ヨコナデおよび8本/cmのタテハケ。 内面 タテ方向ナデ。 ・	直径2mm以下の チャート、石英を 多く含む。直径4 mmのチャート、角 閃石をわずかに含 む。直径0.5mm以 下の長石を含む。	良好。	・黄褐色。 ・黄褐色。 ・黄褐色。	黒斑なし。

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口頸部 ○体部 ○底部(脚部)	給土	焼成	色調・内面 ○外面 ○断面	備考
23 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度はやや低い。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデおよびタテ方向のナデ。 ○	直径2mm以下のチャートを多く含む。直径1mm以下の石英、長石を含む。直径4mmの石英をわずかに含む。雷母をわずかに含む。	良好。	○暗黄褐色。 ○暗黄褐色。 ○暗黄褐色。	黒疵なし。
24 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度はやや高い。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 ナメ方向のハケ後ナメ方向のナデ。 ○	直径2mm以下のチャートを多く含む。直径5mmの石英をわずかに含む。直径2mm以下の石英、長石を含む。	良好。	○淡褐色。 ○淡褐色。 ○淡黄褐色。	黒疵なし。
25 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度はやや低い。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 ナメ方向のハケ後タテ方向のナデおよび指環による押圧。 ○	直径2mm以下のチャートを多く含む。直径1mm以下の石英を含む。直径4mmの石英を含む。直径0.5mm以下の長石を含む。	良好。	○淡褐色。 ○淡褐色。 ○淡褐色。	黒疵なし。
26 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度はやや低い。 ○ ○外面 10本/cmのヨコハケ後17本/cmのナメハケおよびヨコナデ。 内面 ヨコハケおよび指環による押圧。 ○	直径2mm以下のチャート、石英、長石を含む。直径3mmの石英をわずかに含む。	良好。	○赤褐色。 ○淡褐色。 ○淡褐色。	黒疵なし。
27 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや高い。 ○ ○外面 ヨコナデおよび部分的にタテハケが残存。 内面 タテ方向ナデおよび指環による押圧。 ○	直径2mm以下のチャートを多く含む。直径1mm以下の石英を含む。直径7mmの石英をわずかに含む。直径1mm以下の長石を含む。	良好。	○暗褐色。 ○淡褐色。 ○暗黄褐色。	黒疵なし。
28 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや高い。 ○ ○外面 ヨコハケおよびヨコナデ。 内面 タテ方向のナデ。 ○	直径1mm以下のチャートを多く含む。直径1mm以下の石英を含む。直径3mmの石英を若干含む。雷母を多く含む。	良好。	○淡褐色。 ○淡褐色。 ○淡黄褐色。	黒疵なし。
29 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	タガは、断面が台形を呈し、突出度はやや高い。 ○ ○外面 ヨコナデおよび部分的にタテハケが残存。 内面 タテ方向のナデおよび指環による押圧。部分的にタテハケが残存する。 ○	直径4mmのチャートをわずかに含む。直径2mm以下のチャートを含む。直径2mm以下の石英、直径0.5mm以下の長石を含む。雷母をわずかに含む。	良好。	○淡褐色。 ○淡褐色。 ○淡黄褐色。	黒疵なし。

遺物番号 出土場所	形態と調整 <ul style="list-style-type: none"> <li>○口頸部</li> <li>○体部</li> <li>○底部(脚部)</li> </ul>	胎土	焼成	色調 <ul style="list-style-type: none"> <li>○外正面</li> <li>○内面</li> <li>○断面</li> </ul>	備考
30 円筒埴輪 323号墳 墳丘盛土内	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul> タガは、断面が丸味を帯びた合形を呈し、突出度は低い。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○外面 11本/cmのヨコハケおよびヨコナデ</li> <li>○内面 ヨコハケ後タテ方向およびナナメ方向のナデおよび指線による押圧</li> <li>○</li> </ul>	直径2mm以下の長石を含む。直径2mm以下の石英をわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○赤褐色。</li> <li>○赤褐色。</li> <li>○灰赤褐色。</li> </ul>	黒煙なし。
31 須恵器 甕もしくは壺 323号墳 墳丘盛土内	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul> 外面 平行タタキ。 内面 ヨコナデ(スリケシ)。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> </ul>	直径1mm以下の石英、長石、チャートを含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○黄青灰色。</li> <li>○黄青灰色。</li> <li>○青紫色。</li> </ul>	
32 須恵器 甕もしくは壺 323号墳 墳丘盛土内	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul> 外面 平行タタキ。 内面 ヨコナデ(スリケシ)。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> </ul>	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○黄青灰色。</li> <li>○黄青灰色。</li> <li>○青紫色。</li> </ul>	
33 須恵器 甕 323号墳 墳丘盛土内	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul> 外面 2本の凹線の上・下部に波状文(13本/cm)を施す。 内面 ヨコナデ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> </ul>	直径1mm以下の石英、長石、チャートを含む。雲母を含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○黄青灰色。</li> <li>○灰青灰色。</li> <li>○青紫色。</li> </ul>	
34 須恵器 甕 323号墳 墳丘盛土内	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul> 外面 平行タタキ。 内面 同心円文状のタタキ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> </ul>	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○灰青紫色。</li> <li>○灰青灰色。</li> <li>○灰青紫色。</li> </ul>	
35 須恵器 甕台 323号墳 墳丘盛土内	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul> 外面 2本の凹線の下部に波状文を施す。 内面 同心円文状のタタキ、一部スリケシ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> </ul>	直径0.5mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○黄青灰色。</li> <li>○黄青灰色。</li> <li>○青紫色。</li> </ul>	



巨勢山323号墳 石室内出土その他の土器観察表

遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ○口縁部 ○体部 ○底 部(細線)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
1 内周縁輪 323号墳 石室内 第29図第23層内	タガは、断面が台形を呈し、突出度は低い。 ○ ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 タチ方向のナデ。 ○	直径2mm以下のチャート、石英を多く含む。 直径0.5mm以下の長石を若干含む。	良好。	○淡褐色。 ○赤褐色。 ○淡黄褐色。	黒変なし。
2 内周縁輪 323号墳 石室内 第29図第21層内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度はやや低い。 ○ ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 タチ方向のナデ。 ○	直径2mm以下のチャートを多く含む。直径1mm以下の石英、直径0.5mm以下の長石を若干含む。	良好。	○淡赤褐色。 ○淡赤褐色。 ○淡赤褐色。	黒変なし。
3 内周縁輪 323号墳 石室内 第29図第24層内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度は低い。 ○ ○ ○外面 8本/cmのタチハケ後ヨコハケおよびヨコナデ。 内面 10本/cmのタチハケ後タチ方向のナデおよび指眼による押圧。 ○	直径3mmのチャートをわずかに含む。直径1mm以下の長石を含む。直径1mmの石英をわずかに含む。	良好。	○淡褐色。 ○明褐色。 ○明褐色。	黒変なし。
4 内周縁輪 323号墳 石室内 第29図第9層内	タガは、断面が丸味を帯びた台形を呈し、突出度は低い。 ○ ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 タチ方向のナデ。 ○	直径0.5mm以下の長石を若干含む。直径1mm以下のチャートを含む。罫目をわずかに含む。直径1mm以下の石英をわずかに含む。	良好。	○淡黄褐色。 ○淡褐色。 ○淡黄褐色。	黒変なし。
5 須恵器 盃(口縁部) 323号墳 石室内 第29図第24層内	口縁端部の処理は、ややシャープである。 ○ ○外面 ヨコナデの後2本の浅い凹線。わずかに起伏文の一部が残存。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径0.5mm以下の石英、長石をわずかに含む。	良好。	○黄青灰色。 ○青灰色。 ○青黄色。	
6 須恵器 椀(口縁部) 323号墳 石室内 第29図第24層内	○ ○外面 ヨコナデの後、強いヨコナデにより断面三角形の突帯を引き出す。その上部・下部に起伏文(8本/cm)を施す。 内面 ヨコナデ。 ○	直径0.5mm以下の石英、長石をわずかに含む。	良好。	○黄青灰色。 ○黄青灰色。 ○青黄色。	
7 瓦器 輪 323号墳 石室内 第29図第24層内	口縁部はわずかに上外方にのび、端部は丸く、内径で浅い段を成す。体部は丸味を帯び、高い高台をもつ。高台の端部は丸くおさめている。 ○外面 口縁部はヘラミガキ後ヨコナデで滑している。その指は、不定方向のヘラミガキ(増文)を中や粗織に施す。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ(増文)を密に施す。 ○外面 不定方向のヘラミガキ(増文)を施すが、底部付近はヨコナデで滑している。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ(増文)を密に施す。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ後、格子状のヘラミガキ(増文)を施す。	直径0.5mm以下の石英、長石をわずかに含む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○灰青色。	

巨勢山324号墳 周溝内出土土器観察表

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口縁部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面	備考
1 須恵器 杯蓋 墳丘背後周溝内	口径 12.2 cm 器高 4.2 cm 口縁部はほぼ垂直に下り端部近くでやや外反する。端部はやや内傾して段を成す。口縁部と天井部を分ける境目は鋭い稜線である。体部は丸味を帯び、天井部はやや平坦である。 ○外面 内面 コナテ。 ○外面 コナテおよび天井部はヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 コナテ。 ○	直径2~3mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○	口縁部および体部の内面はほぼ全体と外面の半分に鉄錆が付着している。 口縁部および体部外面に部分的に自然錆が付着している。
2 須恵器 杯身 墳丘背後周溝内	口径 10.5 cm 器高 4.7 cm たちあがりはほぼ垂直立とのび、端部はわずかに内傾して段を成す。受部は上外方にのび、端部はやや鋭い。体部はやや丸味を帯び、底部はやや平坦である。 ○外面 コナテ。 内面 コナテ。 ○外面 コナテおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 コナテ。 ○	直径2~3mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	○濃青灰色。 ○濃青灰色。 ○	体部内外面に部分的に鉄錆が付着している。
3 須恵器 杯身 墳丘背後周溝内	口径 11.1 cm 器高 4.8 cm たちあがりはやや内傾してのび、端部はやや内傾して段を成す。受部は上外方にのび、端部はわずかに丸味を帯びる。体部はわずかに丸味を帯び、底部はやや平坦である。 ○外面 コナテ。 内面 コナテ。 ○外面 コナテおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 コナテ。 ○	長径4~6mmの石英をわずかに含む。直径2mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡青灰色。 ○	底部に「ノ」のヘラ記号あり。底部内面に墨の痕跡が認められるが、器壁が生乾きの状態であったものとみられる。
4 須恵器 杯身 墳丘背後周溝内	口径 9.9 cm 器高 4.8 cm たちあがりはやや内傾してのび、口縁近くでやや外反する。端部はやや内傾して段を成す。受部は短くほぼ水平にのび、端部はやや鋭い。体部は丸味を帯びる。 ○外面 コナテ。 内面 コナテ。 ○外面 コナテおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 コナテ。 ○	直径3mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	○濃青灰色。 ○濃青灰色。 ○	
5 須恵器 杯身 墳丘背後周溝内	口径 10.6 cm 器高 5.1 cm たちあがりはわずかに内傾しつつほぼ垂直立とのび、端部はやや内傾して段を成す。受部は短くほぼ水平にのび、端部はやや鋭い。底部は丸味を帯びる。 ○外面 コナテ。 内面 コナテ。 ○外面 コナテおよび底部はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 コナテ。 ○	直径4mmの石英、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートを若干含む。	良好。	○濃青灰色。 ○青灰色。 ○	

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口頸部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
6 土師器 短頸壺 埴丘背後西溝内	<p>口径 9.4 cm 器高 10.9 cm</p> <p>口頸部は外反して上外方にのび、口縁端部でわずかに内傾する。頸部は丸くおさめられている。胴部はゆるやかに張り出し、体部、底部ともに丸い。体部および底部の外壁は割罫が著しく、内面は指痕によって凹凸が非常に多い。</p> <p>○外面 ヨコナテ。 内面 ヨコナテ。</p> <p>○外面 下方から上方に向かうタテ方向の7本/cmのハケメ(左廻り)。 内面 上方から下方に向かう指痕による押圧。</p> <p>○外面 体部と同様。部分的にヨコおよびナメ方向のハケメ。 内面 体部と同様。</p>	<p>直径2mmの石英をわずかに含む。 直径1mm以下の石英を多く含む。直径0.5mm以下の長石、チャートを多く含む。</p>	ややあまい	<p>○茶黄褐色。 ○茶黄褐色。 ○暗茶黄褐色。</p>	<p>底部外面に部分的に黒点が認められる。</p>
7 土師器 長頸壺 埴丘背後西溝内	<p>口径 9.0 cm 器高 15.1 cm</p> <p>口頸部は外反しつつ上外方にのび、口縁端部でわずかに角度を度えて外反したのちわずかに内傾する。胴部はゆるやかに下り、最大径は体部中位より下方に位置する。底部は丸い。</p> <p>○外面 口縁端部はヨコナテ、それ以外は下方から上方に向かうタテ方向の12本/cmのハケメ(左廻り)。 内面 ヨコナテ。</p> <p>○外面 下方から上方に向かうタテ方向の12本/cmと9本/cmのハケメ(左廻り)。 部分的にヨコ方向のハケメ。 内面 ヨコナテ。</p> <p>○外面 下方から上方に向かうタテ方向の7本/cmのハケメ(左廻り)。中心部分には3〜5本/cmのハケメもある。 内面 ヨコナテ。</p>	<p>直径2mmの石英をわずかに含む。 直径1mm以下の石英、長石を多く含む。直径0.5mm以下のチャートを若干含む。</p>	やや良好。	<p>○明黄赤褐色。 ○明黄赤褐色。</p>	

巨勢山243号墳 下部土壌内出土土器観察表

遺物番号 出土場所	形態と調査 ○口部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	外壁色 内面 断面	備考
1 須恵器 杯蓋	口径 13.3 cm (残存1/4からの回転復原) 器高 5.0 cm 口縁部はやや内傾しつつほぼ垂直に下り、端部付近でわずかに外反する。端部はやや丸味を帯びて内傾し、あまい段をつくる。天井部と口縁部の境界は、やや外方へ突出した稜線をなっている。天井部はやや丸い。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび天井部1/4ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径2 cmの石英、チャートをわずかに含む。直径0.5 mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡青灰色。 ○濃青灰色。	天井部に粘土の付着が認められるが、焼成時の変色焼きが起因するとみられる。 口縁部に部分的に自然釉の付着が認められる。
2 須恵器 杯身	受部径 12.7 cm (残存1/4からの回転復原) 受部は短く上外方にのび、端部は丸い、体部はやや丸味を帯びる。 ○ ○外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径2 cmの石英、チャートをわずかに含む。直径1 mm以下の石英、チャートを若干含む。直径0.5 mm以下の長石を若干含む。雲母を若干含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡青灰色。 ○淡青灰色。	体部外面に指痕が認められる。
3 須恵器 杯身	口径 11.8 cm (残存1/4からの回転復原) たちあがりはやや内傾してのび、端部はやや丸味を帯びて内傾し、あまい段をつくるものとなっている。受部は上外方にのび、端部は丸い。内面の口縁部と体部を画する部分に浅い凹線を有する。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ。残存部分が少ないため、ヘラケズリについては確認できない。 内面 ヨコナデ。 ○	直径3 cmの石英をわずかに含む。直径1 mm以下の石英を若干含む。直径0.5 mm以下の長石、チャートをわずかに含む。雲母を若干含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡青灰色。 ○淡青灰色。	
4 須恵器 杯身	口径 12.8 cm (残存1/4からの回転復原) たちあがりはやや内傾したのち、ほぼ直立してのびる。端部は丸味を帯びて内傾し、あまい段をつくる。受部は上外方にのび、端部は丸い。体部はやや丸味を帯びて、底部は平らである。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび底部1/4ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径1 mm以下の石英、チャートをわずかに含む。直径0.5 mm以下の長石を若干含む。雲母を若干含む。	良好。	○淡青灰色。 ○青灰色。 ○青灰色。	
5 須恵器 杯身	口径 15.2 cm (残存1/4からの回転復原) たちあがりはやや内傾したのち、口縁部近くでわずかに外反する。端部は丸味を帯びて内傾し、あまい段をつくる。受部は上外方にのび、端部は丸い。体部はやや丸味を帯び、底部は平らである。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデおよび底部1/4ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○	直径1 mm以下の石英をわずかに含む。直径0.5 mm以下の長石、チャートをわずかに含む。雲母をわずかに含む。	良好。	○淡青灰色。 ○淡青灰色。 ○淡青灰色。	

遺物番号 出土場所	形態と調整 ○口縁部 ○体部 ○底部(脚部)	胎土	焼成	色調 ○外面 ○内面 ○断面	備考
6 須恵器 杯身	受部径 18.4cm (残存1/4からの回転復原) 受部は上外方にのび、端部は丸い。体部は、 やや丸味を帯びる。 ○ ○外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ 回転方向と廻り)。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径2~3mmの 石英をわずかに含 む。直径0.5mm以 下の石英、長石、 チャートをわずかに 含む。	良好。	○淡青灰色。 ○青灰色。 ○淡青灰色。	
7 須恵器 脚	口径 11.0cm (残存1/4からの回転復原) 口縁部は外反して上外方にのび、上部で外方 へ屈曲させ再び上外方へのびる。趾曲点外面に 凹溝をめぐらせている。端部はわずかに内傾し て浅くあまい段を成す。 ○外面 口縁部は、ヨコナデ後1条(5本) の波状文。脚部はヨコナデ後1条 (32本)の波状文。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径2mmの石英 をわずかに含む。 直径1mm以下の石 英、チャートを若 干含む。	良好。	○淡青灰色。 ○青灰色。 ○青灰色。	口縁部外面に 部分的に自然釉の 付着が認められ る。
8 須恵器 高杯	脚部径 15.9cm (残存1/4からの回転復原) 脚部は、外傾して下方に下り、趾部近くで段 を成し、再び外傾気味に屈曲する。 ○ ○ ○外面 ヨコナデおよび10本/cmのカキメ調 整。 内面 ヨコナデ。	直径1mm以下の 石英、長石、チャ ートをわずかに含 む。	良好。	○淡青灰色。 ○青灰色。 ○青灰色。	脚部外面に自 然釉の付着が認 められる。
9 須恵器 杯重(口縁部)	口縁部と天井部との境界は、やや外方へ突出 した段縁を成す。口縁部部は丸味を帯びて内傾 したのちあまい段を成す。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径0.5mm以下 の石英、長石、チャ ートをわずかに含 む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○淡青灰色。	
10 須恵器 杯重(口縁部)	口縁部と天井部との境界は、浅い凹縁となっ ている。口縁部部は、丸味を帯びて内傾したの ち非常にあまい段を成す。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径0.5mm以下 の石英、長石、チャ ートをわずかに含 む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○淡青灰色。	
11 須恵器 杯重(体部)	口縁部と天井部との境界は、やや浅い凹縁と なっている。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径0.5mm以下 の石英、長石、チャ ートをわずかに含 む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○青灰色。	
12 須恵器 杯重(体部)	口縁部と天井部との境界は、やや浅い凹縁と なっている。 ○ ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径2mm以下の 石英をわずかに含 む。直径0.5mm以 下の長石、チャ ートをわずかに含む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○青灰色。	
13 須恵器 杯重(口縁部 および体部)	口縁部と天井部との境界は、浅い凹縁となっ ている。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ○ ○	直径1mm以下の 石英をわずかに含 む。直径0.5mm以 下の長石、チャ ートをわずかに含む。	良好。	○青灰色。 ○青灰色。 ○青灰色。	

## 第4章 まとめ

### 第1節 調査古墳の概要

#### 1. 巨勢山321号墳

本墳は第1次調査地最高所の323号墳より北東にのびる支尾根先端部に立地する。長径8.0m、短径7.3mを測る円墳である。墳丘背後には周溝があり、焼土、炭化物と共に無蓋杯2点、釵3点の須恵器等が、この場で割られた状態で出土した。これらはいずれもTK85型式に比定できる。<sup>(1)</sup>

主体部は墳丘のほぼ中央に設けられた箱形木棺直葬で尾根中軸に平行して長軸がある。墓室内上部の肩付近からはMT15型式の須恵器杯蓋2点、杯身3点が出土した。<sup>(2)</sup>

主体部の東側には、これに先行する土壌があり、埋土は焼土を含むため、全体に赤みを帯びている。この焼土については先述した墳丘背後周溝内の火を用いた祭祀によって生じたものを、ここに埋めたものと理解している。

周溝内出土遺物と主体部出土遺物とは、型式差が認められるが、土壌を介して先後関係が明確であるため、これをそのまま時期差と認めてよいものと思われる。

築造時期については、主体部の構築をもって古墳が完成するとの立場から、その出土須恵器の年代観より6世紀前葉と考えておきたい。

#### 2. 巨勢山322号墳

本墳は323号墳より西にのびる支尾根先端部に立地する、長辺8.0m、短辺7.5mを測る方墳である。墳丘背後には周溝が掘削されている。

主体部は2基あり、いずれも尾根中軸に直交して設けられた箱形木棺直葬墓である。先行する主体部1は墳丘のほぼ中央にあり、排水溝を有している。この排水溝の中から土製丸玉18個以上が出土した。後出の主体部2は、墳丘のやや西寄りにあり、墓室は墳丘盛土を掘削して設けられている。棺内小口部分からは須恵器杯蓋5点、同杯身5点がかたまって出土したが、出土状態より認識できるセット関係と、法量の比較により認識できるセット関係とは矛盾を来している。木棺の底面に接した状態で出土しながら、横倒しになったものや、うつ伏せになったものも多いため、その内に内容物があつたものとは考え難く、少なくともセットを意識して埋納されたものではない。したがって、当初はセットとして運び込まれた各杯身、杯蓋が祭祀等に使用された後、埋納されるに際しては任意にあつめられたと考えられる。いずれもTK10型式の幅の中でとらえ得るもので、一部にハケ状工具による痕跡を残すものがある。

主体部2の構築期はその出土須恵器の年代観から6世紀の前葉に近い中葉と考えられるが、主体部1についてはそれに先行することが判るだけで明確にはし難い。しかしながら継続的に主体部1と主体部2は構築されたであろうとの常識的な判断から、6世紀前葉段階のものと考えておきたい。

### 3. 巨勢山 323 号 墳

本墳は第1次調査地最高所に占地する、長辺14.8m、短辺11.2mを測る方墳である。

内部主体は横式石槨で、地山を方形に削り出して墳丘基底を形成した後、墓壙を掘削する。石室の埋設にあたっては、天井石上面まで版築工法によって土を積み上げ、次いで通常の盛土をして墳丘を形成している。

本墳の横式石槨は、低く幅の狭い石槨部と、やや高く幅の広い羨道部に分かれる型式で、石槨部においては石室内外から目地に漆喰を充填している。羨道部には天井石が2石構築されていた。

遺物は盗掘によりほとんど失なわれていたが、中世再利用面から飛鳥Ⅱ期の須恵器杯Hと土師器杯Cが出土しており、本墳の築造期を示すものと思われる。7世紀中葉の築造である。

なお、墳丘盛土中からは若干の鉄製品、TK23型式の須恵器、川西編年Ⅳ期の円筒埴輪等が出土しており、本墳が先行して存在した古墳を破壊して築造されたことを示している。この古墳（以下、巨勢山323号先行墳と呼称）については、出土遺物から5世紀後葉に築造されたものと考えられるが、当該地の墳丘上からの景観が極めて優れていること（図版4・5）、周辺に先行する古墳はないと思われることから、後述するように、今回の調査地の各古墳を含む支群の形成の端緒になった記念碑的な古墳ではなかったかと思われる。

### 4. 巨勢山 324 号 墳

本墳は323号墳より北にのびる支尾根鞍部に立地する、長径7.0m、短径6.0mを測る円墳である。墳丘背後には周溝があり、その中からTK23型式に比定できる須恵器杯蓋1点、同杯身4点と土師器長頸壺1点、同短頸壺1点、鉄製品としてコ字形金具、刀子、鉄鎌などが出土した。

主体部は流出しており、既に存在しなかったが、木棺直葬墳かと思われる。周溝内に副葬品として通常の鉄鎌、刀子といった鉄製品を収めていることから、主体部にはほとんど副葬品を入れていなかったものと思われる。築造期は出土遺物から5世紀後葉と考える。

### 5. 巨勢山 243 号 墳

本墳は、巨勢山山塊から南西に伸びる一支尾根が、南西及び南方向に分かれる分岐点に立地する、一辺17m前後の方墳である。

墳丘中央には尾根中軸に平行して木棺直葬墓である主体部1があり、やや西側に同様に主体部2がある。主体部1は舟形木棺を直葬したものと思われるが、遺物は全く認められなかった。主体部1の下には、それよりやや大きな土壙（以下、下部土壙）があり、中から破片となった須恵器と鉄製品が出土した。かなり離れた位置にある複数の破片を接合等によって同一個体と認定できたものが少なからずあることから、墳丘上で行なわれた墓前祭祀によって破片となったものが、この下部土壙を埋めるに際して土砂といっしょに流入したものと考えられる。なお、主体部1は盗掘

の影響を受け、その中央部が攪乱されているが、盗掘墳の下面は、下部土壌の上面で留まっていることを、調査参加者全員が確認している。また主体部1に遺物が存在しなかったことについては、盗掘の影響は無視できないものの、下部土壌に先行して行なわれたとみられる祭祀により、葬送儀礼の全てが終了したとするならば、あるいは主体部1には、当初より全く遺物が入っていなかった可能性がある。

出土の須恵器はMT15型式に比定でき、本墳の築造は6世紀前葉に行なわれたと考えられる。また主体部2からも遺物の出土はなく、時期決定の根拠を欠くが、その位置が中央ではないこと、主体部1の底面よりその底面のレベルが高いことから、後出するものであることは判る。

## 第2節 巨勢山古墳群と第1次調査地の古墳

第1次調査地における各古墳の築造順序と築造期を改めて述べると、323号先行墳・324号墳（TK23型式期：5世紀後葉）→322号墳主体部1・321号墳（MT15型式期：6世紀前葉）→322号墳主体部2（TK10型式期：6世紀中葉）→323号墳（飛鳥Ⅱ型式期：7世紀中葉）となる。

同一支尾根上には315号墳～326号墳（320号墳は欠番）の合計11基の古墳があり、これをもって一支群を構成すると考えられる（P.4 第2図参照）。

そのうち、尾根先端部に占地する326号墳は崖斜面に石組が認められ、横穴式石室を内部主体とすることを確実視できるほか、318号墳も横穴式石室であろうとされている。おそらくは両墳とも322号墳主体部2よりも後出するものと考えられ、この支群における横穴式石室の導入はTK10型式期以降に行なわれたとみなして大過ないであろう。

巨勢山古墳群における横穴式石室の導入は、71号墳<sup>(6)</sup>、431（境谷8）号墳<sup>(7)</sup>、432（境谷9）号墳<sup>(8)</sup>では既にMT15型式期に行なわれているが、この支群においては、併行期築造の321号墳、322号墳は木棺直葬墳で、それらに明らかに遅れをとっている。

同一古墳群内にありながら、このような差違は何に基いて生じるのであろうか。ここで考慮しなければならないのは、調査地内における木棺直葬墳の副葬品の出土位置が、主体部外から主体部内へという典型的な変遷過程をたどっていることである。

すなわち、324号墳では墳丘背後周溝内に全ての副葬品を収めたと考えられ、続く321号墳では墳丘背後周溝内での祭祀の後、墓室内上面に須恵器を副葬している。そして322号墳主体部2では副葬品はついに棺内へと入る事実がある。

副葬品出土位置のこのような変遷は、初現期の横穴式石室のもつ葬送儀礼に触発された結果と考えられており<sup>(9)</sup>、この支群においても、そのことを認めなければならないであろう。

葬送儀礼の変化はすなわち葬送に関する思想の変化であり、この場合、既に変化した思想を持った当時の人々にとって、最も理想的な内部主体は横穴式石室であることは言うまでもない。それではなぜ横穴式石室を採用しなかったのであろうか。



いま、巨勢山古墳群における導入期の横穴式石室墳である、71号墳、431（境谷8）号墳、432（境谷9）号墳と、併行期あるいは後出する木棺直葬墳である、321号墳、322号墳との副葬品内容を比較してみると、顕著な差違に気付く。

71号墳では須恵器の他、馬具、ガラス粟玉、銀製指輪が、431（境谷8）号墳では須恵器の他、鉄鍔、馬具が、432（境谷9）号墳では須恵器と『若干の鉄製品』が出土しており、これら導入期の横穴式石室墳については、馬具、鉄鍔の存在から、筆者の言う、群集墳中のAグループに属するとみなして大過ないであろう。

それに対して、それらに併行すると目される木棺直葬墳である、321号墳、322号墳では須恵器の他、土製丸玉程度の遺物しか認められず、副葬品内容のみから言えばCグループに属している。

当時においては、軍事的編成を軸として階層構造が成立しており、その具現したものが群集墳中におけるA、B、Cグループの弁別であると理解している。この立場に立てば、巨勢山古墳群における横穴式石室の導入期において、横穴式石室採用の可否はやはり階層の差にかかっていると理解せざるを得ない。

改めて述べるまでもなく、巨勢山古墳群は室・宮山古墳の築造を契機として発展してきた古墳群であり、横穴式石室導入以前にも多くの古墳が営まれてきた。対して、先述のように、71号墳からは銀製指輪が、また木棺直葬墳である42（ミノヤマ2）号墳からは步揺付飾金具が出土しており、朝鮮半島との関わりが強調されるが、巨勢山古墳群における導入期の横穴式石室は既に初期横穴式石室とは言い難い、日本化されつつある段階のものであると共に、その副葬品内容が既にAグループに属することからみて、これら横穴式石室が新来の渡来人により築造されたことには賛成できない。42（ミノヤマ2）号墳の評価は正式報告書の刊行を俟つことにして、導入期の横穴式石室については、その採用は巨勢山古墳群中の上位階層者のみが行ない得たものと考えておきたい。

さて、第1次調査地を含むこの支群では、TK10型式以降に横穴式石室を採用すると考えた。その副葬品内容を明らかにし難い現在、断定はしかねるが、既に321号墳、322号墳について述べてきた通り、特に有力な古墳を蔵する支群とは思われない。

ところが、横穴式石室を内部主体とする323号墳は、この支群のまさに中心に築かれるのである。ここで注意すべきは、323号墳が先行する古墳、おそらくはこの支群形成の端緒となったと思われる古墳を破壊して築造されている点で、このようなことは極めて稀有の事例に属することと思われる。このことから、323号墳は脈々と営まれてきたこの支群の系譜を直接にはひかないものと考えておきたい。

他にはほとんど古墳が築かれなくなった時期、支群を構成することによって何らかの形で成立していたと思われる従前の秩序に何ら関わることなく築造される323号墳は、やはり秩序さらに言えば社会体制の大きな転換期の後に築造された、巨勢山古墳群中の最有力の古墳であると言わねばならない。

### 第3節 巨勢山323号墳石室の築造企画

本墳の内部主体である横口式石槨の主要な計測値を改めて述べると、石室全長5.36m、石槨部長2.10m、石槨部幅0.90m、石槨部高0.80~0.81m、羨道部長3.26m、羨道部幅1.45~1.55m、羨道部高は現存部分で1.17~1.27mとなる。

調査中より、唐尺として一般に認識されている、0.30mで割り切れる数値の多いことに注意していたが、第51図により0.30mの方眼を実測図に重ねてみて、そのことはさらに明瞭になった。以下0.30mを仮に1単位と呼び記述を進めたい。なお第51図において、方眼軸線の1本を石槨部天井石に添わせた状態で方眼を設定したのは、記述上の便宜を図ったのであることを申し添えておく。

まず石槨部は、長さ7単位、幅3単位であることは疑い得ないが、高さについては2.7単位と2 $\frac{1}{2}$ 単位の両様と考えられる。しかしながら以下の理由によりここでは後者の立場をとっておきたい。

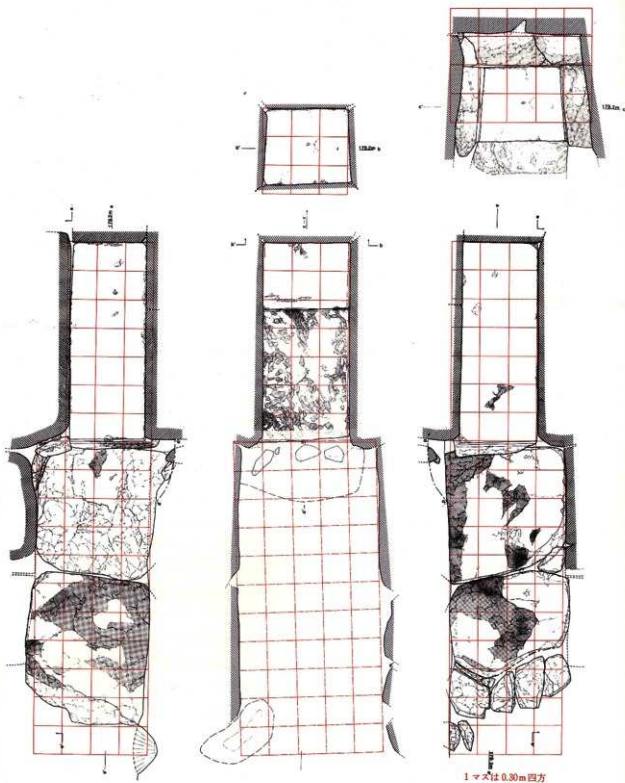
まず第1に石槨部床面が2個の長方形の石材により構成されており、奥の1石が石槨部長の $\frac{1}{2}$ に相当する0.7m、手前の1石が石槨部長の $\frac{1}{3}$ に相当する1.4mの数値を示すことに注目したい。ほぼ正確に成形された長方形の石材に、このように全長の $\frac{1}{2}$ あるいは $\frac{1}{3}$ という発想が認められることは当時 $\frac{1}{2}$ をも1単位とする計測法が存在したことを示唆している。ちなみに床面の2石の長さを先述の単位により示せば、2 $\frac{1}{2}$ 単位、4 $\frac{1}{3}$ 単位となり、ここにも $\frac{1}{2}$ 単位の使用を認め得るであろう。

第2に、石室を構築するという土木工事を行うに際して $\frac{1}{2}$ 単位すなわち3cmという単位が果たして有効かということである。特に本墳の様に石室石材の硬度が高い場合、その感を一層強く持つ。また、仕口部分の割り込みは、比較的残存状態の良かった主軸に直交する部分によると、2.0cmから5.0cm程度まで深さに幅がある。もしも $\frac{1}{2}$ 単位があるとすれば、扉石を嵌入するという点で、精密な工作を必要とするこの部分にこそ、その完数値が得られてしかるべきであろう。つまり、この仕口部分については、設計段階である程度の計画はあったであろうが、むしろ用石の状態に応じて、現地で、より適切な状態になるように割り込まれたものと考えられる。最も精密な工作を施すべきこの仕口部分においてさえ、この程度の精度なのである。まして石室全般にわたって $\frac{1}{2}$ の単位が用いられていたとはとても考えられない。

以上から、石槨部高については2 $\frac{1}{2}$ 単位をもって設計され、構築されたものと考えておきたい。

次に羨道部についてであるが、平面図を一見して判る通り、石槨部主軸から2°20'その主軸を東に振って構築されている。このことについては意図的な設計あるいは設計時のミスといった設計段階に起因するものではなく、現地における地割りの段階でミスを犯したのと考えておきたい。なお、羨道部における主軸の振れを考慮に入れると、右側壁の設計段階における羨道長は3.30mとなり、これは11単位に相当することになる。

羨道部における天井の高さは、現存部では石槨部のそれよりも0.30~0.37m高く、おそらくは1単位を意図して設計されたものと思われる。また入口側の復原構築した天井石は、それよりも $\frac{1}{2}$ 単



第51図 巨勢山323号墳石室の築造企画

位高く設計されたのであろう。

以上から、羨道部は長さ11単位、幅5単位、高さ4単位および4½単位で設計されたものと考え  
ておきたい。

さて、以上により、本境の石室はかなり精密な設計を経て築造されたものであることが明らか  
になった。それでは、1単位=0.30m=唐尺の1尺とみなしてよいものかどうかという問題が残る。  
残念ながら、現在の筆者は、この問いに対して明確な解答を持ち合わせていない。諸兄の御教示を  
乞うと共に、後考を俟って再論したいと考える次第である。

- 註1 藤田和尊「奈良縣御所市室 巨勢山地谷10号墳発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第4集、1985年)、P.30  
2 田辺昭三「陶器古高辻群 I」(『平安学術研究論集』第10号、1966年)、以下須惠壽の型式分類については同書による。  
3 西弘海「B 土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』、『奈良国立文化財研究所学報』第31冊、  
1978年)  
4 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)  
5 田中一広「奈良縣御所市巨勢山古墳群調査概要 II」(『御所市埋蔵文化財調査概報』58-1、1984年)(『奈良県遺跡調  
査概報1983年度』、1984年)  
6 田中一広「御所市 巨勢山古墳群(タケノケ支群)発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1983年度』、1984年)  
7 久野邦雄・中井一夫「大和巨勢山古墳群(埴谷支群)」(『昭和48年度発掘調査概報』、1974年、奈良県教育委員会)  
8 久野邦雄・中井一夫「大和巨勢山古墳群(埴谷支群)」(前出註7文獻)  
9 藤原学「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」(『永末永先生米寿記念論呈論文集』、1985年)  
10 藤田和尊「武器・武具の集中管理と芦屋・西宮地域の群集墳」(『芦の芽』36、1984年)  
11 網干善教「室大屋」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1960年)  
12 白石大一郎「大型古墳と群集墳」(『福原考古学研究所紀要 考古学論叢』第2冊、1973年)  
13 千賀久・田中一広「御所市巨勢山古墳群ミノヤマ支群発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』、1983年)

第 5 章 考 察

## 巨勢山323号墳の使用石材について

大阪府八尾市立利部小学校教諭

奥 田 尚

当古墳に使用されている石材を裸眼と一部を偏向顕微鏡にて観察した。石槨の奥室・前室の石材は全て同質の角閃石黒雲母石英閃緑岩であり、閉塞石は緑色片岩である。

角閃石黒雲母石英閃緑岩：色は灰白色である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明、粒径が2mm～5mm、量が僅かである。長石は白色、粒径が5mm～10mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が3mm～8mm、量が多い。黒雲母はC軸方向によく発達している。角閃石は黒色、柱状、粒径が2mm～7mm、量がごく僅かである。稀に、自形がある。

緑色片岩：色は、暗緑色、緑色、黄緑色部が数mm以下でくり返し縞状を呈する。片理が発達している。緑泥石、絹雲母が見られる。鏡下での観察によれば、構成鉱物は、緑泥石、緑簾石、絹雲母、アクチノ閃石、方解石、パンペリー石、石英、曹長石、スフェン、不透明鉱物である。緑泥石と絹雲母は鱗片状(0.05mm以下)で、アクチノ閃石や緑簾石を伴って、定向配列し、片理を作っている。パンペリー石、緑簾石の一部、方解石、石英は脈状で、片理に平行、または斜交している。

角閃石黒雲母石英閃緑岩と同質の岩石は、当古墳が位置する巨勢山西端部、葛城山の東斜面に広く分布するが、巨勢山付近は風化が著しく、石材を採取しがたい。葛城山麓の関屋から山口にかけての東斜面のいずれからか採取されたと推定される。緑色片岩と同質の岩石は紀の川流域に広く分布する三波川帯の変成岩中の緑色片岩の岩相の一部に酷似する。和歌山市になれば点紋片岩が分布し、奈良県大和上市東方付近になれば顕著な緑色片岩が認められない。検鏡によれば、斜長石の斑晶が発達しかけるような変成度の地域が推定されることから、点紋帯の南縁部が考えられる。緑色片岩が分布し、かつ、点紋帯に近接するようなところで、石材が採取しやすく、近距離であることを考慮すれば、五条市阿田付近の川原が採石地と推定される。

巨勢山323号墳 石室内出土の動物遺存体

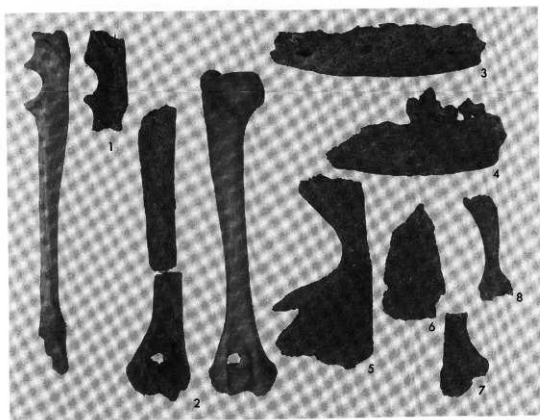
奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター  
 発掘技術研究室 松井 章

同定できた動物遺存体は哺乳類3種、爬虫類1種の計4種であった。それらは石槨部に堆積していた焼土及び灰混りの15層から、焼けて灰白色となった状態で出土した。石室の羨道部には焼土(22層)が堆積し、その奥の石槨部に灰混り層(15層)が広がっていた。22層の上層である21層に含まれる土器は石室再利用に伴う13~15世紀のもので、その時期に古

爬虫類	CLASS REPTILIA
スッポン	<i>Trionyx sinensis</i>
哺乳類	CLASS MAMMALIA
ウシ	<i>Bos taurus</i>
タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
イヌ	<i>Canis familiaris</i>

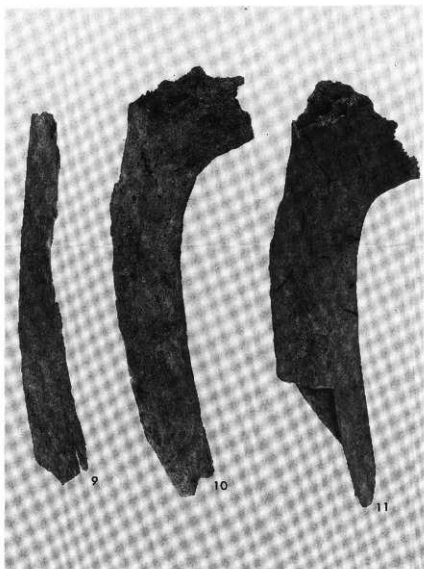
出土した遺存体

墳が開口しており、その間に、入り口近くで火をたいてウシ、イヌ、タヌキ、スッポンなどを調理し、灰を奥に押しやっていたことがわかる。ウシ、タヌキなどは、古代から盛んに良質の皮革の原材料として利用されていることが延喜式などの文献から明らかであり、そうした利用ののちに食用



種名	部位と備考
タヌキ	・左上腕骨 遠位端 (写真) ・中手または中足骨 5点 ・中手または中足骨 2点 ・右尺骨 近位端 半月状切痕 ・左下顎骨 破片面無し
イヌ	・右下顎骨 第1,2 後臼歯共
スッポン	・腹甲板 2点 ・右上腕骨 体部
ウシ	・肋骨 2点及び破片

石塚郡15層内出土の動物遺存体



1. タヌキ尺骨  
(左は現生標本)
2. タヌキ上腕骨  
(右は現生標本)
3. タヌキ下顎骨
4. イヌ下顎骨
5. }
6. } スッポン腹甲板
7. }
8. スッポン上腕骨
9. }
10. } ウシ肋骨
11. }

縮尺

1~8 - 原寸

9~11 - 1/2



となったものであろう。この層の形成された中世では動物を食べたり、死体に触れることは「けがれ」として、強く忌避されていたことである。したがって、このような人里はなれた開口した古墳の中で、他の人の目をしのんで肉を調理して食べたものと思われる。採集できた動物遺存体は、火熱を受けながらも幸運なことに原形を保ったごく一部のもので、実際にそこで調理されたものは、はるかに多かっただろう。

古墳時代以降の人の動物食に対する歴史は、仏教思想や「けがれ」の思想もあって、文献の上からは、ほとんど欠如した問題で、断片的な文献資料から薬と称して賞味されたことがうかがわれるのみである。今回の資料だけでは量も少なく、動物食の存在は指摘できても、実態を明らかにするにはまだまだ不十分である。今後とも中・近世の遺跡から出土した動物遺存体を、たんねんに集成することによって、考古学の側から、文献には語られていない歴史の一側面についてもアプローチが可能であろう。こうした点からこの遺跡において、中世における動物遺存体の検出に成功したことは、上記の問題について新しい視点を切り開くことができるものである。

追) 脱稿後、古代・中世の肉食について関連資料を集成し、考察を加えた。本論とは論旨が異なるが、参照頂ければ幸いである。

松井章1987「養老院牧令の考古学的考察」

『信濃』第39巻4号 PP.1~26

# 奈良県御所市巨勢山323号墳より出土した漆喰の化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 井村由美

1985年度のみどり台住宅開発に伴う巨勢山古墳群の発掘調査で、精細な調査をうけた巨勢山323号墳は、5世紀後葉の古墳を7世紀中葉に破壊して築造されたとみられる1辺14mの方墳で、横口式石槨を有する。

この古墳の発掘調査で、石槨内の数箇所から漆喰が出土した。漆喰は、石槨入口の左右の石材の下部で、石材を固定する目的で塊状に用いられているのが見出されたほか、天井石からも発見され、石槨内への流入土中にも検出されるなど、いくつかの異なる状態で出土した。

このたび、調査担当者によって採集されたそれらの7種の漆喰試料について、筆者らの開発した「古代漆喰分析法」<sup>(1)</sup>を適用して、材質にかかわる化学分析を行い、所見を得たので報告する。

## 試料漆喰の外観

- 試料1 石槨入口の奥壁に向っての右側壁石材の下部の原位置より採取された塊状漆喰数個、総重量900g（最大のもの $9.5\text{cm} \times 8.0\text{cm} \times 8.5\text{cm}$ で370g）。土壌に汚れて黄白色～淡黄褐色の斑状を呈し、表面はもろい。
- 試料2 石槨入口の、奥壁に向っての左側壁石材の下部から採集された、原位置を動いたとみられる塊状漆喰数個、総重量500g（最大のもの $8.5\text{cm} \times 7.5\text{cm} \times 5.5\text{cm}$ で170g）。淡黄褐色～黄土色の斑状を呈し、表面はもろい。
- 試料3 石槨の天井石と右側壁石材の接点に目地状に残存した漆喰の一部。淡黄白色の $1.6\text{cm} \times 1.9\text{cm} \times 4.6\text{cm}$ （7.0g）の漆喰片。
- 試料4 墳丘北トレンチの奥壁石材の外側で、裏込めとして用いられた原位置より採取された白色の漆喰小塊数個総重量7.0g（最大のもの $1.8\text{cm} \times 1.7\text{cm} \times 1.0\text{cm}$ で2.6g）。
- 試料5 流入土が詰まっていた玄室（石槨）内の15層より採集された淡黄白色～白色の斑状の $2.8\text{cm} \times 4.7\text{cm} \times 1.5\text{cm}$ （8.5g）の漆喰塊。
- 試料6 流入土で埋まった石室（羨道）内の24層より採集された白色～黄褐色の斑状の $6.2\text{cm} \times 6.7\text{cm} \times 1.5\text{cm}$ （35.7g）の漆喰塊。白色の石灰岩らしい小石数片を含む。
- 試料7 流入土が詰まっていた玄室（石槨）内の19層より採集された黄褐色のやや扁平な塊状漆喰数個、総重量40g（最大のもの $5.9\text{cm} \times 3.9\text{cm} \times 1.0\text{cm}$ で11.6g）。石灰岩らしい白色の小石を含む。

### 古代漆喰試料の化学分析

漆喰の主成分は石灰岩あるいは貝殻を焼いて得られる炭酸カルシウムを含む水酸化カルシウム  $\text{Ca}(\text{OH})_2$  である。これに、ときに、粘土、砂（無機質）や布、苧（有機物）などを加えて、水や米のとぎ汁、あるいは、ふりの煮汁で練って使用する。漆喰中の  $\text{Ca}(\text{OH})_2$  は長期間空気に曝されると  $\text{CaCO}_3$  に変化するから、結局、漆喰の  $\text{CaCO}_3$  含量%、熱灼減量%、酸不溶性成分%の3つの分析結果を比較すれば、原料純度、有機質、熱分解成分などの混在の可能性、土砂添加の有無などが推定され、また、これら3値の近似は材料、手法の類似を示唆する。

以上の点から、われわれの一人安田は、高松塚古墳の漆喰をはじめとする古墳漆喰の分析にあたり、つぎのような一連の操作により、漆喰の性状にかかわる分析値を能率よく求める方法を案出して、適用してきたが、今回の試料の分析においてもそれを準用した。その操作は、つぎの通りである。

操作A： 分析に適した試料部分を選別し、付着した汚れは削りとりたりして除き、乳ばちで粉砕して均一な試料粉末としたのち、 $120^\circ$  で2時間乾燥する。この中から約0.5gを小ルツボ中に精密にはかりとり、マッフル内で  $850^\circ$  以上で1時間強熱する。デシケータ中で放冷したのち、ルツボ内に残留する酸化カルシウム  $\text{CaO}$  を主体とする残留物を秤量する。熱灼前後の秤量値の差から熱灼減量が知られるので、最初の試料秤量値との比から熱灼減量%が算出される。純  $\text{CaCO}_3$  ならば43.97%となるはずであるが、これよりずれるのは、不純物、土壌成分物質、有機物などの混在の結果と考えられる。

操作B： 操作Aで得られたルツボ内の熱灼残分を蒸留水少量でうろおしたあと、5mlの濃塩酸と1~2滴の濃硝酸を加えて溶解させる。内容をビーカーへ移し、一たんゆるやかに加熱したあと10mlの蒸留水を加える。この際、不溶性残分があれば、溶液を遠心分離機にかけて溶液から分離し、蒸留水で洗ったのち乾燥して秤量する。この重量から試料中の酸不溶性成分（ケイ酸塩類）含量%の算出ができる。この値は漆喰への土砂の混在に関係がある。

操作C： 操作Bの不溶性残分から分けた酸性溶液と酸不溶性残分を洗った液とを合し、アンモニア水を加えて、リトマス・アルカリ性としたのち、シュウ酸アンモニウム試液を加えてシュウ酸カルシウムの白色沈殿を析出させる。溶液を  $70\sim 80^\circ$  で1時間加熱してから、沈殿をろ紙上に濾しわけ蒸留水で充分洗浄後、ろ紙の底を破って100mlの熱水で沈殿を下のビーカーの中に洗い落とし、ついで硫酸（1+1）30mlをろ紙上に注いで同じく洗いおとす。ビーカーを加熱してビーカーの中の沈殿を溶解させたのち、内容を200mlのメスフラスコに移し、蒸留水を加えて正確に200mlとし、これをカルシウム定量用の試料検液とする。検液20mlを正確にとり、蒸留水30mlおよび上記硫酸5mlを加え、 $60\sim 70^\circ$  を保ちながら0.1規定過マンガン酸カリウム溶液で微紅色を呈するまで滴定する。消費された0.1規定過マンガン酸カリウム溶液量はシュウ酸カルシウムのシュウ酸と当量であるから、これらに対応する  $\text{CaCO}_3$  量が算出され、試料採取量との比から漆喰中の  $\text{CaCO}_3$  含量%

が算出される。この%が漆喰の純度%に相当する。

#### 原子吸光分析による漆喰中の微量成分の定量

漆喰中の少量ないし微量成分としては、マグネシウム (Mg) と鉄 (Fe) が考えられる。これらの含量の値も漆喰原料の比較にあたって、一つの指標となると考えられる。これらの成分の能率的な定量分析法としては、原子吸光分析法を適用した。方法は、操作Aの項で調製した試料粉末約100mgを精密にはかりとり、0.4規定硝酸を加えて溶かし、全量を正確に50mlとしたものを試料原液とする。この原液から各分析目的金属に応じた測定試料溶液を調製し、これを原子吸光分析装置にかけて、吸光度を測定し、一方で測定成分元素 (Mg、Fe、Pb) の標準濃度対吸光度の検量線を作成し、これと対照させて測定試料溶液中の各成分の分量%を算出する。なお、Pb (鉛) について値を求めたのは、かつて高松塚石槨内壁の漆喰や東明神古墳石槨床面の漆喰に異例の高含量のPbが含まれていた例があるので、それとの対比をみるためである。機器は日立180-60型原子吸光光度計と日立056型卓上記録計を使用した。測定条件を表1に示す。

表1 原子吸光光度計の測定条件

分析成分	ランプ (HLA-3型)	燃焼ガス	ランプ電流 (mA)	使用光の波長 (nm)
Mg	Mg専用	空気-アセチレン	7.5	285.4
Fe	Fe専用	"	10.0	248.8
Pb	Pb専用	"	7.5	283.7

#### 分析結果

以上の実験の結果、巨勢山323号墳出土の漆喰7試料について得られた分析値を一括表示すれば、表2のとおりである。

表2 巨勢山323号墳出土漆喰の分析値

試料漆喰	熱灼減量 (%)	酸不溶性成分 (%)	CaCO <sub>3</sub> (%)	Mg (%)	Fe (%)	Pb (%)
1 石槨入口右側石下	43.91	0.80	90.33	0.103	0.070	< 0.01
2 石槨入口左側石下	42.08	2.96	86.27	0.102	0.127	"
3 天井石・右側石間目地	44.60	0.94	90.21	0.159	0.056	"
4 奥壁石材外側裏込め	43.57	1.48	89.14	0.209	0.066	"
5 石槨内土層土 (7層) 出	43.66	1.34	89.49	0.106	0.057	"
6 羨道内土層土 (20層) 出	43.25	2.19	89.09	0.133	0.092	"
7 石槨内土層土 (12層) 出	42.83	2.56	87.70	0.178	0.114	"

### 漆喰中に混在する小石の分析

巨勢山323号墳より採取された漆喰7試料のうち、試料6、7は2mm～4mm程度の灰白色の小石を含む。この小石に希塩酸を滴下してみたところ、小石は小泡を発生しながら完全に溶解したので、石灰岩であろうと推測し、 $\text{Ca}^{2+}$ ならびに $\text{CO}_3^{2-}$ についての定性分析を行ったところ、両者が検出された。

これらのことから、漆喰中の小石が石灰岩片( $\text{CaCO}_3$ )であることが確認できた。

### 考 察

今回分析した巨勢山323号墳出土の漆喰7試料は、発掘調査時に、石室に充満していた流入土砂を排出する際に見出されて、採取あるいは採集されたものであると聞いている。従って、土壌汚染による異常値の出現を懸念したが、その恐れは杞憂に終り、結果的には、筆者らが古代漆喰に関して15年にわたる分析経験から推論するところに副う結果が得られた。

その諸点は次のとおりである。

(1) 酸不溶性成分の値のやや大きいことから土壌汚染が示唆される試料2、7で、漆喰主成分の $\text{CaCO}_3$ が86～87%を示したほかは、他の試料では89～91%に近似し、また酸不溶性成分、熱灼減量%でも相互に僅差であるところから、本古墳築造時に調製された漆喰は、用途・使用個所にかかわらず均質であったと考えられる。とくに試料1、3は石塚の原位置での採取試料であるだけに、その値の近似には重みがある。

(2) 筆者らは、約40例に及ぶ畿内の古墳漆喰の分析から「古墳漆喰の化学分析値には技法の地域性が反映している」という見解を得ている。それは、「漆喰の調製に関与した各地域の技術者集団の技法の差を示す」とも考えられるということである。

たとえば、漆喰の主成分である $\text{CaCO}_3$ の含量多値は、大和では飛鳥地域の古墳漆喰が93～95%、桜井地域の古墳漆喰が93%、葛城地域の古墳漆喰が90～91%、斑鳩・平群地域の古墳漆喰が88%前後にまとまることを知見してきた。

今回分析した巨勢山323号墳の漆喰の $\text{CaCO}_3$ 多値は90%近傍に集中していて、まさに葛城地域の技法の特性を示しているようであることは、興味深いことである。

(3) 筆者らは、これまでに、同じ葛城地域に所在する新庄町の寺口古屋敷古墳(横穴式小石室、7世紀中葉や後半)と、同 神明神社古墳(横穴式小石室、7世紀中葉前後)の両漆喰使用古墳で、その漆喰の $\text{CaCO}_3$ 含量多値が91.59%、90.37%のように葛城地域の地域値を示し、かつ、両古墳の漆喰は、ともに、その素材物質にあたる小石灰岩片を含むことを見出してきた。

今回、その出土漆喰を分析した巨勢山323号墳が、古墳の年代、石室構造、漆喰分析値と小石灰岩片の含有などの資料のすべての点において、上記2古墳ときわめてよく似た結果を示したことに、筆者は驚きと喜びを覚える。葛城地域の7世紀中葉頃の古墳の漆喰に共通する技法は、今の新庄町か

ら、南は御所市南部まで及んでいたことが初めて明かになったわけである。本古墳の漆喰出土の示唆する意味は決して単純ではないのである。

(1986年5～6月分析)

註1 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』吉川弘文館（1986）

2 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝説に関する二、三の考察」『藤原考古学研究所論集 第七』吉川弘文館（1984）

奈良県御所市巨勢山321号墳の土壌より検出された  
赤色ならびに黒色を示す土壌部分の材質定量分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 井村由美

1985(昭和60)年度のみどり台住宅開発にともなう発掘調査をうけた巨勢山古墳群中の巨勢山321号墳は、木棺直葬を埋葬主体とする。その墓壇は、長辺1.97m、短辺1.07m、深さ0.56mを測り、6世紀前葉の築造と考えられる。この主体部に先行する土壌(以下先行土壌と称する)として、長辺1.83m、短辺1.63m、深さ0.92mの赤色土を埋納したかともみられる(調査者の見解)ような土壌が検出され、上記主体部の墓壇は、その西半部を切り込んで掘削されている。

今回、その先行土壌で検出された赤色土壌について、材質にかかわる化学分析を依頼されたので、まず、筆者らの<sup>(1)</sup>常法とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析で、水銀朱混在の有無の確認を行ない、つぎに、赤色土壌の鉄成分含量を主とする、土壌の材質定量分析を行なうとともに、試料土壌の黒色部分については、観察される炭素微粒の確認のための熱灼試験も併せ行ない所見を得たので報告する。

1986年5月7日、調査担当者藤田和尊氏の持参された、先行土壌より採取の全体的に赤味を帯びた約1.05kgの土壌の数箇所の約5mgずつを、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行なった結果、この土壌には $Hg^{2+}$ は検出されず、 $Fe^{3+}$ のみが確認された。したがって、水銀朱( $HgS$ )による赤色でないことが明らかとなった。しかし、対照土壌がないために、 $Fe^{3+}$ の検出はベンガラ( $Fe_2O_3$ )成分によるものか、土壌本来の鉄成分によるものかの判定は不可能であると判断した。

このことに関して新たに別試料<sup>(2)</sup>5種が藤田氏より提供された。この試料は、前試料にくらべて、赤色および黒色を呈する部分を含む土壌であり、対照土壌として、土壌の埋土と地山部分の土壌も同時に提供された。

先行土壌での採取位置を示唆するこれらの5試料を「黒土部分」、「黒・赤土部分」、「赤土部分」、「埋土部分」、「地山部分」と命名して筆者らの常法とする<sup>(3)</sup>胎土分析法を適用して土壌の材質定量分析を行なった。また、筆者らは、試料「黒土部分(炭素微粒を含む)」ないし「赤土部分」は、「焼土ではないかと思う」という藤田氏の見解に着目して、5試料について、熱灼試験をあわせ行ない、その際の各試料土壌の変色や変化を観察して、同氏の見解にコメントできる結果を得た。

### 分析操作の概要

各試料土壌は、乳鉢で粉末化して、120°で1時間乾燥した後、それぞれ一定量（1g）を精密に量りとり、濃塩酸40mlを加えて1時間加熱したのち、酸可溶性成分の溶けている溶液と酸不溶性成分とをガラスろ過器で濾し分けて分離し、ガラスろ過器上の酸不溶性成分（ケイ酸塩類）は乾燥状態で精秤する。溶液のほうは蒸留水で一定量（250ml）に希釈してから二分し、その一方の一定量（200ml）には、アンモニア水溶液を加えてアルカリ性にし、その際析出する沈殿をろ紙上に濾しとり、加熱乾燥した後、これをろ紙ごとルツボに移して強熱した後、ルツボ内に残る物質を秤量すれば、酸化鉄（ $Fe_2O_3$ ）と酸化アルミニウム（ $Al_2O_3$ ）の合計量を得る。二分した残余液50mlの一定量（1回に20mlずつで2回実験する）をとって、ヨウ素法滴定を利用して鉄成分（ $Fe^{3+}$ ）の定量を行ない、 $Fe_2O_3$ の量に換算する、さきの $Fe_2O_3$ と $Al_2O_3$ の総量から $Fe_2O_3$ 量をさし引けば $Al_2O_3$ 量を求める。このようにして得られる酸不溶性成分・酸化鉄（ $Fe_2O_3$ ）・酸化アルミニウム（ $Al_2O_3$ ）の各成分量の採取試料量に対する比をとることにより、試料土壌中の各成分の含量％が算出される。

ほかに、土壌の特徴を調べる一助として、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、チタン（Ti）について原子吸光分析法で定量分析を行ない、それぞれ酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化チタン（ $TiO_2$ ）の含量％として算出する。

別に、さきの、120°1時間乾燥の各試料、約0.5gずつをそれぞれ小ルツボ中に精密に量りとり、500°で1時間強熱する。デシケーター中で放冷したのち、ルツボ内の残留物を秤量する。熱灼前後の秤量値の差から熱灼減量が知られるので、最初の試料秤量値との比から熱灼減量％が算出される。

この際、熱灼前後の土壌色調の変化についてもとくに観察を行なった。

### 分析結果

前項の操作で分析した試料の分析値は表1に、熱灼減量％、熱灼前後の土壌色調の変化については表2に示すとおりである。

表1 巨勢山321号墳の先行土壌より採取の数種の土壌の分析値

試料土壌	化 学 分 析 値					
	主 成 分			微 量 成 分		
	酸不溶性成分 (%)	$Fe_2O_3$ (%)	$Al_2O_3$ (%)	CaO (%)	MgO (%)	$TiO_2$ (%)
黒土部分	81.92	4.84	7.20	0.018	0.033	0.609
黒・赤土部分	83.19	4.32	7.38	0.020	0.028	0.575
赤土部分	84.48	4.49	6.59	0.013	0.028	0.544
埋土部分	83.89	4.32	7.40	0.020	0.018	0.580
地山部分	82.43	4.60	6.94	0.048	0.006	0.167



表2 巨勢山321号墳の先行土壌より採取の数種の土壌の熱灼減量(%)と、熱灼前後の色調の変化

試料土壌	熱灼減量(%)	熱灼前の色調	熱灼後の色調
黒土部分	4.82	灰黒色	帯赤橙褐色
黒・赤土部分	4.41	黒褐色	"
赤土部分	2.27	帯赤橙褐色	"
埋土部分	4.24	黄褐色	"
地山部分	3.80	淡黄褐色	帯赤暗黄褐色

## 考 察

表1の分析結果より、土壌の酸不溶性成分%、 $Fe_2O_3$ %、 $Al_2O_3$ %の主成分、さらには $CaO$ %、 $MgO$ %、 $TiO_2$ %の微量成分などすべての分析値において、5試料間に顕著な差は認められないことがわかった。特に、赤色にかかわる $Fe_2O_3$ %に関して差が見られないということは、5試料土壌はともに本古墳所在地の土壌である地山土壌(「地山部分」)と同一質であると判定できる。したがって、赤色土壌物質として $Fe_2O_3$ 含量の多い在地以外のベンガラ質の土壌が持ちこまれた形跡は考えられない。

つぎに、表2の分析結果では、「黒土部分」と「黒・赤土部分」の熱灼減量%が最も大きく、「埋土部分」がこれに次ぎ、「赤土部分」は「地山部分」よりも少なく最低値を示している。

この関係は、表2に併記した熱灼前後における各試料土壌の色調の変化をあわせ考えるとよく理解できるので、500°1時間の加熱処理によって、「黒土部分」、「黒・赤土部分」試料では、黒色がともに完全に消失して「赤土部分」試料と同一色調(帯赤橙褐色)になった。これは、「黒土部分」、「黒・赤土部分」土壌の黒色の原因物質が、すでに肉眼でも観察されたように炭素微細粒子(C)であり、それが高温加熱で $C + O_2$ (酸素)→ $CO_2$ (炭酸ガス)に変化して逸散したためである。その際同時に、土壌中の鉄成分の一種として存在した黄褐色の含水酸化鉄 $Fe(OH)_3$ は、強熱による脱水反応で、「赤土部分」の鉄成分のかたちである $Fe_2O_3$ (赤褐色)に変化したのである。

後述するように、いつの時期かに一たん加熱をうけて鉄成分がすでに $Fe_2O_3$ に変化し、かつ炭素微粒も含まない「赤土部分」試料の熱灼減量%が最低で、色調も熱灼処理前後で変化が見られなかった点は十分に首肯されるとともに、有機質を含みぬ「地山部分」や若干の有機質を含むと想定される「埋土部分」試料(土壌)の示す熱灼減量%と色調の変化の意味も同様に考えて矛盾はないであろう。

5種の土壌試料は、本来、同一地の土壌であったが、土壌の掘削や埋めこみ時の条件や層位の差違に応じて、発掘時に外観・色調の若干異なる5種の土壌試料となって出土したということであろう。

その場合、「黒土部分」や「黒・赤土部分」試料のように明瞭な炭素微細粒を含む部分と、それ

に接する、帯赤色に固結した土壌部分の存在は、土壌あるいはその周辺の土壌部分において「焚火」(葬送儀礼に関係するか否かは別として)があったことを示唆しており、それが、発掘時における調査者の「焼土」という観察所見に対応するものと思われる。(1987年2月分析)

註1 安田博幸・鶴崎曉子：「尼崎市田能遺跡47号棺からの水銀朱の検出」『古代学研究』第53号(1968)

2 試料採取位置および層位については、本報告書本文中の土壌の平面・断面図を参照されたい。

3 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』吉川弘文館(1966)